

社 会

(歴史的分野)

発行者			教科書の記号・番号	判型 総ページ数	検定済年
番号	名称	略称			
2	東京書籍	東 書◆	歴史 002-72	A B 300	令和 6 年
17	教育出版	教 出◆	歴史 017-72	A B 317	
46	帝国書院	帝 国◆	歴史 046-72	A B 334	
81	山川出版社	山 川◆	歴史 081-72	A B 296	
116	日本文教出版	日 文◆	歴史 116-72	A B 324	
225	自由社	自由社◆	歴史 225-72	A B 変型 312	
227	育鵬社	育鵬社◆	歴史 227-72	A B 308	
229	学び舎	学び舎	歴史 229-72	A 4 308	
236	令和書籍	令 書	歴史 236-73	A 5 520	

※「発行者 略称」欄にある◆は、「学習者用デジタル教科書」（学校教育法第34条第2項に規定する教材）の発行予定があることを示しています。

1 調査の対象となる教科書の冊数と発行者

冊 数	発 行 者 の 略 称
9 冊	東書、教出、帝国、山川、日文、自由社、育鵬社、学び舎、令書

2 学習指導要領における教科・分野の目標等

【社会科の目標】

社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 我が国の国土と歴史、現代の政治、経済、国際関係等に関して理解するとともに、調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 社会的事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情、国民主権を担う公民として、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることや、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

【歴史的分野の目標】

社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- (2) 歴史に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し複数の立場や意見を踏まえて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3) 歴史に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の歴史に対する愛情、国民としての自覚、国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を尊重しようとするものの大切さについての自覚などを深め、国際協調の精神を養う。

【参考：中学校学習指導要領解説 社会編 「第1章 総説 2 社会科改訂の趣旨及び要点」から抜粋】

(2) 各分野の改訂の要点

〔歴史的分野〕

歴史的分野における改訂の要点は、主に次の5点である。

ア 歴史について考察する力や説明する力の育成の一層の重視

各中項目のイの(ア)に「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を踏まえた課題（問い）の設定などに結び付く着目する学習の視点を示し、類似や差異を明確にし、因果関係などで関連付ける等の方法により考察したり、表現したりする学習について示した。

また、各中項目のイの(イ)に、「各時代を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現」する学習を明示した。平成20年改訂では内容の(1)「歴史のとらえ方」の中項目ウにおいて、「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して、各時代の特色をとらえさせる」と示されてきた。今回の改訂では、中項目ごと

にこれらを示し、「まとめ」としての学習を行うことを一層明確にしたものである。

イ 歴史的分野の学習の構造化と焦点化

(1)、(2) …の中項目内のアに示した「知識及び技能を身に付ける」学習と、イに示した「思考力、判断力、表現力等を身に付ける」学習との関係や、それらの各事項に示した歴史に関わる個別的な事象同士の関係を明確にするために、学習内容と学習の過程を構造的に示した。歴史的分野における「理解」については、平成20年改訂においても「思考や表現の過程などを踏まえて学習内容を十分に分かりながら身に付けること」と示されてきたが、今回の改訂ではこの趣旨を一層明確にするために、各中項目のイの(ア)に、「理解」に向かう学習の過程における考察や表現等を示したものである。

従前も学習内容の構造化や焦点化については示してきたところであるが、今回の改訂では、学習の過程を含めて構造的に示すことによって、大項目、中項目及び各事項のねらいに基づいた学習が展開し、アに示す「知識及び技能を身に付ける」学習と、イに示す「思考力、判断力、表現力等を身に付ける」学習を有機的に結び付けて、課題追究的な学習の実現を図った。また、学習の構造化と学習のねらいを明確にすることによって、学習の際に扱うべき歴史に関わる諸事象の精選を図ることとしたものである。

ウ 我が国の歴史の背景となる世界の歴史の扱いの一層の充実

グローバル化が進展する社会の中で、我が国の歴史の大きな流れを理解するために、世界の歴史の扱いについて、一層の充実を図った。

平成20年改訂においても、我が国の歴史に関わる事象に影響を与えた世界の動きについては一層の関連付けを図って学習するように示してきたが、今回の改訂では、高等学校地理歴史科に「歴史総合」が設置されることを受け、我が国の歴史に間接的な影響を与えた世界の歴史についても充実させた。例えば、元寇をユーラシアの変化の中で捉える学習や、ムスリム商人などの役割と世界の結び付きに気付かせる学習など、広い視野から背景を理解できるよう工夫したものである。

エ 主権者の育成という観点から、民主政治の来歴や人権思想の広がりなどについての学習の充実

民主政治の来歴や、現代につながる政治制度や人権思想の広がりについての学習の充実を図った。例えば、古代の文明の学習では民主政治の来歴を、近代の学習では政治体制の変化や人権思想の発達や広がりを、現代の学習では、男女普通選挙の確立や日本国憲法の制定などを取り扱うこととした。

オ 様々な伝統や文化の学習内容の充実

我が国の様々な伝統や文化について学ぶことは、これまでも歴史的分野で重視されてきたねらいの一つである。今回の改訂においても、歴史的分野の目標の(2)で、「伝統と文化の特色」などを考察すること、目標の(3)で「国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を尊重しようとするものの大切さについての自覚などを深め」ることが示されている。内容のAの「(2)身近な地域の歴史」において、具体的な事柄を通して受け継がれてきた伝統や文化への関心を高めることや、各中項目における伝統や文化の特色の理解につながる学習とともに、新たに内容のBの(2)や(3)において、「琉球の文化」や「アイヌの文化」についても触れることとし、学習内容の一層の充実を図った。

3 教科書の調査研究

(1) 内容

ア 調査研究の総括表（調査結果は「別紙1」）

調査研究項目（調査研究の対象）	対象の根拠（目標等）	数値データの単位
a 時代区分別のページ数、割合	歴史・目標（1）	ページ数、%
b 取り上げられている歴史上の人物の数	歴史・目標（3）	人
c 取り上げられている主な文化遺産の数	歴史・目標（3）	個
d 世界の歴史について取り上げている箇所数	歴史・目標（1） 学習指導要領改訂の要点 ウ・エ	箇所
e 身近な地域の歴史（東京に関する歴史的事象）を取り上げている箇所数	歴史・目標（2）（3） 学習指導要領改訂の要点 オ	箇所
f 発展的な内容を取り上げている箇所数	学習指導要領総則	箇所

イ 調査項目の具体的な内容（調査結果は「別紙2」）

① 調査項目の具体的な内容の対象とした事項

調査研究事項のb、c、e、fとの関連で、次の事項について具体的に調査研究する。

b 歴史上の人物名（別紙2-1）

c 主な文化遺産（別紙2-2）

e 身近な地域の歴史（東京に関する歴史的事象）を取り上げている内容（別紙2-3）

f 発展的な内容の扱い

<その他>

*1 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱い（別紙2-4）

*2 国旗・国歌の扱い（別紙2-5）

*3 神話や伝承を知り、日本文化や伝統に関心をもたせる資料（別紙2-6）

*4 北朝鮮による拉致問題の扱い（別紙2-7）

*5 防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱い（別紙2-8）

*6 脱炭素化に関する扱い（別紙2-9）

*7 障害者理解に関する扱い（別紙2-10）

*8 オリンピック・パラリンピックの扱い（別紙2-11）

*9 固定的な性別役割分担意識に関する記述等（別紙2-12）

② 調査対象事項を設定した理由等

歴史的分野の目標及び中学校学習指導要領解説 社会編 第1章 総説 2 社会科改訂の趣旨及び要点(2) 改訂の要点〔歴史的分野〕を基に設定した調査研究の総括表で取り上げた事項の内容を、具体的に調査することにより、各社の方針を明確にする。

- ・ 歴史上の人物や文化遺産について学習する際の留意点として、身近な地域の発展に寄与した人物や、身近な地域の歴史に関わる文化遺産を取り上げるに当たっては、小学校における地域や我が国の歴史に関する学習との関連にも留意することが挙げられており、その扱いについて調査する。（b、c）
- ・ 内容のAの「(2) 身近な地域の歴史」において、具体的な事柄を通して受け継がれてきた伝統や文化への関心を高めることや、各中項目における伝統や文化の特色の理解につながる学習については、これらを取り上げることで歴史上の出来事を具体的な事物や情報を通して理解することができるとともに、それを自らが生活する日常の空間的な広がりの中で実感的に捉えることができる学習の場となることから、その扱いについて調査する。（e）
- ・ 発展的な内容については、学習指導要領第1章総則「第2 教育課程の編成 3 教育課程の編成における共通事項 (1) 内容等の取扱い イ」において、「学校において特に必要がある場合には、第2章以下に示していない内容を加えて指導することができる。」と示されている。また、(3)「指導計画の作成等に当たっての配慮事項 イ」では、「各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること」と示されている。これらのこ

とから、発展的な内容の扱いの有無、取り上げている内容の具体的な学習の内容について調査する。(f)

- ・ 我が国の位置と領土をめぐる問題については、学習指導要領に基づき、これらの問題を正しく理解できるようにするため、その扱いについて調査する。(＊1)
- ・ 国旗・国歌については、学習指導要領に基づき、国旗・国歌に対する正しい認識をもたせ、それらを尊重する態度を育てることが大切であることから、その扱いについて調査する。(＊2)
- ・ 神話や伝承を知り、日本文化や伝統に関心をもたせる資料については、学習指導要領の内容の取扱いに「神話・伝承などの学習を通して、当時の人々の信仰やものの見方などに気付かせる」とあることから、生徒に興味や関心をもたせることのできる資料について調査する。(＊3)
- ・ 東京都教育委員会は、教育目標の基本方針1として「人権尊重の精神と社会貢献の精神の育成」を掲げ人権教育を推進してきた観点から、児童・生徒が人権尊重の理念を正しく理解できるようにするため、北朝鮮による拉致問題の扱いについて調査する。(＊4)
- ・ 東京都では、自然災害における被害を最小化し、首都機能の迅速な復旧を図る総合的なリスクマネジメント方策の確立が喫緊の課題であり、防災教育の普及等により地域の防災力の向上が重要であることから、防災や自然災害における関係機関の役割等について考察させることを通じて、これらの問題を正しく理解できるようにするため、防災や自然災害時における関係機関の役割等の扱いについて調査する。(＊5)
- ・ 学習指導要領に基づき、環境にかかる諸問題を考察させることを通じて、これらの問題を正しく理解できるようにするため、脱炭素化に関する扱いについて調査する。(＊6)
- ・ 東京都教育委員会の基本方針1である「人権尊重の精神」と「社会貢献の精神」の育成を踏まえ、障害のある人も障害のない人もともに尊重し合いながら活躍できる社会、共生社会の実現を目指す上で、障害のある幼児・児童・生徒に対する理解を深められるようにするため、その扱いについて調査する。(＊7)
- ・ 東京都教育委員会教育目標の基本方針2・3に基づき、文化・スポーツに親しみ、国際社会に貢献できる日本人を育成するという観点から、オリンピック・パラリンピックの扱いについて調査する。(＊8)
- ・ 東京都教育委員会の基本方針1及び東京都の男女平等参画推進の施策を踏まえ、固定的な性別役割分担意識の解消や、「無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)」に気付いて言動等を見直していくなど、男女の平等を重んずる態度を養うことができるよう、その扱いについて調査する。(＊9)

③ 調査研究の方法

- b 歴史上の人物名を抽出し、時代区分により整理する。
- c 主な文化遺産(国宝、重要文化財、世界遺産等、国家や社会の発展を象徴する文化遺産)を抽出し、時代区分により分類整理する。
- e 東京に関する歴史的事象を取り上げている内容を調査する。
- f 発展的な内容については、義務教育諸学校教科用図書検定基準第2章2(16)に基づき、発展的な学習内容以外のものと区別して、発展的な学習内容であることが明示されているものを整理する。

<その他>

- ＊1 我が国の位置と領土をめぐる問題の扱いについて、北方領土、竹島、尖閣諸島等に関する項目及び記述の概要を調査する。
- ＊2 国旗・国歌について取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- ＊3 神話や伝承について取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- ＊4 北朝鮮による拉致問題について取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- ＊5 防災や、自然災害時における関係機関の役割等の扱いについて取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- ＊6 脱炭素化について取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- ＊7 障害者理解について取り上げている項目及び記述の概要を調査する。
- ＊8 オリンピック・パラリンピックについて取り上げている項目及び記述の概要(項目)を調査する。

＊ 9 固定的な性別役割分担意識に関する記述等を調査する。

(2) 構成上の工夫（調査結果は「別紙 3」）

以下の観点により、箇条書きで記述する。

- ア 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた工夫
- イ ユニバーサルデザインの視点
- ウ デジタルコンテンツの扱い

「別紙１」【（１）内容 ア 調査研究の総括表】（中学校 社会 歴史的分野）

項目 発行者	a 時代区分別のページ数、割合						b 取り上げられている歴史上の人物の数						c 取り上げられている主な文化遺産の数						d 世界の歴史について取り上げている箇所数	e 身近な地域の歴史（東京に関する歴史的事象）を取り上げている箇所数						f 発展的な内容を取り上げている箇所数
	古代までの日本	中世の日本	近世の日本	近代の日本と世界	現代の日本と世界	計	古代までの日本	中世の日本	近世の日本	近代の日本と世界	現代の日本と世界	計	古代までの日本	中世の日本	近世の日本	近代の日本と世界	現代の日本と世界	計		古代までの日本	中世の日本	近世の日本	近代の日本と世界	現代の日本と世界	計	
東 書	42 16.7%	34 13.5%	46 18.3%	100 39.7%	30 11.9%	252	67	107	128	147	38	487	52	40	27	15	1	135	59	4	0	32	42	20	98	0
教 出	39 14.6%	36 13.5%	48 18.0%	108 40.4%	36 13.5%	267	68	114	159	172	39	552	53	40	30	14	3	140	57	2	0	22	36	14	74	0
帝 国	48 16.4%	42 14.4%	56 19.2%	114 39.0%	32 11.0%	292	58	110	134	169	41	512	50	42	33	6	0	131	59	1	1	27	29	13	71	0
山 川	48 17.8%	40 14.8%	52 19.3%	100 37.0%	30 11.1%	270	80	163	192	164	37	636	42	38	24	15	2	121	70	1	0	30	34	11	76	0
日 文	46 16.7%	40 14.5%	50 18.2%	105 38.2%	34 12.4%	275	61	114	136	156	18	485	44	40	37	12	1	134	55	2	0	22	29	21	74	0
自由社	50 18.6%	36 13.4%	44 16.4%	106 39.4%	33 12.3%	269	120	146	178	223	115	782	45	28	19	7	1	100	56	2	2	30	45	17	96	0
育鵬社	40 15.4%	32 12.3%	50 19.2%	98 37.7%	40 15.4%	260	79	112	206	212	67	676	49	36	30	12	0	127	57	3	1	26	26	17	73	0
学び舎	44 16.2%	32 11.8%	50 18.4%	110 40.4%	36 13.2%	272	55	81	146	141	42	465	34	25	19	11	3	92	59	2	0	32	43	20	97	0
令 書	102 23.0%	64 14.4%	86 19.4%	142 32.1%	49 11.1%	443	214	219	299	229	100	1061	18	15	15	6	0	54	69	5	0	22	22	10	59	0
平均値	51.0	39.6	53.6	109.2	35.6	288.9	89.1	129.6	175.3	179.2	55.2	628.4	43.0	33.8	26.0	10.9	1.2	114.9	60.1	2.4	0.4	27.0	34.0	15.9	79.8	0.0

a 「時代区分別のページ数、割合」については、各社の教科書の目次から各時代区分のページ数を算出した。

b 「取り上げられている歴史上の人物の数」については、時代区分別に、取り上げられている歴史上の人物の数を数えた。

c 「取り上げられている主な文化遺産の数」については、時代区分別に、国宝、重要文化財、世界遺産等、国家や社会の発展を象徴する文化遺産の数を数えた。

d 「世界の歴史について取り上げている箇所数」については、時代区分別に、世界の歴史について記述している箇所数を数えた。

e 「身近な地域の歴史（東京に関する歴史的事象）を取り上げている箇所数」については、時代区分別に、現在の東京都域内で起こった歴史的な出来事や東京に残る文化財について記述している箇所数を数えた。

「別紙２－１」【(１)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 古代まで】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者		人物名 古代まで				
東書	ハンムラビ王	好太王（広開土王）	小野妹子	坂上田村麻呂	紫式部	アマノウズメ
	孔子	讚	中大兄皇子（天智天皇）	最澄	清少納言	アメノタチカラオ
	始皇帝	珍	中臣鎌足（藤原鎌足）	空海	オオクニヌシ	
	アレクサンドロス大王	濟	蘇我蝦夷	菅原道真	アマテラス	
	シャカ（釈迦）	興	蘇我入鹿	アテルイ	スサノオ	
	イエス	武（ワカタケル大王）	阿倍仲麻呂	藤原氏	ニニギ	
	ムハンマド	蘇我氏	長屋王	藤原道長	神武	
	アッラー	物部氏	聖武天皇	藤原頼通	海幸彦	
	奴国の王	推古天皇	光明皇后	威子	山幸彦	
	卑弥呼	聖徳太子（厩戸皇子）	行基	三条天皇	イザナミ	
光武帝	蘇我馬子	鑑真	後一条天皇	イザナギ		
桓帝	天武天皇	大伴家持	藤原元命	オルフェウス		
霊帝	持統天皇	桓武天皇	紀貫之	ワタツミ		
教出	ハンムラビ王	堯与	煬帝	聖武天皇	紀貫之	伊治皆麻呂
	シャマシュ	広開土王（好太王）	小野妹子	光明皇后	紫式部	紀広純
	孔子	讚	中大兄皇子（天智天皇）	行基	清少納言	嵯峨天皇
	始皇帝	珍	中臣鎌足（藤原鎌足）	大伴家持	イザナギ（キ）	
	アレクサンドロス大王	濟	蘇我蝦夷	柿本人麻呂	イザナミ	
	シャカ（ガウダマニシツダールタ）	興	蘇我入鹿	桓武天皇	アマテラス	
	ヤハウェ	武	大海人皇子（天武天皇）	坂上田村麻呂	スサノオ	
	シヴァ神	則天武后	大友皇子	藤原氏	オオクニヌシ	
	イエス	玄奘	持統天皇	藤原道長	ニニギ	
	ムハンマド	蘇我氏	長屋王	藤原頼通	カムヤマトイワレビコ	
アッラー	蘇我馬子	山上憶良	最澄	ヨモツシコメ		
卑弥呼	推古天皇	阿倍仲麻呂	空海	オルフェウス		
漢委奴国王	聖徳太子（厩戸皇子）	鑑真	菅原道真	阿呂流為		
帝国	ハンムラビ王	広開土王	阿倍仲麻呂	イザナミ	紀貫之	
	シャカ	ワカタケル	聖武天皇	ワケア	最澄	
	イエス	卑弥呼	藤原氏	ババ	空海	
	ムハンマド	聖徳太子	藤原不比等	桓武天皇	清少納言	
	孔子	蘇我氏	光明皇后	坂上田村麻呂	紫式部	
	始皇帝	物部氏	行基	藤原道長	空也	
	ソクラテス	額田郡王女（推古天皇）	鑑真	藤原彰子		
	アテナ女神	蘇我馬子	大伴家持	一条天皇		
	アリストテレス	小野妹子	柿本人麻呂	敦成国王（後一条天皇）		
	アッラー	中臣鎌足（藤原鎌足）	山上憶良	藤原頼通		
アショカ王	中大兄皇子	クシナダヒメ（奇稻田姫）	菅原道真			
奴国の王	天武天皇	スサノオノミコト	アテルイ			
堯与	持統天皇	イザナギ	源頼朝			
山川	ハンムラビ王	始皇帝	堯与（台与）	蘇我入鹿	長屋王	源頼朝
	ファラオ	武帝	陳寿	山背大兄王	大伴家持	最澄
	ヘロドトス	卑弥呼	ワカタケル大王	中大兄皇子	柿本人麻呂	空海
	シャンポリオン	劉備（玄德）	ヲワケの臣	中臣鎌足（藤原鎌足）	山上憶良	八幡神
	ローリンソン	諸葛亮（孔明）	イタワ（イタカ）	蘇我蝦夷	聖武天皇	神功皇后
	プトレマイオス	シヤカ（釈迦、ガウダマニシツダールタ）（ワッヂ）	張安	大海人皇子	光明皇后	藤原氏
	クレオパトラ	ヤハウェ	物部氏	大友皇子	馬場基	菅原道真
	ペリクレス	イエス	蘇我氏	持統天皇	重源	藤原道長
	アレクサンドロス大王	ムハンマド	蘇我馬子	文武天皇	カール	藤原頼通
	カエサル	アッラー	推古天皇	天照大神	玄宗	紀貫之
オクタウィアヌス	カニシカ	聖徳太子（厩戸皇子）	神武天皇	楊貴妃	定朝	
アフロディテ	奴国の王	橘大郎女	鑑真	桓武天皇	清少納言	
孔子	光武帝	小野妹子	行基	坂上田村麻呂	紫式部	

「別紙２－１」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 古代まで】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者		人物名 古代まで									
日文	ハンムラビ王 孔子 始皇帝 アレクサンドロス大王 シャカ ヤハウェ イエス ムハンマド アッラー 倭の奴の国王 卑弥呼 ワカタケル大王 武	讚 珍 済 興 磐井 玄奘 蘇我氏 物部氏 蘇我馬子 推古天皇 聖徳太子（厩戸皇子） 小野妹子 中大兄皇子	中臣鎌足（藤原鎌足） 大海人皇子（天武天皇） 持統天皇 聖武天皇 鑑真 行基 柿本人麻呂 大伴家持 山上憶良 他田舎人大島 稗田阿礼 元明天皇 太安万侶	イザナキ イザナミ アマテラス スサノオ オオクニヌシ ニニギ 神武天皇 藤原氏 桓武天皇 坂上田村麻呂 阿呂流為 最澄 空海	藤原道長 藤原頼通 彰子 一条天皇 菅原道真 威子 紫式部 清少納言 紀貫之						
	自由社	相澤忠洋 ヘロドトス クフ王 ハンチントン 孔子 始皇帝 孟子 荀子 老子 莊子 商鞅 韓非 李斯	墨子 孫子 呉子 ソクラテス アルキメデス カエサル ブルータス ガブリエル アラームハンマド イエス 釈迦 エホバ	卑弥呼 光武帝 漢委奴国王 イザナキの命 イザナミの命 アマテラスオオミカミ（天照大神） ツクヨミの命 スサノオの命 オオクニヌシの神（大國主神） ニニギの命 ホオリの命 ウガヤフキアエズの命 蘇我氏（本宗家）	タケミカヅチの神 コトシロヌシ タケミナカタ 美智子皇后陛下 讚（仁徳天皇） 珍 済 武（雄略天皇） 秦氏 東漢氏 聖明王 欽明天皇 蘇我氏（本宗家）	物部氏 厩戸皇子（聖徳太子） 推古天皇 蘇我馬子 小野妹子 煬帝 蘇我蝦夷 蘇我入鹿 中大兄皇子（天智天皇） 山背大兄皇子 犬上御田敏 高田根麻呂 高向玄理	粟田真人 山上憶良 阿倍仲麻呂 吉備真備 玄防 藤原清河 最澄 空海 円仁 菅原道真 中臣鎌足 皇極天皇 中臣氏	藤原氏 大友皇子 大海人皇子（天武天皇） 持統天皇 マルコ=ポーロ 太宗 聖武天皇 光明皇后 行基 鞍作鳥（止利仏師） 鑑真 柿本人麻呂 大伴家持	額田王 山部赤人 大伴旅人 桓武天皇 明治天皇 坂上田村麻呂 アテルイ 藤原道長 藤原頼通 紀貫之 藤原道綱の母 清少納言 紫式部	赤染衛門 菅原孝標の女 後白河法皇 醍醐天皇 小野小町 在原業平 鳥羽僧正 源信 空也 奥州藤原氏 一条天皇 彰子 ボッカチオ	セルバンテス 和泉式部 定子
育鵬社	蘇我入鹿 藤原頼通 藤原道長 後一条天皇 相沢忠洋 孔子 始皇帝 アレクサンドロス大王 アリストテレス カエサル オクタウィアヌス 奴国の王 卑弥呼	ワカタケル 崇神天皇 武 讚 珍 済 興 シャカ（釈迦牟尼） イエス ムハンマド（マホメット） アラーム村季吟 蘇我氏	物部氏 推古天皇 聖徳太子（厩戸皇子） 蘇我馬子 小野妹子 鞍作鳥（止利仏師） 用明天皇 中大兄皇子（天智天皇） 中臣（藤原）鎌足 天武天皇 持統天皇 長屋王 大伴家持	柿本人麻呂 山上憶良 山部赤人 聖武天皇 鑑真 光明皇后 藤原不比等 稗田阿礼 太安万侶 行基 イザナギ イザナミ スサノオノミコト	オオクニヌシノミコト ニニギノミコト カムヤマトイワレヒコノミコト ヤマトタケルノミコト（日本武尊） 景行天皇 天照大神 海幸彦 山幸彦 孝謙天皇 菩提遷那 良弁 国中連公麻呂 桓武天皇	坂上田村麻呂 藤原氏 アテルイ 道鏡 和氣清麻呂 清少納言 紫式部 最澄 空海 菅原道真 定朝 紀貫之 空也	源信				
	学び舎	クフ王 メンカウラー王 カフラー王 ナクト ヘカナクト シャンポリオン ガウタマ=シッダールタ（ブッダ） アショーカ王 始皇帝 劉邦 孔子 スパルタクス イエス	相澤忠洋 卑弥呼 漢王 広陵王 奴国王 ワカタケル大王（武） 広開土王 玄奘 蘇我馬子 厩戸皇子（聖徳太子） 小野妹子 中大兄皇子（天智天皇） 中臣鎌足	蘇我入鹿 大友皇子 大海人皇子（天武天皇） 持統天皇 長屋王 藤原氏 聖武天皇 大伴部高根 鑑真 天照大神 母神 ムハンマド アッラー	フナイン=イブシ=イスハーク 桓武天皇 坂上田村麻呂 アテルイ 最澄 空海 早良親王 藤原良房 藤原道長 彰子 一条天皇 藤原頼通 藤原元命	紫式部 清少納言 定子					

「別紙２－１」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 古代まで】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 古代まで									
令 書	天武天皇（大海人皇子）	ムハンマド	桓帝	クフ王	中臣氏	大伴家持	称光天皇	紀氏	清原氏	平時子
	伊耶那岐神	天照大御神	霊帝	応神天皇	物部守屋	額田王	後花園天皇	藤原基経	清原清衡	平宗盛
	伊耶那美神	月読命	火遠理命	履中天皇	小野妹子	小野老	後桃園天皇	光孝天皇	奥州藤原氏	高松宮
	アラー	須佐之男命	鵜葺草葺不合命	反正天皇	煬帝	若倭部身麻呂	光格天皇	冷泉天皇	後三条天皇	崇峻天皇
	天之御中主神	大国主神	木花之佐久夜毘売	允恭天皇	舒明天皇	藤原不比等	和氣清麻呂	藤原実頼	三条天皇	マタイ
	高御産巢日神	神産巢日神	石長比売	安康天皇	タリシヒコ	宮子	淳仁天皇	藤原道長	禎子内親王	ルイ十六世
	神産巢日神	神産巢日神	五瀬命	ラウケ	李淵	聖武天皇（聖武上皇）	藤原南家	藤原頼通	白河天皇（白河上皇）	後鳥羽上皇
	宇麻志阿斯訶備比古遲神	平成天皇陛下	登美能那賀須泥毘古	聖明王	裴世清	光明子（光明皇后）	藤原仲麻呂	宇多天皇	後白河天皇（後白河上皇）	※
	天之常立神	現在の天皇陛下	卑弥呼	蘇我氏	難波吉士雄成	長屋王	弓削道鏡	菅原道真	崇徳上皇	俊寛
	国之常立神	建御雷之男神	難升米	秦氏	山背大兄王	橘諸兄	白壁王（光仁天皇）	紀貫之	平清盛	平氏
	豊雲野神	八重言代主神	菅与	藤原氏	中大兄皇子（天智天皇）	藤原広嗣	井上内親王	清少納言	源義朝	平知盛
	宇比地邇神	建御名方神	崇神天皇	天智天皇	中臣鎌足	磐之媛命	鑑真	村上天皇	藤原通憲	大庭景親
	須比智邇神	アレクサンドロス大王	垂仁天皇	持統天皇	皇極天皇	葛城氏	藤原種継	趙匡胤	藤原信頼	源範頼
	村上和雄	ユリウス・カエサル	景行天皇	明治天皇	蘇我入鹿	李謙天皇（李謙上皇、称徳天皇）	坂上田村麻呂	紫式部	徳子	佐々木高綱
	相沢忠洋	始皇帝	好太王	大正天皇	蘇我蝦夷	吉備真備	アテルイ	桓武平氏（平氏）	行基	梶原景季
	エドワード・S・モース	劉邦	欽明天皇	昭和天皇	孝德天皇（軽皇子）	玄防	源頼朝	清和源氏（源氏）	安德天皇	那須与一
	徳川家康	武帝	百済王	聖徳太子（厩戸皇子）	大友皇子	大野東人	最澄	平将門	藤原成親	藤原秀衡
	桓武天皇	孔子	物部氏	物部氏	文武天皇	佐伯常人	空海	藤原純友	源頼政	
	サミュエル・ハンチントン	奴国王	綏靖天皇	推古天皇	元明天皇	敏達天皇	嵯峨天皇	源経基	以仁王	
	ハンムラビ王	光武帝	開化天皇	蘇我馬子	神田阿礼	武烈天皇	清和天皇	安倍氏	源義仲	
	釈迦	師升（帥升）	日本武尊（倭建命）	文帝	太安万侶	繼体天皇	醍醐天皇	源頼義	平維盛	
	イエス	安帝	仁徳天皇	大伴氏	舍人親王	手白香皇女	藤原良房	源義家	源義経	
※印以降は、巻末の地図資料及び「美術図鑑」に記載されている人物名										

「別紙２－１」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 中世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 中世								
東書	藤原氏 平将門 藤原純友 源氏 平氏 源義家 奥州藤原氏 藤原良房 藤原基経 藤原道長 後三条天皇 白河天皇	鳥羽上皇 後白河天皇 平清盛 源義朝 源頼朝 源義仲 源義経 平大納言時忠 崇徳上皇 藤原忠通 藤原頼長 平忠正	源為朝 源義通 藤原通憲 藤原盛頼 源義平 源範頼 北条時政 北条氏 後鳥羽上皇 源実朝 北条泰時	北条政子 湯浅氏 運慶 藤原定家 西行 鴨長明 兼好法師 法然 親鸞 一遍 日蓮 栄西	道元 チンギス・ハン フビライ・ハン マルコ・ポーロ 北条時宗 後醍醐天皇 楠木正成 足利尊氏 新田義貞 足利義満 足利氏	細川氏 武田 佐竹 今川 斯波 畠山 赤松 島津 大友 大内 山名 細川	畠山 上杉 李成桂 尚氏 安藤氏 コシヤマイン 玉城朝薫 足利義政 足利富子 足利義尚 足利義視 山名持豊(宗全)	細川勝元 毛利元就 上杉謙信(長尾景虎) 武田信玄 今川義元 島津貴久 南部 伊達 北条 織田 三好 長宗我部	龍造寺 毛利 尼子 浅井 朝倉 最上 秋田 観阿弥 世阿弥 善阿弥
教出	平将門 藤原純友 藤原氏 源氏 平氏 源義家 奥州藤原氏 平忠盛 藤原清衡 藤原基衡 藤原秀衡 後三条天皇	白河天皇 鳥羽上皇 後白河天皇 平清盛 源義朝 崇徳上皇 平重盛 平宗盛 平知盛 平維盛 源頼朝 源義仲	源義経 北条政子 北条時政 北条氏 後鳥羽上皇 北条泰時 北条順徳 土御門上皇 北条義時 湯浅氏 運慶 快	藤原定家 西行 鴨長明 兼好法師 法然 親鸞 一遍 日蓮 栄西 道元 チンギス・ハン フビライ・ハン	マルコ・ポーロ 佐竹 武田 畠山 今川 土岐 赤松 大友 畠山 川津 大内 山名	斯波 小笠原 足利 上杉 足利義持 李成桂 宗氏 尚巴志 安藤(安東)氏 コシヤマイン 足利義教 足利義政 山名氏	日野富子 足利義視 足利尚豊 足利名持 細川勝元 武田信玄 今川義元 島津貴久 南部 伊達 北条	織田 三好 長宗我部 龍造寺 毛利 尼子 浅井 朝倉 最上 秋田 観阿弥 世阿弥	雪舟 蓮如 善阿弥 源実朝 無学祖元 シヤカ
帝国	源頼朝 源氏 平氏 平将門 藤原純友 源義家 奥州藤原氏 藤原清衡 藤原基衡 藤原秀衡 源義経 後三条天皇	白河天皇 平清盛 後白河天皇 源頼朝 源義仲 平時忠 北条時政 源実朝 後鳥羽上皇 北条氏 北条泰時 北条政子	運慶 快慶 西行 藤原定家 鴨長明 兼好法師 那須与一 法然 親鸞 栄西 道元 日蓮	一遍 チンギス・ハン マルコ・ポーロ フビライ・ハン 北条時宗 竹崎季長 足利尊氏 謝国明 後醍醐天皇 楠木正成 新田義貞 足利義満	足利氏 佐竹 上杉 上杉 今川 一色 斯波 畠山 細川 大友 島津 宗	大内 細川 山名 松川 細川 一色 斯波 京極 山名 上杉 李成桂 尚氏	安藤(安東)氏 コシヤマイン 運如 足利義政 足利義教 日野富子 足利義尚 足利義視 山名持豊 細川勝元 武田信玄 朝倉氏	北条氏 伊達 織田 六角 三好 長宗我部 龍造寺 毛利 尼子 浅井 斎藤 武田	最上 上杉謙信 北条早雲 今川義元 島津貴久 毛利元就 朝倉景景 宗祇 肖柏 宗長 観阿弥 世阿弥
山川	イブン=バットウータ コロンブス 平将門 藤原純友 源氏(清和源氏) 平氏(桓武平氏) 平忠常 源頼義 源義家 安倍氏 清原氏 清原(藤原)清衡 奥州藤原氏 清原真衡 清原家衡 後三条天皇 白河天皇	平清盛 源義朝 後白河天皇 源頼朝 安德天皇 以仁王 源義仲 源義経 藤原忠通 崇徳上皇 藤原頼長 平忠正 源為朝 源義家 源範頼 松尾芭蕉 北条政子	北条氏 北条時政 源頼朝 源実朝 北条義時 後鳥羽上皇 北条泰時 西行 藤原定家 鴨長明 兼好法師 運慶 快慶 法然 親鸞 一遍 日蓮	栄西 道元 常盤光長 飛鳥井雅経 藤原教長 伴善男 源信 ムハンマド カリフ アリストテレス エウクレイデス(ユークリッド) サラフ=アッディーン(サラディン) シェヘラザード ガラン インノケンティウス3世 マルコ・ポーロ チンギス・カン	クビライ 北条時宗 安達泰盛 竹崎季長 後醍醐天皇 足利尊氏 新田義貞 楠木正成 足利義満 今川氏(洪川氏) 細川氏 斯波氏 畠山氏 赤松氏 一色氏 山名氏 京極氏	結城 佐竹 千葉 上杉 上杉 上杉 上杉 武田 上杉 上杉 今川 土岐 斯波 氏 興福寺 畠山 細川	河野 島津 池友 少武 宗 山名 山名 山名 細川 佐々木 山名 一色 斯波 畠山	上杉 足利持氏 土岐氏 山内義弘 永楽帝 大内氏 尚巴志 安藤(安東)氏 コシヤマイン 嶋崎氏(松前氏) シャクシャイン チョウケン 足利義教 足利義政 足利義視 足利義尚	畠山義就 畠山政長 斯波義敏 山名持豊 細川勝元 北条氏康 今川義元 織田信長 長宗我部元親 大友義鎮 島津貴久 三好長慶 毛利元就 朝倉景景 武田信玄 上杉謙信
									最上 伊達 浅井 龍造寺 尼子 朝倉 氏 景 観阿弥 世阿弥 雪舟

「別紙２－１」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 中世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 中世									
日文	平将門 藤原純友 源氏 平氏 平清盛 源頼朝 安倍氏 清原氏 源義家 奥州藤原氏 藤原道長 藤原頼通	後三条天皇 白河天皇 堀河 鳥羽 崇徳 近衛 後白河 源義朝 源義仲 源義経 北条泰時 北条政子	北条氏 後鳥羽上皇 源実朝 九条頼時 北条義時 北条時房 逸見入道 長沼宗政 佐々木信綱 島津忠久	常陸房昌明 佐々木義清 安倍実員 武田信光 橘公業 小笠原長清 西行 鴨長明 兼好法師 藤原定家 寂蓮 運慶	快慶 陳和卿 重源 栄西 法然 親鸞 一遍 日蓮 道元 時宗 チンギス＝ハン フビライ＝ハン	マルコ＝ポーロ 竹崎季長 後醍醐天皇 楠木正成 足利尊氏 新田義貞 足利氏 上杉 武田 今川 畠山	斯波 山名 赤松 大友 細川 島津 鄭和 大内氏 李成桂 宗氏 尚巴志 安藤（安東）氏	コシヤマイン 足利義教 足利義政 山名氏 武田信玄 今川義元 島津貴久 毛利元就 朝倉義景 上杉謙信 伊達 北条	織田 六角 三好 長宗我部 相良 龍造寺 毛利 尼子 浅井 朝倉 雪舟 善阿弥	又四郎 観阿弥 世阿弥 宗柏 宗長
自由社	源氏 平氏 平将門 藤原純友 藤原氏 後三条天皇 白河天皇 後白河天皇 崇徳上皇 平清盛 源義朝 持統天皇 慈円 安德天皇 以仁王 源義仲 源頼朝	奥州藤原氏 源範頼 平忠盛 池禅尼 北条政子 北条氏 源実朝 後鳥羽上皇 北条泰時 北条時頼 佐野常世 一遍 始皇帝 チンギス・ハン（テムジン） フビライ・ハン 北条時宗 宗助国	後醍醐天皇 護良親王 楠木正成 足利尊氏 新田義貞 源信也 法然 親鸞 日蓮 栄西 道元 運慶 快慶 無著 世親 重源	藤原定家 西行 鴨長明 兼好法師 光明天皇 織田信長 昭古 豊田秀満 足利氏 佐竹 千葉 武田 今川 土岐 畠山 細川	大友 島津 島津 菊池・阿蘇 今川 大内 武田 佐々木 赤松 山名 富樫 波 京極 上杉 李成桂 李氏	尚氏 千利休 足利義政 足利義視 足利義尚 細川勝元 山名持豊（宗全） 蓮如 武田信玄 上杉謙信 毛利元就 早雲 今川義元 義鎮 大友 島津 貴久 伊達 北条	斎藤 藤 織田 六角 浅井 三好 長宗我部 相良 竜造寺 毛利 小早川 朝倉 大内義隆 陶晴賢 毛利輝元 徳川家康 伊達政宗 北条氏房	尼子 武田信繁 山本菅助（勘助） 武田勝頼 上杉景勝 真田氏（松代藩） 観阿弥 世阿弥 雪舟 宗祇 エリザベス女王 上杉憲実 龜山天皇 後深草天皇 足利直義 後小松天皇 後龜山天皇	藤原秀郷 藤原公清 三河鈴木 渡辺綱 嵯峨源氏 源頼光 酒吞童子 渡辺氏 渡部氏 源義清	
育鵬社	藤原家（藤原氏） 平氏 清和天皇 源氏 平将門 藤原純友 源頼義 源義家 奥州藤原氏 後三条天皇 白河天皇 崇徳上皇	後白河天皇 平清盛 源義朝 以仁王 源頼朝 源義仲 源義経 安德天皇 北条政子 北条時政 北条氏 源頼家	源実朝 後鳥羽上皇 北条泰時 藤原定家 西行 鴨長明 吉田兼好 運慶 湛慶 快慶 無著 世親	重源 法然 親鸞 一遍 日蓮 栄西 道元 天智天皇 順徳院 チンギス・ハン（ジンギスカン） フビライ・ハン マルコ・ポーロ	北条時宗 竹崎季長 宗資国 後醍醐天皇 楠木正成 護良親王 足利尊氏 新田義貞 佐竹 千葉 武田 今川	土岐 畠山 細川 大友 島津 菊池・阿蘇 今川 大内 武田 佐々木 赤松 山名	富樫 斯波 上杉 足利義満 足利氏 李成桂 尚巴志 安藤（安東）氏 コシヤマイン 日野富子 足利義政 足利義尚	足利義視 山名持豊（宗全） 大内政弘 赤松政則 細川勝元 神屋寿康 北条氏康 今川義元 毛利元就 武田信玄 上杉謙信 北条	織田 斎藤 六角 三好 長宗我部 相良 龍造寺 毛利 小早川 尼子 浅井 朝倉	伊達 観阿弥 世阿弥 雪舟
学び舎	栄西 後白河上皇 平清盛 藤原氏 藤原師通 平氏 平将門 平貞盛 藤原純友 源氏 源氏 白河天皇 鳥羽上皇	源義朝 崇徳上皇 高倉天皇 安德天皇 八条院 藤原氏 藤原清衡 千葉氏 佐竹氏 源頼朝 北条氏 千葉常胤	上野介広常 源義経 北条政子 後鳥羽上皇 源実朝 北条義時 北条泰時 平信兼 惟宗 忠久 源義仲 源範頼 一遍	鴨長明 平敦盛 熊谷直実 法然 親鸞 日蓮 兼好法師 道元 重源 北条時頼 蘭溪道隆 運慶	湯浅宗親 湯浅氏 マルコ＝ポーロ クビライ＝カン チンギス＝カン 後醍醐天皇 楠木正成 足利尊氏 足利義満 足利氏 阿只拔都 李成桂	朱元璋 細川氏 大内氏 世宗 龜屋五位女 布袋屋了尼 足利義政 山名氏 宋希璟 雪舟 世阿弥 善阿弥	安東氏 王直 毛利 武田 上杉 北条 毛利元就 北条氏康 朝倉氏			

「別紙２－１」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 中世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 中世									
令 書	後醍醐天皇	新田義貞	大矢野三兄弟	源義親	後光厳天皇	阿蘇氏	畠山氏	北条氏綱	横山時広	赤松満祐
	醍醐天皇	清和天皇	龜山上皇(天皇)	藤原信賴	後龜山天皇	今川了俊	日野富子	里見義豊	佐々木経高	足利持氏
	村上天皇	仲恭天皇	元宗	平清盛	後円融院	源為朝	斯波氏	徳川家斉	後藤基清	上杉憲親
	源頼朝	後堀河天皇	後宇多天皇	藤原時平	足利義持	舜天	観阿弥	※	宗孝親	富利成氏
	源義経	順徳上皇	天照大御神	北条高時	足利義教	尚巴志	世阿弥	比企朝宗	河内義長	足利成氏
	後白河法皇	土御門上皇	順徳天皇	後深草天皇	織田	第一尚氏	村田珠光	佐々木盛綱	武藤資久	足利政知
	奥州藤原氏	按察使光親(兼室光親)	運慶	後小松天皇	浅井	金丸	雪舟	小山朝政	島津忠久	足利義就
	後鳥羽天皇(上皇)	北条時頼	快慶	光厳天皇(光厳上皇)(光厳院)	朝倉	第二尚氏	上杉憲実	八田知家	佐々木氏	畠山義長
	北条義時	三浦氏	藤原定家	護良親王	正親町天皇	コシヤマイン	フランシスコ・ザビエル	千葉常胤	比企氏	畠山政長
	北条氏	後嵯峨天皇	鴨長明	楠木正成	光格天皇	蠣崎氏	伊達植宗	平賀義信	バトウ	織姫
	源頼家	宗尊親王	吉田兼好	足利尊氏	足利義嗣	足利義量	北条氏康	比企能員	空也	天稚彦
	北条政子	北条時宗	法然	北条守時	洪武帝(朱元璋)	赤松氏	北条早雲	三浦義澄	最澄	達磨
	北条時政	北条得宗家	親鸞	光明天皇(光明院)	懷良親王	足利義勝	今川義元	安田義定	忍性	
	和田義盛	北条貞時	一遍	足利義満	永楽帝	足利義政	今川氏親	大内惟義	北畠親房	
	公暁	デングス・ハン	日蓮	織田信長	李成桂	細川氏	長宗我部元親	安達盛長	北条時行	
	藤原頼経	オゴタイ・ハン	栄西	崇光天皇(崇光院)	島津氏	山名氏	朝倉義景	小野成綱	成良親王	
	北条泰時	フビライ・ハン	道元	足利家	湯王	足利義視	朝倉孝景	佐々木定綱	菊池武敏	
	清和源氏	マルコ・ポーロ	仁徳天皇	後花園上皇(天皇)	武王	足利義尚	武田信玄	津々見忠季	後村上天皇	
	村上源氏	高麗の王子(後の忠烈王)(謙)	菅原道真	後土御門天皇	孔子	細川勝元	毛利元就	安達親長	長慶天皇	
	源氏	宗助国	俊成卿女	高師直	孟子	山名持豊	斎藤道三	梶原景時	結城氏朝	
	桓武平氏	平景隆	西行法師	足利直義	孫子	後柏原天皇	源頼義	山内首藤俊		
	北条時方	菊池武房	平将門	弥仁王	吳子	後奈良天皇	源義家	佐原義連		
	藤原道家	竹崎季長	藤原純友	西園寺寧子	菊池氏	持統天皇	源実朝			
※印以降は、巻末の地図資料及び「美術図鑑」に記載されている人物名										

「別紙2-1」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 近世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 近世									
東書	レオナルド・ダ・ビンチ	原マルチノ	朝倉	蜂須賀(徳島)	佐竹(秋田)	徳川家宣	細川重賢	シーボルト		
	ミケランジェロ	メスキータ	上杉	山内(高知)	津軽(津軽)	松尾芭蕉	最上徳内	渡辺華山		
	ルター	織田信長	豊臣氏	伊達(宇和島)	末次平蔵	近松門左衛門	近藤重蔵	高野長英		
	カルバン	今川義元	李舜臣	有馬(久留米)	徳川秀忠	坂田藤十郎	伊能忠敬	大塩平八郎		
	ザビエル	足利義昭	狩野永徳	細川(熊本)	天草四郎(益田時貞)	市川団十郎	本居宣長	水野忠邦		
	ガリレイ	明智光秀	千利休	鍋島(佐賀)	キリスト	俵屋宗達	前野良沢	ペリー		
	ニュートン	羽柴秀吉(豊臣秀吉)	阿国	黒田(福岡)	マリア	尾形光琳	杉田玄白	蒲生氏郷		
	ラファエロ	島津氏	徳川家康	宗(府中)	シャクシャイン	菱川師宣	十返舎一九	保科正之		
	バスコ・ダ・ガマ	北条氏	石田三成	浅野(広島)	知里幸恵	曾良	曲亭(滝沢) 馬琴	田中玄幸		
	コロンブス	伊達	徳川家光	池田(岡山)	達星北斗	徳川光圀	与謝蕪村			
教出	マゼラン	武田	南部(盛岡)	池田(鳥取)	三井家	徳川吉宗	小林一茶			
	大村氏	今川	松平(彦根)	鴻池家	鴻池家	田沼意次	鈴木春信			
	大友宗麟	長宗我部	徳川(水戸)	松平(福井)	三井高利	松平定信	東洲斎写楽			
	アンジロウ	毛利	徳川(江戸)	前田(金沢)	徳川綱吉	ラクスマン	喜多川歌麿			
	伊東マンショ	明智	徳川(尾張)	真田(松代)	新井白石	大黒屋光太夫	葛飾北斎			
	千々石ミゲル	柴田	藤堂(津)	酒井(前橋)	井原西鶴	レザノフ	歌川広重			
	中浦ジュリアン	浅井	徳川(紀伊)	酒井(庄内)	12代目市川団十郎	間宮林蔵	緒方洪庵			
帝国	レオナルド=ダ=ビンチ	大村純忠	徳川家康	狩野永徳	島津(鹿児島)	池田(鳥取)	鴻池	徳川吉宗		
	ミケランジェロ	宗義智	毛利氏	狩野山楽	藤堂(安濃津)	酒井(小浜)	徳川綱吉	大岡忠相		
	コペルニクス	黒田長政	明智光秀	長谷川等伯	井伊(彦根)	松平(福井)	孔子	二宮尊徳		
	ガリレイ	高山右近	島津氏	千利休	徳川(和歌山)	前田(金沢)	新井白石	野國總管		
	ルター	フェリペ2世	北条氏	阿国	蜂須賀(徳島)	真田(松代)	井原西鶴	青木昆陽		
	カルバン	大内氏	伊達	石田三成	松平(高松)	松平(高田)	近松門左衛門	田沼意次		
	コロンブス	伊達政宗	武田	徳川秀忠	山内(高知)	牧野(長岡)	坂田藤十郎	松平定信		
	バスコ=ダ=ガマ	支倉常長	今川	豊臣氏	松平(松山)	保科(会津)	市川団十郎	上杉鷹山		
	マゼラン	豊臣秀吉	徳川家光	細川(熊本)	細川(熊本)	松平(村上)	林羅山	細川重賢		
	フランシスコ=ザビエル	伊東マンショ	長宗我部	南部(盛岡)	有馬(久留米)	酒井(庄内)	林家	ラクスマン		
帝国	大友	千々石ミゲル	明智	本多(白河)	鍋島(佐賀)	佐竹(秋田)	松尾芭蕉	渡辺華山		
	大村	中浦ジュリアン	浅井	奥平(宇都宮)	宗(府中)	津軽(弘前)	俵屋宗達	高野長英		
	有馬	原マルチノ	柴田	徳川(水戸)	黒田(福岡)	松前(松前)	尾形光琳	徳川斉昭		
	織田有楽斎	織田信長	朝倉	酒井(前橋)	小笠原(小倉)	山田長政	菱川師宣	伊能忠敬		
	大友義鎮(宗麟)	今川義元	上杉	稲葉(小田原)	浅野(広島)	天草四郎	中江藤樹	近藤重蔵		
	小西行長	足利義昭	加藤清正	徳川(甲府)	松平(松江)	シャクシャイン	徳川光圀	間宮林蔵		
	有馬晴信	武田勝頼	李舜臣	徳川(名古屋)	池田(岡山)	三井	関孝和	大黒屋光太夫		
帝国	織田信長	武田勝頼	阿国	松平	井伊	マリア	関孝和	曲亭(滝沢) 馬琴		
	豊臣秀吉	明智光秀	石田三成	山内	松平	天草四郎	洪川春海	本居宣長		
	徳川家康	北条氏	南部	松平	戸田	雨森芳洲	徳川吉宗	前野良沢		
	徳川家光	最上	丹羽	細川	前田	シャクシャイン	大岡忠相	平賀源内		
	ミケランジェロ	伊達	本多	立花	前田	キムンカムイ(山の神)	田沼意次	ゴッホ		
	ルター	佐竹	奥平	鍋島	真田	孔子	上杉治憲(鷹山)	モネ		
	カルバン	徳川	水戸徳川	黒田	徳川綱吉	徳川綱吉	松平定信	鍋島直正		
	コロンブス	長宗我部	土井	宗	三井	三井	光格天皇	シーボルト		
	バスコ=ダ=ガマ	島津	阿部	小笠原	酒井	鴻池	雷電	伊能忠敬		
	マゼラン	龍造寺	稲葉	浅野	松平	与謝蕪村	与謝蕪村	池田光政		
帝国	フランシスコ=ザビエル	毛利	徳川	水野	松平	高田屋嘉兵衛	小林一茶	吉良上野介義央		
	大村氏	上杉	尾張徳川	松平	酒井	井原西鶴	東洲斎写楽	浅野内匠頭長矩		
	大友氏	李舜臣	松平	池田	佐竹	近松門左衛門	喜多川歌麿	林信篤		
	有馬氏	豊臣氏	藤堂	森	松前	松尾芭蕉	葛飾北斎	荻生徂徠		
	大友義鎮(宗麟)	狩野永徳	本多	池田	徳川秀忠	菱川師宣	杉田玄白	大石内蔵助		
	今川義元	狩野山楽	紀伊徳川	榊原	山田長政	俵屋宗達	歌川(安藤) 広重			
	足利義昭	千利休	蜂須賀	酒井	イ・エス	尾形光琳	十返舎一九			

「別紙２－１」【(1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 近世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 近世									
山川	コロンブス ヴァスコ＝ダ＝ガマ ルター マゼラン ピサロ 豊臣秀吉 徳川家康 徳川綱吉 田沼意次 ルイ14世 ナポレオン ポッティチェリ カルヴァン フランシスコ＝ザビエル レオナルド＝ダ＝ヴィンチ ミケランジェロ マルコ＝ポーロ コルテス スレイマン1世 アッパース1世 アクバル	アラウングゼーブ 朱元璋（洪武帝） 永楽帝 鄭和 李成桂 孔子 マテオ＝リッチ 徐光啓 細川氏 大内氏 種子島氏 ロヨラ アンジロー 大友氏 有馬氏 大村氏 ヴァリニャーノ ティセラ 中浦ジュリアン 伊東マンショ 原マルチノ	千々石ミゲル 織田信長 今川義元 足利義昭 武田勝頼 明智光秀 島津氏 北条氏 伊達氏 石田三成 佐竹 武田 今川 徳川 徳藤 長宗我部 龍造寺 毛利 明智 浅井 朝倉	柴田 上杉 最上 李舜臣 狩野永徳 狩野山楽 長谷川等伯 千利休 阿国 豊臣秀頼 毛利輝元 豊臣氏 徳川家光 南部（盛岡） 本多（白河） 徳川（水戸） 徳川（館林） 徳川（甲府） 徳川（名古屋） 藤堂 徳川（和歌山）	蜂須賀（徳島） 山内（高知） 松平（高松） 松平（松山） 細川（熊本） 有馬（久留米） 鍋島（佐賀） 宗（府中） 黒田（福岡） 小笠原（小倉） 浅野（広島） 水野（福山） 池田（岡山） 松平（松江） 池田（鳥取） 榊原（姫路） 酒井（小浜） 井伊（彦根） 松平（福井） 前田（金沢） 真田（松代）	松平（高田） 保科（会津） 酒井（鶴岡） 佐竹（秋田） 池田輝政 山田長政 徳川秀忠 天草四郎 マリア キリスト ケンベル 志筑忠雄 松前氏 シャクシャイン 宮崎安貞 蒲生氏郷 角倉了以 三井家 鴻池家 前田（金沢） 徳川家綱	由比正雪 徳川家宣 徳川家継 新井白石 関院宮家 林家 徳川吉宗 徳川光圀 関孝和 井原西鶴 近松門左衛門 松尾芭蕉 俵屋宗達 尾形光琳 菱川師宣 林羅山 井伊掃部頭 大岡忠相 青木昆陽 荻生徂徠 徳川家治	最上徳内 林子平 徳川家斉 松平定信 ラクスマン 大黒屋光太夫 レザノフ 田安德川家 光格天皇 一橋徳川家 ゴローウニン 高田屋嘉兵衛 近藤重蔵 間宮林蔵 細川重賢 上杉治憲（鷹山） エカチェリーナ2世 前野良沢 杉田玄白 シーボルト 本居宣長	平賀源内 平田篤胤 大槻玄沢 伊能忠敬 鈴木春信 喜多川歌麿 東洲斎写楽 与謝蕪村 葛飾北斎 歌川広重 十返舎一九 曲亭馬琴 小林一茶 大塩平八郎 渡辺華山 高野長英 徳川家慶 水野忠邦 ビートル ペリー ブチャーチン	前田利家 ボリバル 乾隆帝
	日文	織田信長 豊臣秀吉 徳川家康 ルター ムハンマド カルバン バスコ＝ダ＝ガマ コロンブス マゼラン フランシスコ＝ザビエル 今川義元 斎藤氏 足利義輝 足利義昭 武田氏 毛利氏 明智光秀	伊達 北条 徳川 浅井 明智 長宗我部 島津 朝倉 柴田 上杉 李舜臣 阿部 狩野永徳 千利休 阿国 李参平 池田輝政 本多忠政	豊臣氏 石田三成 南部（盛岡） 丹羽（二本松） 保科（会津） 本多（白河） 奥平（宇都宮） 徳川（水戸） 酒井（前橋） 土井（古河） 阿部（岩槻） 徳川（館林） 稲葉（小田原） 徳川（甲府） 徳川（尾張） 松平（桑名） 藤堂（安濃津）	本多（郡山） 徳川（紀伊） 蜂須賀（徳島） 松平（高松） 山内（高知） 松平（松山） 有馬（久留米） 細川（熊本） 立花（柳川） 鍋島（佐賀） 鍋島（福岡） 宗（府中） 小笠原（小倉） 浅野（広島） 水野（福山） 松平（松江） 池田（岡山）	森（津山） 池田（鳥取） 榊原（姫路） 酒井（小浜） 井伊（彦根） 松平（福井） 戸田（大垣） 前田（金沢） 真田（松代） 松平（高田） 松平（村上） 酒井（庄内） 小笠原（小倉） 佐竹（秋田） 織田氏 今川氏 徳川秀忠	徳川家光 三井家 イエス 雨森芳洲 松前氏 シャクシャイン 知里幸恵 金田一京助 鴻池 徳川綱吉 新井白石 市川団十郎 近松門左衛門 松尾芭蕉 井原西鶴 坂田藤十郎 俵屋宗達	尾形光琳 菱川師宣 孔子 徳川光圀 関孝和 宮崎安貞 徳川吉宗 田沼意次 松平定信 青木昆陽 井上伝 本居宣長 前野良沢 杉田玄白 伊能忠敬 シーボルト 平賀源内	安藤昌益 長久保赤水 与謝蕪村 小林一茶 十返舎一九 滝沢（曲亭）馬琴 喜多川歌麿 葛飾北斎 歌川広重 東洲斎写楽 大田南畝 酒井忠次 酒井忠勝 酒井家 酒井忠良 高橋景保 ベニョフスキー	
自由社	ルター カルバン レオナルド・ダ・ヴィンチ ミケランジェロ コロンブス バスコ＝ダ＝ガマ マゼラン 種子島氏 フランシスコ・ザビエル ヤジロー（弥次郎） 大村氏 中浦ジュリアン 伊東マンショ 原マルチノ 千々石ミゲル 織田信長 今川義元 足利義昭 武田勝頼 明智光秀 豊臣秀吉（羽柴秀吉）	毛利氏 豊臣秀次 徳川家康 伊達政宗 北条氏政 北条氏直 長宗我部元親 島津義久 毛利輝元 加藤清正 小西行長 李舜臣 豊臣家 フェリペ2世 トルレス オルガンチーノ カブラル ヴァリニャーノ フロイス 高山右近 ガスパール・コエリョ	狩野永徳 千利休 池坊専好 池田輝政 出雲阿国 上杉謙信 近松門左衛門 千家 石田三成 豊臣秀頼 徳川氏 徳川家光 佐竹（秋田） 南部（盛岡） 酒井（庄内） 松平（山形） 伊達（仙台） 本多（白河） 丹羽（二本松） 奥平（宇都宮） 徳川（水戸）	徳川（館林） 土井（古河） 阿部（岩槻） 稲葉（小田原） 酒井（前橋） 徳川（名古屋） 藤堂（安濃津） 戸田（大垣） 井伊（彦根） 徳川（和歌山） 蜂須賀（徳島） 山内（高知） 松平（松山） 伊達（宇和島） 島津（鹿児島） 細川（熊本） 有馬（久留米） 立花（柳河） 鍋島（佐賀） 黒田（福岡） 小笠原（小倉）	宗（府中） 毛利（萩） 池田（鳥取） 本多（郡山） 松平（松江） 浅野（広島） 水野（福山） 松平（高松） 徳川（甲府） 池田（岡山） 榊原（姫路） 上杉（米沢） 酒井（小浜） 松平（福井） 前田（金沢） 真田（松代） 前田（富山） 保科（会津） 松平（村上） 山田長政	松倉勝家 天草四郎時貞 志筑忠雄 ケンベル イエス・キリスト 宗氏 尚氏 シャクシャイン 徳川綱吉 新井白石 井原西鶴 松尾芭蕉 俵屋宗達 尾形光琳 菱川師宣 林羅山 徳川光圀 中江藤樹 山鹿素行 伊藤仁斎	荻生徂徠 関孝和 緒方洪庵 シーボルト 吉田松陰 大村益次郎 橋本左内 福沢諭吉 石田梅岩 本居宣長 徳川吉宗 杉田玄白 前野良沢 華岡青洲 平賀源内 伊能忠敬 最上徳内 広瀬淡窓 太安万侶 上田秋成 高橋至時	田沼意次 徳川家斉 松平定信 大塩平八郎 水野忠邦 喜多川歌麿 東洲斎写楽 葛飾北斎 歌川広重 十返舎一九 小林一茶 与謝蕪村 ラクスマン レザノフ 近藤重蔵 間宮林蔵 ゴルドン ペリー 大黒屋光太夫 エカテリーナ女帝 林子平	会沢正志斎 高野長英 渡辺華山 山本常朝 二宮尊徳 二宮家 服部家 滝沢馬琴 クロード・モネ ビンセント・ヴァン・ゴッホ	

「別紙２－１」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 近世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 近世									
育鵬社	ムハンマド	高山右近	伊達政宗	伊達(仙台)	細川(熊本)	松平(高田)	荻生徂徠	田沼意次	大塩平八郎	東洲斎写楽
	イエス	織田有楽斎	豊臣秀次	丹羽(二本松)	有馬(久留米)	上杉(米沢)	徳川光圀	松平定信	水野忠邦	葛飾北斎
	コンスタンティヌス1世	小西行長	李舜臣	保科(会津)	立花(柳河)	松平(村上)	宮崎安貞	徳川家重	神武天皇	歌川(安藤) 広重
	レオナルド・ダ・ヴィンチ	有馬晴信	豊臣氏	本多(白河)	鍋島(佐賀)	酒井(庄内)	関孝和	徳川家治	鍋島直正	大谷鬼次
	ミケランジェロ	宗義智	加藤清正	奥平(宇都宮)	黒田(福岡)	山田長政	坂田藤十郎	光格天皇	村田清風	コッホ
	コペルニクス	大村純忠	李参平	酒井(前橋)	小笠原(小倉)	天草四郎	市川団十郎	徳川家斉	山田方谷	モネ
	ガリレイ	黒田孝高	徳川(水戸)	宗(府中)	支倉常長	三井高利	林家	林家	松平慶永	ドガ
	ルター	織田信長	狩野永徳	土井(古河)	山内(高知)	シャクシャイン	三井家	ラクスマン	橋本左内	ルノアール
	カルバン	今川義元	狩野山楽	松平(川越)	水野(福山)	雨森芳洲	鴻池家	レザノフ	調所広郷	セザンヌ
	フランシスコ・ザビエル	足利義昭	長谷川等伯	徳川(館林)	水野(松江)	徳川綱吉	玉川庄右衛門	最上徳内	伊達宗城	本居宣長
	マルコ・ポーロ	武田勝頼	千利休	阿部(岩槻)	松平(高松)	孔子	玉川清右衛門	近藤重蔵	山内豊信	前野良沢
	バスコ・ダ・ガマ	明智光秀	グーテンベルク	稲葉(小田原)	池田(岡山)	新井白石	浅野長矩(内匠頭)	間宮林蔵	徳川斉昭	杉田玄白
	コロンブス	豊臣秀吉	阿国	徳川(尾張)	榊原(姫路)	俵屋宗達	吉良義央(上野介)	伊能忠敬	江川英龍	平賀源内
学び舎	マゼラン	織田家	豊臣秀頼	戸田(大垣)	池田(鳥取)	柳沢吉保	大黒屋光太夫	エカテリーナ2世	二宮尊徳	賀茂真淵
	大内氏	島津氏	石田三成	井伊(彦根)	本多(郡山)	井原西鶴	エカテリーナ2世	高田屋嘉兵衛	十返舎一九	平田篤胤
	大友宗麟	北条氏	徳川家光	藤堂(安濃津)	酒井(小浜)	近松門左衛門	新渡戸稲造	ゴローニン	曲亭(滝沢) 馬琴	塙保己一
	フォベル	毛利氏	徳川家	徳川(紀伊)	松平(福井)	松尾芭蕉	内村鑑三	高野長英	与謝蕪村	ニュートン
	中浦ジュリアン	長宗我部元親	太田道灌	蜂須賀(徳島)	前田(金沢)	尾形光琳	徳川吉宗	高野長英	小林一茶	
	原マルチノ	島津義久	佐竹(秋田)	浅野(広島)	前田(富山)	菱川師宣	大岡忠相	渡辺華山	良寛	
	伊東マンショ	北条氏政	南部(盛岡)	松平(松山)	徳川(甲府)	林羅山	青木昆陽	シーボルト	鈴木春信	
	千々石ミゲル	北条氏直	松平(山形)	伊達(宇和島)	真田(松代)	中江藤樹	上杉治憲(鷹山)	中浜(ジョン) 万次郎	喜多川歌麿	
	織田信長	武田勝頼	斎藤竜興	本多	松平	松平	三井家	杉田玄白	レザノフ	
	豊臣秀吉	明智光秀	上杉景勝	奥平	細川	前田	井原西鶴	前野良沢	最上徳内	
	バスコ=ダ=ガマ	南部氏	島津氏	水戸徳川	立花	真田	松尾芭蕉	クルムス	近藤重蔵	
	ルター	最上氏	上杉氏	土井	有馬	酒井	近松門左衛門	山脇東洋	間宮林蔵	
	サビエル	伊達政宗	北条氏	阿部	鍋島	保科	市川団十郎	大槻玄沢	ジョン万次郎	
	ガリレオ=ガリレイ	佐竹義重	蠣崎氏(松前氏)	徳川	黒田	伊科トイ	イコトイ	平賀源内	高野長英	
	コロンブス	宇都宮氏	千利休	稲葉	宗	松平	シャクシャイン	伊能忠敬	渡辺華山	
	マゼラン	北条氏政	慶念	徳川	小笠原	酒井	徳川吉宗	本居宣長	大塩平八郎	
	リベラ	徳川家康	李舜臣	尾張徳川	毛利	佐竹	申維翰	平田篤胤	水野忠邦	
	ラブ=ラブ	長宗我部元親	加藤清正	松平	浅野	松前	雨森芳洲	葛飾北斎	鈴木利左衛門	
	ベニン国王皇太后	島津義久	金忠善(沙也可)	藤堂	水野	松平	松雲大師	十返舎一九		
	王直	龍造寺隆信	石田三成	本多	森	茶屋新六	徳川綱吉	鳥屋重三郎		
	大友義鎮(宗麟)	毛利輝元	豊臣氏	紀伊徳川	池田	ルイ14世	田沼意次	ラクスマン		
	大友氏	宇喜多氏	前田家	蜂須賀	池田	淀屋辰五郎	池上幸豊	大黒屋光太夫		
	アンジロー	山名豊国	徳川家光	池田	榊原	林羅山	上杉治憲(鷹山)	エカチェリーナ2世		
	今川義元	浅井長政	伊達	松平	井伊	鴻池家	飴屋兵助	松平定信		
	足利義昭	朝倉義景	丹羽	山内	酒井	住友家	いそ	林子平		

「別紙2-1」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 近世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 近世									
令 書	織田信長	明智光秀	紀伊家	二条	林羅山	前野良沢	渡会重全	梅田雲濱	福島正則	毛利
	足利義昭	後奈良天皇	尾張家	一条	林家	シーボルト	高田善兵衛	和宮	森吉成臣	小笠原
	豊臣秀吉 (羽柴秀吉)	毛利元就	水戸家	鷹司	徳川光圀	平賀源内	ラクスマン	徳川家茂	李舜臣	宗
	徳川家康	後陽成天皇	二条昭実	板倉重宗	中江藤樹	伊能忠敬	大黒屋光太夫	久坂玄瑞	李如松	黒田
	徳川秀忠	上部貞永	順徳天皇	称徳天皇	熊沢蕃山	与謝蕪村	レザノフ	伊藤博文	津軽	鍋島
	ルター	堀秀政	孝明天皇	後光明天皇	山鹿素行	小林一茶	アレクサンドル一世	山県有朋	佐竹	有馬
	グーテンベルク	柴田勝家	天草四郎時貞	徳川綱吉	関孝和	十返舎一九	津太夫	孟子	南部	細川
	ミケランジェロ	織田信雄	ヌルハチ	徳川家宣	乃木希典	式亭三馬	ドッビル	安藤信正	松平	島津
	レオナルド・ダ・ヴィンチ	藤原五摂家	康熙帝	新井白石	昭和天皇	滝沢馬琴	ブチャーチン	島津久光	伊達	島津家久
	バスコ・ダ・ガマ	近衛家	乾隆帝	徳川家綱	洪川春海	上田秋成	ゴローウニン	後醍醐天皇	上杉	有馬晴信
	コロンブス	長宗我部元親	宣統帝	朱熹	神武天皇	鈴木春信	高田屋嘉兵衛	木戸孝允	保科	松浦鎮信
	マゼラン	豊臣	末次平蔵	徳川家継	後小松天皇	喜多川歌麿	間宮林蔵	西郷隆盛	本多	荒木宗太郎
	アレクサンデル六世	旭姫	ちやくすくうんべいけ	伏見宮	王陽明	東洲斎写楽	渡辺華山	大久保利通	阿部	末吉孫左衛門
	フェリペ二世	天瑞院	謝名利山	有栖川宮	大塩平八郎	葛飾北斎	水野忠邦	徳川斉順	水戸	角倉了以
	クアウテモック	島津義久	第二尚氏	桂宮	徳川吉宗	歌川広重	調所広郷	一橋家	稲葉	茶屋四郎次郎
	コルテス	北条氏政	尚育	一宮家	松平定信	富永仲基	村田清風	坂本龍馬	徳川	今井宗薫
	トゥバク・アマル	伊達政宗	松前矩広	近衛基熙	徳川家治	山片蟠桃	鍋島直正	中岡慎太郎	真田	納屋 (呂宋) 助左衛門
	ピサロ	豊臣鶴松	シャクシャイン	東山天皇	田沼意次	大村益次郎	水野忠光	明治天皇	諏訪	島井宗室
	種子島時堯	豊臣秀次	宗氏	直仁親王	田沼意知	福沢諭吉	徳川家慶	※	水野	ウィリアム・アダムズ (三浦綾子)
	フランシスコ・ザビエル	豊臣秀勝	尚寧	閑院宮	田安宗武	吉田松陰	マシュー・ペリー	浅井長政	前田	ヤン・ヨーステン (耶揚子)
	今川義元	宇喜多秀家	亀井茲矩	近松門左衛門	松平定邦	高杉晋作	タウンゼント・ハリス	朝倉義景	金森	伊藤若冲
	斎藤龍興	豊臣秀頼	榊山氏	坂田藤十郎	徳川家斉	伊藤玄朴	堀田正睦	顕如	藤堂	
	正親町天皇	狩野永徳	平田氏	市川團十郎	徳川重賢	高野長英	阿部正弘	佐々成政	尾張	
	足利義輝	千利休	後水尾天皇	光格天皇 (祐宮)	松平治郷	後桃園天皇	徳川斉昭	武信玄	紀伊	
	朝倉氏	阿国	明正天皇	矢根五郎	上杉治憲	閑院宮典仁	井伊直弼	雑賀	池田	
	浅井氏	石田三成	中院通村	井原西鶴	林子平	後白河院	徳川慶喜	加藤清正	榊原	
	武田勝頼	毛利輝元	摂家	松尾芭蕉	三井	仁孝天皇	土井	黒田長政	京極	
	大友氏	上杉景勝	藤原良房	菱川師宣	鴻池	欣子内親王	酒井	小西行長	浅野	
	有馬氏	小早川秀秋	藤原北家	俵屋宗達	賀茂真淵	継体天皇	堀田	小早川隆景	森	
	大村氏	徳川家光	近衛	尾形光琳	本居宣長	後花園天皇	井伊	島津義弘	蜂須賀	
	慶光院上人	淀君	九条	孔子	杉田玄白	桃園天皇	橋本左内	立花宗茂	山内	
※印以降は、巻末の地図資料及び「美術図鑑」に記載されている人物名										

「別紙2-1」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 近代】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 近代									
東書	ロック モンテスキュー ルソー クロムウェル ワシントン ルイ14世 ナポレオン ナポレオン3世 ビスマルク フローレンス・ナイチンゲール リンカン ハリエット・ストウ (ストウ夫人) マルクス ベリ ハリス 井伊直弼 徳川慶福 (家茂) 徳川 (一橋) 慶喜	吉田松陰 高杉晋作 木戸孝允 西郷隆盛 大久保利通 坂本龍馬 岩倉具視 勝海舟 松平春嶽 山内容堂 橋本左内 由利公正 明治天皇 三条実美 板垣退助 大隈重信 徳川慶福 (家茂) 徳川 (一橋) 慶喜	中江兆民 山口尚芳 伊藤博文 津田梅子 尚泰 近藤重蔵 最上徳内 植木枝盛 黒田清隆 イザベラ・バード 楠本正隆 セシル・ローズ 井上馨 陸奥宗光 小村寿太郎 ジョルジュ・ピゴー 八田與一 幸徳秋水	内村鑑三 東郷平八郎 与謝野晶子 ネルー インディラ 寺内正毅 小早川 加藤 小西 豊田秀吉 石川啄木 安重根 孫文 袁世凱 宮崎滔天 梅屋庄吉 田中正造 フェノロサ	岡倉天心 横山大観 高村光雲 黒田清輝 ロダン 荻原守衛 滝廉太郎 二葉亭四迷 正岡子規 樋口一葉 夏目漱石 森鷗外 北里柴三郎 野口英世 長岡半太郎 石井十次 留田幸助 高峰譲吉	志賀潔 大森房吉 木村栄 鈴木梅太郎 ベル ブラック レーニン スターリン ウィルソン 新渡戸稲造 ガンディー 桂太郎 犬養毅 尾崎行雄 原敬 吉野作造 美濃部達吉	平塚らいてう 市川房枝 加藤高明 山田孝野次郎 西田幾多郎 柳宗悦 志賀直哉 谷崎潤一郎 芥川龍之介 小林多喜二 岸田劉生 竹久夢二 野口雨情 山田耕柝 宮城道雄 板谷波山 島崎藤村 ローズベルト	ローズベルト ムッソリーニ ヒトラー 蔣介石 張作霖 浜口雄幸 張學良 溥儀 リットン 松岡洋右 毛沢東 近衛文磨 斎藤隆夫 平沼騏一郎 チャーチル 杉原千畝 オスカー・シンドラー アンネ・フランク	東条英機 昭和天皇 野田貞雄 浜井信三	
	教出	エリザベス1世 クロムウェル ルイ14世 ロック モンテスキュー ルソー ワシントン ナポレオン ワット マルクス リンカン ビスマルク ナイチンゲール デュナン 洪秀全 フィヒテ グリム兄弟 オランブ=ドゥ=グージュ	上田万年 ベリ ブチャーチン ハリス 堀田正睦 井伊直弼 吉田松陰 西郷隆盛 大久保利通 高杉晋作 木戸孝允 坂本龍馬 徳川家茂 孝明天皇 和宮 伊藤博文 明治天皇 後藤象二郎	岩倉具視 徳川慶喜 山内豊信 榎本武揚 勝海舟 山川捨松 太助 三条実美 大隈重信 板垣退助 前島密 ムルドル クラーク モース コンドル フェノロサ 福沢諭吉 中江兆民	山口尚芳 永井繁子 上田悌子 吉益亮子 津田梅子 山川捨松 松浦武四郎 尚泰 伊波普猷 田島利三郎 真境名安興 東恩納寛惇 柳田国男 知里幸恵 金田一京助 金成マツ モナシノウク 川上音二郎	黒田清隆 天照大神 セシル=ローズ 陸奥宗光 小村寿太郎 井上馨 山県有朋 八田與一 内村鑑三 幸徳秋水 東郷平八郎 与謝野晶子 高橋是清 安重根 寺内正毅 小早川 加藤 小西	豊田秀吉 石川啄木 孫文 袁世凱 洪沢栄一 田中正造 片山潜 田中正造 新島襄 野口英世 北里柴三郎 長岡半太郎 森鷗外 樋口一葉 夏目漱石 島崎藤村 黒田清輝 岡倉天心	横山大観 高村光雲 滝廉太郎 志賀潔 高峰譲吉 鈴木梅太郎 木村栄 大森房吉 正岡子規 坪内逍遙 二葉亭四迷 三井家 岩崎弥太郎 レーニン ウィルソン 新渡戸稲造 蔣介石 ガンディー	柳宗悦 石橋湛山 桂太郎 西園寺公望 尾崎行雄 犬養毅 吉野作造 美濃部達吉 大正天皇 原敬 平塚らいてう 市川房枝 加藤高明 山田孝野次郎 西田幾多郎 志賀直哉 谷崎潤一郎 芥川龍之介	小林多喜二 岸田劉生 山田耕柝 ローズベルト ヒトラー ムッソリーニ スターリン 張作霖 浜口雄幸 溥儀 リットン 斎藤実 松岡洋右 毛沢東 近衛文磨 後藤新平 チャーチル アンネ=フランク
帝国		大塩平八郎 ベリ 徳川慶喜 明治天皇 洪沢栄一 カルバン クロムウェル ワシントン ルイ14世 モンテスキュー ロック ルソー ナポレオン マルクス リンカン ビスマルク ストウ ヴィルヘルム1世	伊藤博文 ベリ 間宮林蔵 高野長英 渡辺華山 ゴローニン 高田屋嘉兵衛 ラクスマン レザノフ 最上徳内 近藤重蔵 伊能忠敬 高杉晋作 鍋島直正 水野忠邦 河井継之助 山田方谷 徳川齊昭	村田清風 濱口梧陵 井伊直弼 吉田松陰 大浦慶 徳川家茂 木戸孝允 西郷隆盛 大久保利通 坂本龍馬 岩倉具視 三條実美 板垣退助 大隈重信 前島密 福沢諭吉 中江兆民	江藤新平 山口尚芳 久米邦武 永井繁子 上田悌子 吉益亮子 津田梅子 山川捨松 尚泰 謝花昇 天川恵三郎 柳波普猷 柳宗悦 クラーク 島義勇 黒田清隆 植木枝盛 千葉卓三郎	岸田俊子 陸奥宗光 ピゴー 寺島宗則 寺島宗則 青木周蔵 小村寿太郎 李鴻章 内村鑑三 幸徳秋水 東郷平八郎 与謝野晶子 小早川 加藤 小西 ファン=ボイ=チャウ 浅羽喜太郎 孫文	袁世凱 ネルー インディラ 豊田佐吉 原善三郎 原富太郎 田中正造 フェノロサ 狩野芳崖 岡倉天心 横山大観 黒田清輝 高橋由一 高村光雲 荻原守衛 正岡子規 夏目漱石 森鷗外	樋口一葉 滝廉太郎 二葉亭四迷 石川啄木 島崎藤村 北里柴三郎 野口英世 志賀潔 長岡半太郎 長与専斎 平塚らいてう レーニン ベートーヴェン ウィルソン 新渡戸稲造 メアリ 吉野作造 ガンディー	浅川巧 桂太郎 犬養毅 尾崎行雄 美濃部達吉 原敬 山県有朋 加藤高明 市川房枝 市川房枝 竹久夢二 チャップリン 芥川龍之介 新美南吉 小林多喜二 志賀直哉 山田耕柝 ユーハイム モロゾフ	柳田国男 後藤新平 知里幸恵 小林一三 山川菊栄 浜口雄幸 宮沢賢治 ローズベルト スターリン ムッソリーニ ヒトラー ピカソ 蔣介石 溥儀 リットン 山口淑子 (李香蘭) 毛沢東 近衛文磨

「別紙2-1」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 近代】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者		人物名 近代									
山川	ナポレオン ベリ ロック モンテスキュー ルソー クロムウェル ワシントン ルイ14世 ルイ16世 ワット マルクス エンゲルス リンカン アレクサンドル2世 洪秀全 イエス ハリス 井伊直弼	安藤信正 孝明天皇 和宮 徳川家茂 島津久光 近藤勇 土方歳三 吉田松陰 伊藤博文 山県有朋 木戸孝允（桂小五郎） 西郷隆盛 大久保利通 坂本龍馬 徳川慶喜 岩倉具視 榎本武揚 勝海舟	明治天皇 三条実美 板垣退助 大隈重信 福沢諭吉 新島襄 岩崎弥太郎 前島密 モレル ブリュナ 洪沢栄一 中江兆民 山口尚芳 ビスマルク 尚泰 知里幸恵 山川捨松 永井繁子	津田梅子 益田孝 山川健次郎 千葉卓三郎 川上音二郎 黒田清隆 天照大神 レセツプス ヴィルヘルム2世 マッキンリー セオドア＝ローズヴェルト ローズ 井上馨 陸奥宗光 小村寿太郎 桂太郎 李鴻章 ビゴー	西園寺公望 内村鑑三 幸徳秋水 与謝野晶子 東郷平八郎 安重根 孫文 袁世凱 李仁星 豊田佐吉 三井家 岩崎家 クラーク 松方正義 田中正造 山本作兵衛 フェノロサ 岡倉天心	狩野芳崖 横山大観 黒田清輝 ロダン 荻原守衛 高村光雲 滝廉太郎 二葉亭四迷 樋口一葉 夏目漱石 森鷗外 北里柴三郎 志賀潔 野口英世 長岡半太郎 レーニン ガンディー ヒトラー	ムッソリーニ ニコライ2世 ウィルソン 新渡戸稲造 ムスタファ＝ケマル ガートルード＝ベル 大正天皇 吉野作造 美濃部達吉 寺内正毅 原敬 高橋是清 平塚らいてう（明） 市川房枝 清浦奎吾 加藤高明 山田孝野次郎 鳩山一郎	小林一三 西田幾多郎 柳田国男 柳宗悦 志賀直哉 芥川龍之介 小林多喜二 フランクリン＝ローズヴェルト スターリン 浜口雄幸 宮沢賢治 蔭介石 張作霖 張學良 張宗昌 孫伝芳 呉佩孚 閻錫山	馮玉祥 溥儀 リットン 松岡洋右 犬養毅 毛沢東 近衛文麿 近衛家 スターリン フランコ ピカソ チャーチル 東条英機 アトリー トルーマン 重光葵 梅津美治郎 オバマ 平清盛	こうの史代 昭和天皇	
	日文	ベリ マルクス ロバート＝オーウェン エンゲルス ルイ14世 クロムウェル ロック モンテスキュー ルソー ホッブス ワシントン 徳川家康 田沼意次 ナポレオン フランクリン ジェファソン アダムズ リンカン	ビスマルク フローレンス＝ナイチンゲール 洪秀全 ラクスマン 高野長英 渡辺華山 大塩平八郎 最上徳内 近藤重蔵 間宮林蔵 レザノフ ゴロウニン ビッドル 水野忠邦 ハリス 井伊直弼 吉田松陰 西郷隆盛	大久保利通 高杉晋作 木戸孝允 和宮 徳川家茂 坂本龍馬 岩倉具視 徳川慶喜 勝海舟 伊藤俊輔（博文） 井上聞多（馨） 明治天皇 三条実美 板垣退助 大隈重信 江藤新平 洪沢栄一 福沢諭吉	中江兆民 岡倉天心 フェノロサ 狩野芳崖 津田梅子 山口尚芳 永井繁子 山川捨松 アリス＝ペーコン 尚泰 クロフォード 広井勇 グナイス スタイン 黒田清隆 陸奥宗光 小村寿太郎 内村鑑三	李鴻章 幸徳秋水 与謝野晶子 東郷平八郎 安重根 小早川 加藤 小西 寺内正毅 豊田秀吉 石川啄木 孫文 袁世凱 梅屋庄吉 トク 山本作兵衛 堺利彦 平塚らいてう	田中正造 坪内逍遙 二葉亭四迷 森鷗外 夏目漱石 正岡子規 樋口一葉 島崎藤村 横山大観 黒田清輝 荻原守衛 北里柴三郎 野口英世 長岡半太郎 志賀潔 木村栄 高峰譲吉 鈴木梅太郎	大森房吉 石井十次 古河市兵衛 国木田独歩 レーニン ウィルソン 新渡戸稲造 ココニ＝シャネル ガンディー 柳宗悦 吉野作造 桂太郎 西園寺公望 美濃部達吉 原敬 市川房枝 加藤高明 西光万吉	山田孝野次郎 武者小路実篤 谷崎潤一郎 芥川龍之介 小林多喜二 吉川英治 江戸川乱歩 辰野金吾 久原房之介 豊田佐吉 森竹竹市 スターリン ムッソリーニ ヒトラー ローズベルト ピカソ 蔭介石 浜口雄幸	溥儀 犬養毅 石橋湛山 毛沢東 斎藤隆夫 チャーチル アンネ＝フランク 杉原千畝 根井三郎 東条英機 昭和天皇 佐藤多持	
自由社	カルバン クロムウェル ワシントン ロック モンテスキュー ルソー ルイ14世 ルイ16世 マリー・アントワネット エドモンド・バーク ナポレオン ジョージ3世 ジョン・ケイ ハーグリーブス ワット クロムプトン スティーパーソン マルクス ビスマルク 洪秀全 ベリ 阿部正弘 水野忠邦	ハリス 孝明天皇 井伊直弼 徳川齊昭 吉田松陰 橋本左内 徳川家康 久坂玄瑞 高杉晋作 桂小五郎（木戸孝允） 西郷隆盛 大久保利通 坂本龍馬 後藤象二郎 徳川慶喜 明治天皇 岩倉具視 神武天皇 勝海舟 松平容保 後鳥羽上皇 後醍醐天皇 三条実美	グリフィス 大隈重信 板垣退助 副島種臣 山県有朋 江藤新平 大木喬任 伊藤博文 李氏 小林虎三郎 佐久間象山 尚氏 尚寧王 徳川秀忠 伊波普猷 山口尚芳 津田梅子 西郷従道 大山巖 東郷平八郎 山本権兵衛 福沢諭吉 中村正直	サミュエル・スマイルズ 井上馨 陸奥宗光 芥川龍之介 三島由紀夫 小村寿太郎 川上音二郎 ミル 植木枝盛 井上毅 内藤魯一 千葉卓三郎 黒田清隆 天照大神 元永孚 金玉均 李鴻章 正岡子規 桂太郎 加藤高明 ニコライ皇太子（ニコライ2世） 林董 夏目漱石（金之助）	柴五郎 乃木希典 ステッセル 秋山好吉 秋山真之 金子堅太郎 川上音二郎 ウィット ヴィルヘルム2世 久松五勇士 孫文 ネルー ムスタファ＝カーミル シーラージー アーノルド・トインビー ガンジー 溥儀 袁世凱 宮崎滔天 洪沢栄一 浅野総一郎 古河市兵衛 大倉喜八郎	篠田直方 川崎正蔵 田中正造 片山潜 幸徳秋水 安部磯雄 北里柴三郎 野口英世 二葉亭四迷 尾崎紅葉 森鷗外 樋口一葉 高峰譲吉 志賀潔 大森房吉 木村栄 長岡半太郎 鈴木梅太郎 緒方洪庵 エドワード・ジェンナー コッホ 島崎藤村 与謝野晶子	石川啄木 フェノロサ 岡倉天心 横山大観 狩野芳崖 黒田清輝 藤島武二 高村光雲 滝廉太郎 洪沢敬三 宮本常一 トーマス・グラバー オーストリアの皇太子 レーニン ニコライ2世 ウィルソン 西園寺公望 昭和天皇 ケマル・アタチュルク 吉野作造 原敬 尾崎行雄 犬養毅	平塚らいてう 松方正義 高橋是清 浜口雄幸 後藤新平 柳田国男 志賀直哉 武者小路実篤 谷崎潤一郎 永井荷風 鈴木三重吉 大正天皇 裕仁親王 ルーズベルト 若槻礼次郎 スターリン ムッソリーニ ヒトラー リヒャルト・ゾルゲ フルシチョフ 蔭介石 幣原喜重郎 張作霖	ジョン・マクマリー 張學良 斎藤実 岡田啓介 広田弘毅 リットン 鈴木貫太郎 大山中尉 船津振一郎 斎藤隆夫 近衛文麿 尾崎秀実 ハル 樋口季一郎 杉原千畝 東条英機 高村光太郎 古川ロッパ バー・モウ 張景恵 汪兆銘 ワンワイタヤークーン ホセ・ラウレル	スバス・チャンドラ・ボース 米川琴 チャーチル トルーマン 太田實 アトリー 阿南惟幾 新渡戸稲造 ベルクソン スカルノ ハッタ スティールマン ククリット・ブラモード ジョー・オダネル フランシスコ フーバー	

「別紙２－１」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 近代】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 近代									
育鵬社	ベリー	徳川家	大村益次郎	西園寺公望	セオドア・ルーズベルト	田山花袋	イザベラ・バード	市川房枝	ムッソリーニ	西田高光
	クロムウェル	緒方洪庵	尚泰	陸奥宗光	高橋是清	石川啄木	エルウィン・ベルツ	西光万吉	ヒトラー	山岡荘八
	ロック	松平慶永	江藤新平	小村寿太郎	ステツセル	志賀潔	レーニン	山田孝野次郎	蔣介石	大佛次郎
	モンテスキュー	孝明天皇	板垣退助	寺島宗則	フェノロサ	秦佐八郎	スターリン	幣原喜重郎	張作霖	徳富蘇峰
	ルソー	高杉晋作	山口尚芳	青木周蔵	岡倉天心	鈴木梅太郎	ロイド・ジョージ	江戸川乱歩	昭和天皇	
	ワシントン	木戸孝允 (桂小五郎)	津田梅子	原敬	横山大観	高峰譲吉	クレマンソー	西田幾多郎	溥儀	
	ルイ14世	西郷隆盛	島津斉彬	金玉均	狩野芳崖	木村栄	ウィルソン	柳田国男	リットン	
	ナポレオン	大久保利通	岩崎弥太郎	李鴻章	富岡鉄斎	大森房吉	袁世凱	柳宗悦	松岡洋右	
	ワット	久坂玄瑞	福沢諭吉	東郷平八郎	高村光雲	新島襄	ガンディー	志賀直哉	毛沢東	
	スティープンソン	伊藤博文	中村正直	秋山真之	ロダン	クラーク	大正天皇	武者小路実篤	張学良	
	マルクス	山県有朋	中江兆民	乃木希典	荻原守衛	新渡戸稲造	尾崎行雄	谷崎潤一郎	近衛文磨	
	エンゲルス	孟子	前島密	与謝野晶子	黒田清輝	内村鑑三	犬養毅	芥川龍之介	斎藤隆夫	
	ピスマルク	坂本龍馬	大隈重信	ネルー	滝廉太郎	ナウマン	寺内正毅	小林多喜二	アンネ・フランク	
	リンカン	中岡慎太郎	植木枝盛	孫文	坪内逍遙	バーマー	加藤高明	山田耕作	杉原千畝	
	フローレンス＝ナイチンゲール	徳川慶喜	黒田清隆	宮崎滔天	二葉亭四迷	フルベッキ	吉野作造	安井曾太郎	樋口季一郎	
	洪秀全	横井小楠	五代友厚	安重根	樋口一葉	ボアソナード	美濃部達吉	竹久夢二	東条英機	
	阿部正弘	明治天皇	三島通庸	八田與一	森鷗外	ロエスレル	山本権兵衛	後藤新平	コーデル・ハル	
	ハリス	後藤象二郎	井上毅	渋沢栄一	夏目漱石	キンドル	加藤友三郎	鈴木三重吉	チャーチル	
	井伊直弼	山内豊信 (容堂)	松方正義	新田長次郎	野口英世	コンドル	清浦奎吾	ムスタファ・ケマル	トルーマン	
	吉田松陰	岩倉具視	井上馨	片山潜	北里柴三郎	ヘボン	若槻礼次郎	チャンドラ・ボーズ	鈴木貫太郎	
	橋本左内	榎本武揚	西郷従道	幸徳秋水	長岡半太郎	ハーン (小泉八雲)	田中義一	アウンサン	重光葵	
	和宮	三条実美	大山巖	田中正造	島崎藤村	ハインリッヒ・シュリーマン	浜口雄幸	スカルノ	島田穀	
	徳川家茂	勝海舟	桂太郎	金子堅太郎	国木田独步	モース	平塚らいてう	フランクリン・ルーズベルト	大田実	
学び舎	エリザベス＝フリーマン	ネルー	島津久光	深沢権八	外山亀太郎	袁世凱	ウォルト＝ディズニ	ハンス＝ショル		
	ルイ16世	ベリー	モース	大隈重信	メンデル	レーニン	リリアン＝ディズニ	アンネ＝フランク		
	オランブ＝ド＝グージュ	菅野八郎	山口尚芳	ベルツ	夏目漱石	ウィルソン	チャップリン	オットー		
	ナポレオン＝ボナパルト	ハリス	伊藤博文	黒田清隆	森鷗外	スターリン	犬養毅	オードリー＝ヘプバーン		
	トゥサン＝ルベルチュール	井伊直弼	中江兆民	内村鑑三	黒田清輝	柳寛順	ルーズベルト	森田忠信		
	プリンコウ	中居屋重兵衛	ルソー	栃内泰吉	幸徳秋水	ガンジー	ヒトラー	水木しげる		
	メアリ	坂本龍馬	板垣退助	マタイチ (琴似又一郎)	高宗	浅川巧	ピカソ	荒木幸雄		
	スチーブンソン	西郷隆盛	福沢諭吉	松浦武四郎	古河市兵衛	寺内正毅	フランコ将軍	平良啓子		
	アークライト	木戸孝允	津田梅子	ココニャネル	田中正造	平塚らいてう	蔣介石	山城博則		
	マルクス	徳川家茂	横田英	全琫準	岩崎久弥	市川房枝	張作霖	金城重明		
	エンゲルス	孝明天皇	楠瀬喜多	陸奥宗光	三井八郎右衛門	曹仁承	昭和天皇	加藤義典		
	ヤーコプ＝グリム	高杉晋作	植木枝盛	ジャジャ王	前田利嗣	吉野作造	松岡洋右	佐々木禎子		
	ヴィルヘルム＝グリム	徳川慶喜	河野広中	ニコライ2世	住友吉左衛門	山田孝野次郎	岡田啓介	トルーマン		
	スメタナ	岩倉具視	岸田俊子	小村寿太郎	島津忠重	桂太郎	高橋是清	峠三吉		
	林則徐	相楽総三	江藤新平	与謝野晶子	安田善次郎	原敬	毛沢東	ムッソリーニ		
	洪秀全	明治天皇	太刀ふじ	樋口一葉	毛利元昭	山本宣治	夏淑琴			
	孫文	ピスマルク	深沢家	天照大神	大倉喜八郎	小林多喜二	ソフィー＝ショル			
	ラクシュミー＝パーイー	大久保利通	千葉卓三郎	神武天皇	魯迅	呂運亨				

「別紙２－１」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 近代】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 近代													
令 書	ジョン王	明治天皇	洪沢栄一	二葉亭四迷	伊東巳代治	西太后	牧野伸顕	蔣介石	アンネ・フランク	五瀬命				
	クロムウェル	徳川慶喜	百助	夏目漱石	三条実美	小村寿太郎	寺内正毅	張学良	東条英機	ガスバル・ヴィレラ				
	カルヴァン	勝海舟	お順	森鷗外	黒田清隆	セオドア・ルーズベルト	加藤高明	石原莞爾	松岡洋右	※				
	チャールズ1世	西郷隆盛	聖徳太子	樋口一葉	井上馨	乃木希典	犬養毅	田中義一	野村吉三郎	土方歳三				
	ジェームズ2世	榎本武揚	緒方洪庵	石川啄木	青木周蔵	東郷平八郎	清浦奎吾	愛新覚羅溥儀（宣統帝）	ウェルズ	輪王寺宮公現入道親王				
	メアリー2世	福羽美静	狩野芳崖	正岡子規	陸奥宗光	幸徳秋水	加藤友三郎	斎藤実	木戸幸一	松平容保				
	ウィリアム3世	大木喬任	フェノロサ	北里柴三郎	ニコライ	高橋是清	吉野作造	光緒帝	チャーチル	河井継之助				
	ジョージ・ワシントン	後藤象二郎	岡倉天心	志賀潔	金玉均	ヤコブ・シフ	美濃部達吉	フランクリン・ルーズベルト	杉山元	相楽総三				
	ルイ14世	徳大寺実則	高峰譲吉	野口英世	大村益次郎	秋山好古	ガンディー	浜口雄幸	原嘉道	張宗昌				
	ジョン・ロック	東久世道禧	秦佐八郎	長岡半太郎	齐明天皇	ステッセル	上杉慎吉	井上準之助	コーデル・ハル	閻錫山				
	シャルル・ド・モンテスキュー	前島密	鈴木梅太郎	高村東雲	北白川宮能久親王	秋山真之	市川房枝	宮沢賢治	汪兆銘	馮玉祥				
	ジャン＝ジャック・ルソー	福沢諭吉	田中館愛橘	ロダン	李鴻章	与謝野晶子	西田幾多郎	ムッソリーニ	スチムソン	吳佩孚				
	ルイ16世	古河市兵衛	木村栄	近藤重蔵	李経方	高宗皇帝	谷崎潤一郎	ヒトラー	ノックス	孫伝芳				
	マリアンヌ	岩崎弥太郎	牧野富太郎	クラーク	伍廷芳	孫文	志賀直哉	岡田啓介	鈴木貫太郎	周蔭人				
	ナポレオン・ボナパルト	岩倉具視	大森房吉	内村鑑三	エミン・オスマン・パシャ	袁世凱	芥川龍之介	広田弘毅	ハリー・トルーマン					
	ロベスピエール	木戸孝允	田口卯吉	新渡戸稲造	サダム・フセイン	豊田佐吉	小林多喜二	武藤章	バーンズ					
	リンカーン	大久保利通	梅謙次郎	上杉茂憲	野村豊	田中正造	竹久夢二	毛沢東	東郷重徳					
	ラーマ5世	伊藤博文	穂積八束	昭和天皇	イスメット・ビルセル	大正天皇	岸田劉生	丹生誠忠	リーヒ					
	マフムト2世	中江兆民	アンデルセン	尚泰	トルグト・オザル	ラスプーチン	野口雨情	近衛文麿	高石ミキ					
	林則徐	ビクトリア女王	横山大観	板垣退助	ネジアティ・ウトカン	レーニン	山田耕筈	朴春琴	上田局長					
	ラクスマン	ウィルヘルム1世	黒田清輝	有栖川宮熾仁親王	西園寺公望	スターリン	宇田新太郎	坂井三郎	香淳皇后					
	レザノフ	ビスマルク	高村光雲	江藤新平	原敬	平塚らいてう	八木秀次	百田尚樹	反正天皇					
	マシュー・ペリー	金子堅太郎	荻原守衛	大隈重信	山縣有朋	ウィルソン	武者小路実篤	樋口季一郎	仁徳天皇					
	タウンゼント・ハリス	津田梅子	滝廉太郎	井上毅	桂太郎	珍田捨巳	張作霖	杉原千畝	履中天皇					
※印以降は、巻末の地図資料及び「美術図鑑」に記載されている人物名														

「別紙2-1」【(1)内容 イ 調査項目の具体的な内容 b 歴史上の人物名 現代】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	人物名 現代									
東書	マッカーサー 昭和天皇 東条英機 毛沢東 蔣介石	ネルー 吉田茂 池田勇人 岸信介 久保山愛吉	周恩来 鳩山一郎 田中角栄 佐藤栄作 田中角栄	キング牧師 黒澤明 力道山 長嶋茂雄 王貞治	大鵬 手塚治虫 松本清張 湯川秀樹 川端康成	大江健三郎 湯川秀樹 朝永振一郎 江崎玲於奈 福井謙一	利根川進 ゴルバチョフ ブッシュ 鄧小平 細川護熙	片寄平蔵 濱口梧陵 加藤諒太		
教出	マッカーサー 昭和天皇 毛沢東 吉田茂 カストロ	ゲバラ ケネディ フレンチョフ 岸信介 アイゼンハワー	周恩来 田中角栄 佐藤栄作 池田勇人	黒澤明 湯川秀樹 美空ひばり 長嶋茂雄 王貞治	大鵬 力道山 中仲弥次郎 松本清張 司馬遼太郎	川端康成 大江健三郎 手塚治虫 藤子不二雄 岡本太郎	ブッシュ ゴルバチョフ 細川護熙 久保山愛吉 佐々木禎子	クーベルタン シャルル・バルビエ ルイ・ブライユ 石川倉次		
帝国	マッカーサー 昭和天皇 加納莞菴 キリノ 毛沢東	蔣介石 吉田茂 鳩山一郎 池田勇人 岸信介	ネルー 李承晩 小谷伊兵衛 佐藤栄作 田中角栄	福田赳夫 周恩来 中曽根康弘 竹下登 大鵬(カ士)	美空ひばり 長嶋茂雄 手塚治虫 湯川秀樹 古橋廣之進	黒澤明 永井隆 皇太子(現在の天皇) 王貞治 力道山	松本清張 司馬遼太郎 川端康成 大江健三郎 長谷川町子	草間彌生 岡本太郎 ゴルバチョフ 細川護熙 土井たか子	中村哲	
山川	マッカーサー 昭和天皇 オバマ 東条英機 吉田茂	片山哲 中山マサ子 緒方貞子 土井たか子 向井千秋	太田房江 蔣介石 毛沢東 ホーニミン ネルー	スカル レーニン ドッソン ジョ 佐藤栄作	岸信介 栄内蔵 中上徳重 最上徳子 池田勇人	湯川秀樹 黒澤明 大橋鎮子 ケネディ ホメイニ	ゴルバチョフ ブッシュ キング牧師 鄧小平 フセイン	菅義偉 安倍晋三		
日文	ネルー 周恩来 マッカーサー 昭和天皇 高野岩三郎	美空ひばり 笠置シズ子 黒澤明 溝口健二 湯川秀樹	古橋廣之進 毛沢東 吉田茂 岸信介 佐藤栄作	田中角栄 手塚治虫 マララ・ユスフザイ						
自由社	マッカーサー 昭和天皇 東条英機 ハル トルーマン 毛沢東 蔣介石 吉田茂 李承晩 鳩山一郎 スターリン ユーリー・ガガーリン	ケネディ ニール・アームストロング チャールズ ニクソン 岸信介 アイゼンハワー 池田勇人 佐藤栄作 香淳皇后 古橋廣之進 橋爪四郎 湯川秀樹	フレッド・ワダ アベベ チャールズ フルシチョフ 田中角栄 周恩来 福田赳夫 福田正芳 鈴木善幸 中曽根康弘 竹下登	川端康成 谷崎潤一郎 三島由紀夫 小林秀雄 小津安二郎 黒澤明 美空ひばり 力道山 長嶋茂雄 王貞治 大鵬 松本清張	司馬遼太郎 手塚治虫 宮崎駿 朝永振一郎 江崎玲於奈 福井謙一 利根川進 大江健三郎 白川英樹 野依良治 小島昌俊 中村耕一	南部陽一郎 小林誠 益川敏英 下村脩 鈴木章 根岸英一 山中伸弥 赤崎勇 天野浩 中村修二 梶田隆章 大村智	大隅良典 本庶佑 眞鍋淑郎 明仁親王 ゴルバチョフ ブッシュ エリツィン 天皇(現上皇) 皇后(現上皇后) 宇野宗佑	海部俊樹 渡邊喜一 宮田富太郎 村山富子 橋本龍太郎 小渕恵三 森喜朗 小泉純一郎 安倍晋三 福田康夫 麻生太郎 鳩山由紀夫	菅直人 野田佳彦 金一族 ダライ・ラマ14世 天皇陛下(今上天皇)(徳仁親王) 横田めぐみ 金正日 菅義偉 トランプ バイデン 岸田文雄 習近平	フセイン 明仁天皇 八田與一 遠藤未希 河信二郎 島秀雄
育鵬社	朴正熙 フルガーニン マッカーサー 昭和天皇 東条英機 ハル 毛沢東	蔣介石 チャーチル 吉田茂 鳩山一郎 岸信介 重蔵内 近藤徳内 最上徳内	山本昭平 李承晩 二佐藤栄作 田中角栄 周恩来 池田勇人	美空ひばり 太宰治 黒澤明 湯川秀樹 長嶋茂雄 王貞治 大鵬	手塚治虫 森繁久彌 森光子 川端康成 三島由紀夫 司馬遼太郎 松本清張	大江健三郎 村上春樹 小澤征爾 宮崎駿 北野武 安倍晋三 島安次郎	島秀雄 島降 ゴルバチョフ ブッシュ レーニン フセイン ゼレンスキー	明仁親王 ダライ・ラマ14世 小泉純一郎 徳仁親王 孝徳天皇 文武天皇 豊吉	崇神天皇 光明皇后 曲亭(滝沢)馬琴 ジェンナー 鍋島直正 緒方洪庵 アブドル・ハミド二世	明治天皇 山県有朋 福沢諭吉 殿戸皇子(聖徳太子)
学び舎	グレタ・トゥーンベリ マリyam 山口シヅエ 橋本実 マッカーサー	昭和天皇 天雅子 山田隆雄 鈴木昌秀 石成基	小倉勇 呂運亨 毛沢東 毛沢東 吉田茂	スカル 久保山愛吉 佐々木仙三 山口トミ 小林トミ	岸信介 池田勇人 朝日茂子 黒田操子 アベベ	ザ・ビートルズ チャスラフスカ マーチンルーサーキング マルタ＝クビシバ 佐藤栄作	安倍晋三 眞栄城玄徳 カミ 佐藤家 佐藤周平	莊雲希(佐藤美和子) 村山富子 田中角栄 周恩来 河野洋平	金学順 フセイン	
令書	マッカーサー 昭和天皇 東久邇宮稔彦王 朝香宮 竹田宮 閑院宮 光美 重光葵 梅津美治郎 森徳次郎 藤田尚徳 ボナー・フェローズ 蔣介石	毛沢東 吉田茂 鳩山一郎 岸信介 シャルル・ド・ゴール 永田リモフ ケネディ フルニョフ 池田勇人 島安次郎 島秀雄	十河信二 河内秀樹 湯川秀樹 朝永振一郎 江崎玲於奈 佐藤栄作 福井謙一 利根川進 白川英樹 大井隆章 小柴昌俊	田中耕一 南部陽一郎 小林誠 益川敏英 下村脩 根岸英一 鈴木章 山中伸弥 赤崎勇 天野浩 中村修二 梶田隆章	大村智 藤田一郎 カズオ・イシグロ 本庶佑 吉野彰 眞鍋淑郎 明仁親王(平成の天皇陛下) 正田美智子(上皇皇后) イービトス リュクールゴス ビエール・ド・クーベルタン 黒澤明	美空ひばり 藤田一郎 東山陽子 藤田治 榎方志功 岡本太郎 伊東深水 志村立美 三島由紀夫 松本清張 司馬遼太郎	手塚治虫 宮崎駿 劉少奇 田中角栄 福田赳夫 ゴルバチョフ 胡耀邦 ブッシュ エリツィン オバマ サダム・フセイン プーチン	習近平 古田清護 細川護熙 山富子 金学順 小泉純一郎 金正日 安倍晋三 トランプ 遠藤未希 光格天皇	菅義偉 坪井直重 森昭 ※ 奈良美智	

※印以降は、巻末の地図資料及び「美術図鑑」に記載されている人物名

「別紙２－２」【（１）内容 イ 調査項目の具体的な内容 ｃ 主な文化遺産 古代まで】（中学校 社会 歴史的分野）

発行者		主な文化遺産 古代まで		
東書	伴大納言絵巻 修復された高松塚古墳壁画 延暦寺 三内丸山遺跡 ラスコー洞窟の壁画 ウルのジググラト ギザの三大ピラミッド モヘンジョ・ダロの都市遺跡 西安（長安）にある兵馬俑坑と兵馬俑 万里の長城 殷で造られた青銅器 甲骨文字が刻まれた牛の骨 アクロポリスとパルテノン神殿	古代ローマの水道橋 コロッセオ アーナンダー寺院 サン・ピエトロ大聖堂 イマームモスク ポロブドゥール遺跡 エルサレム 縄文土器 土偶 銅鏡 銅鐸 「漢委奴国王」と刻まれた金印 大仙古墳（仁徳陵古墳）	武人埴輪 須恵器 ワカタケル大王（武）の名を刻んだ鉄剣 鉄刀 法隆寺 竜門石窟 法隆寺の釈迦三尊像 広隆寺の弥勒菩薩像 平城宮跡 木簡 トルファンの樹下美人図 興福寺の阿修羅像 正倉院	東大寺の大仏 鑑真 周防国玖珂郡玖珂郷の戸籍 最澄 延暦寺 紫式部日記絵詞 御堂関白記 平等院鳳凰堂 平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像 源氏物語絵巻 出雲大社本殿 出雲大社の境内から発掘された心御柱 佐陀神能
	万里の長城 縄文土器（十日町市博物館） 土偶（茅野市尖石縄文考古館） 埴輪 須恵器 ラスコー洞窟壁画 ウルのジググラト ギザのピラミッド スフィンクス モヘンジョ＝ダロの遺跡 兵馬俑坑 甲骨文字が刻まれた牛の骨 雲崗の石窟 アテネのパルテノン神殿	ローマのコロッセウム（闘技場） 古代ローマの水道橋 岩のドームと「嘆きの壁」 聖墳墓教会の聖堂にあるイエスの石墓 エローラ石窟群に彫られたシヴァ神 慈恩寺の大雁塔 サーンチーの仏塔 縄文土器（十日町市博物館） 土偶（東京国立博物館） 銅鐸 荒神谷遺跡から出土した銅剣 「漢委奴国王」と刻まれた金印 百舌鳥古墳群 鉄製のよろい	銅鏡 江田船山古墳出土の鉄刀 稲荷山古墳出土の鉄剣 石窟庵の石仏 法隆寺金堂の釈迦三尊像 法隆寺 弥勒菩薩像 平城宮跡から出土した木簡 中国西部トルファンの樹下美人図 鑑真 東大寺の正倉院 東大寺の大仏 興福寺の阿修羅像 行基	駒競行幸絵巻 紫式部日記絵詞 源氏物語絵巻 住吉物語絵巻断簡 土佐日記 平等院鳳凰堂 阿弥陀如来像 古事記 出雲大社 三内丸山遺跡 清水寺縁起絵巻
帝国	ラスコーの洞穴壁画 ギザのピラミッド スフィンクス メソポタミアの遺跡であるウルのジググラト（聖塔） モヘンジョ＝ダロ遺跡の沐浴場 漢字のもとになった甲骨文字 兵馬俑坑 万里の長城 パルテノン神殿 古代ローマの水道橋 シャカが悟りを開いたブッダガヤにある大菩提寺 イエスの墓といわれる場所に建つ教会 ムハンマドが昇天したといわれる岩のドーム	縄文土器『火焰型土器』 土偶（東京国立博物館） 土偶『合掌土偶』（是川縄文館） 銅鐸 荒神谷遺跡の銅剣 「漢委奴国王」と彫られた金印 よろい 大仙（大山）古墳 百舌鳥古墳群 多胡碑 稲荷山古墳出土の鉄剣 江田船山古墳出土の鉄刀 武人埴輪	釈迦三尊像 竜門石窟 日本の弥勒菩薩 法隆寺 樹下美人図 東大寺の大仏 大仏殿（東大寺） 正倉院正倉 興福寺阿修羅像 薬師寺吉祥天像 鑑真 日本書紀 紫式部日記絵詞	紫式部日記絵巻断簡 御堂関白記 清水寺本堂 源氏物語絵巻 延暦寺 阿弥陀如来座像 雲中供養菩薩像 平等院鳳凰堂 空也上人立像 エジプト・アブシンベル神殿 三内丸山遺跡
	「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 ラスコーの洞穴壁画 ピラミッド スフィンクス モエンジョ＝ダロー パルテノン神殿 円形闘技場（コロッセウム） 甲骨文字 兵馬俑 万里の長城 蛇紐金印「漢委奴国王」 エルサレム 火焰型土器	三内丸山遺跡全景 土偶（茅野市尖石縄文考古館） 銅鐸 三角縁神獣鏡 大仙陵古墳 稲荷山古墳出土の鉄剣 法隆寺 法隆寺玉虫厨子 法隆寺金堂釈迦三尊像 木簡 鑑真像 正倉院宝庫 樹下美人図	くり返し文字を練習した木簡 東大寺大仏 救王護国寺講堂不動明王像 薬師寺僧形八幡神像 神功皇后像 最澄 北野天神縁起絵巻 御堂関白記 平等院鳳凰堂 平等院鳳凰堂阿弥陀如来像 慈照寺（銀閣） 西本願寺 救王護国寺（東寺）	清水寺 抹茶を飲むための天目茶碗 旧八幡製鉄所

「別紙2ー2」【（1）内容 イ 調査項目の具体的な内容 ｃ 主な文化遺産 古代まで】（中学校 社会 歴史的分野）

発行者		主な文化遺産 古代まで		
日 文	東大寺の大仏 金光明最勝王經 約2万年前の新人の絵（ラスコー） ピラミッド スフィンクス ウルのジググラト モヘンジョ＝ダロ 甲骨文字 兵馬俑坑 万里の長城 バルテノン神殿 古代ローマの水道橋 コロッセオ（円形闘技場）	仏教の寺院と僧たち エルサレム 三内丸山遺跡 土偶（茅野市尖石縄文考古館） 縄文土器（火焰型土器） 「漢委奴國（国）王」という文字が刻まれた金印 銅鐸 大仙（仁徳天皇陵）古墳 古市古墳群 「ワ加多支鹵大王」と記された鉄剣 埴輪（武人の埴輪） 新羅時代の代表的な仏像（慶州石窟庵の阿弥陀如来座像） 法隆寺	飛鳥時代の日本の仏像（弥勒菩薩半跏思惟像） 鑑真 興福寺阿修羅像 正倉院（正倉） 行基 佐太神社の佐蛇神能 最澄 比叡山延暦寺 高野山金剛峯寺 紫式部日記絵巻 御堂関白記 周防国（山口県）玖珂郡玖珂郷の戸籍 源氏物語絵巻	平等院鳳凰堂 平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像 薬師寺東塔 平城宮跡 熊野古道
	紀伊山地の霊場と参詣道 法隆寺 秋田県・大湯遺跡 数を表す土版 北海道・北東北縄文遺跡群（北海道・青森県・岩手県・秋田県） 青森県三内丸山遺跡「縄文ボシェット」 仮面の女神 縄文の女神 合掌土偶 中空土偶 縄文のヴィーナス 仁徳天皇陵（大仙古墳） 鑑真 ラスコー洞窟の壁画	縄文土器（十日町市博物館） 局部磨製石器 メソポタミア文明のジググラト（聖なる塔） エジプト文明のピラミッド スフィンクス インダス文明の都市の跡 モヘンジョダロ（地名）の遺跡 黄河文明 殷の都の跡（殷墟） 甲骨文字 万里の長城 ローマのコロッセオ ローマの公衆浴場 カラカラ浴場 銅剣 銅矛	銅鐸 「漢委奴国王」の金印 鉄のよろいを着た武人 七支刀 稲荷山古墳鉄剣銘文 「日本書紀」の写本 法隆寺の五重塔 釈迦三尊像 百済観音像 奈良の大仏 盧舎那仏像 正倉院 月光菩薩像 紫式部日記絵詞	最澄（伝教大師） 中尊寺金色堂 源氏物語絵巻 東大寺金堂 平等院鳳凰堂 雲中供養菩薩
自由社	火焔型土器 土偶（縄文の女神たち）（山形県立博物館） 土偶（縄文の女神たち）（茅野市尖石縄文考古館） 銅鐸 武人埴輪 法隆寺五重塔 百済観音像 中宮寺弥勒菩薩半跏像 玉虫厨子 阿修羅像 四天王像 広目天 吉祥天女画像 雲中供養菩薩像 源氏物語絵巻	ラスコーの洞窟壁画 三内丸山遺跡 土偶（東京国立博物館） ピラミッド メソポタミアの神殿 モヘンジョ・ダロ 甲骨文字 兵馬俑坑 万里の長城 バルテノン神殿 コロッセオ ローマ時代の水道橋 銅剣 銅矛	金印 大仙古墳（仁徳天皇陵） 稲荷山古墳から出土した鉄剣 江田船山古墳から出土した鉄刀 ブツダガヤのマハーボーディ寺院 サン・ピエトロ大聖堂 龍門石窟の仏像 浦上天主堂 法隆寺 釈迦三尊像 鑑真 唐招提寺（金堂） 正倉院正倉 月光菩薩像	出雲天社 大仏（盧舎那仏坐像） 東大寺大仏殿 藤原道長 平等院鳳凰堂 阿弥陀如来像 最澄（伝教大師）
	ラスコー洞窟の壁画 ギザの三大ピラミッド ブツダが悟りを開いた地に建てられた塔 始皇帝兵馬俑 万里の長城 甲骨文字 クラウディア水道橋 土偶（国立博物館） 三内丸山遺跡	銅鐸 「漢委奴国王」の金印 向野田古墳に葬られた女性首長 武人のはにわ 大山古墳 稲荷山古墳の鉄剣 マヤ文明の都市にあるカスティエーヨの神殿 東大寺の大仏 玄奘	アンコール・ワット 飛鳥大仏（釈迦如来坐像） 木簡 正倉院正倉 鑑真 清水寺縁起絵巻 紫式部日記絵詞 源氏物語絵巻 『今昔物語集』鈴鹿本	平等院鳳凰堂 中空土偶 土偶「縄文のビーナス」（茅野市尖石縄文考古館） 銅鏡 広隆寺の弥勒菩薩像 最澄 平等院『雲中供養菩薩像』
育鵬社	ラスコー洞窟の壁画 ギザの三大ピラミッド ブツダが悟りを開いた地に建てられた塔 始皇帝兵馬俑 万里の長城 甲骨文字 クラウディア水道橋 土偶（国立博物館） 三内丸山遺跡	銅鐸 「漢委奴国王」の金印 向野田古墳に葬られた女性首長 武人のはにわ 大山古墳 稲荷山古墳の鉄剣 マヤ文明の都市にあるカスティエーヨの神殿 東大寺の大仏 玄奘	アンコール・ワット 飛鳥大仏（釈迦如来坐像） 木簡 正倉院正倉 鑑真 清水寺縁起絵巻 紫式部日記絵詞 源氏物語絵巻 『今昔物語集』鈴鹿本	平等院鳳凰堂 中空土偶 土偶「縄文のビーナス」（茅野市尖石縄文考古館） 銅鏡 広隆寺の弥勒菩薩像 最澄 平等院『雲中供養菩薩像』
	三内丸山遺跡 フォロ・ロマーノ 仁徳天皇陵（大仙陵古墳） 稲荷山古墳出土鉄剣銘（銅象嵌銘太刀） 江田船山古墳出土鉄刀銘（銅象嵌銘太刀） 遮光器土偶（東京国立博物館） 土偶（縄文のビーナス）（茅野市尖石縄文考古館） 土偶（仮面の女神）（茅野市尖石縄文考古館） 火焔型土器 冒利式深鉢形土器 袈裟襷文銅鐸 壺型土器 埴輪武装男子立像	菩薩半跏像 高松塚古墳壁画（西壁女子群像） 阿修羅像 不動明王坐像 鳥獣人物戯画 甲巻		
令 書	三内丸山遺跡 フォロ・ロマーノ 仁徳天皇陵（大仙陵古墳） 稲荷山古墳出土鉄剣銘（銅象嵌銘太刀） 江田船山古墳出土鉄刀銘（銅象嵌銘太刀） 遮光器土偶（東京国立博物館） 土偶（縄文のビーナス）（茅野市尖石縄文考古館） 土偶（仮面の女神）（茅野市尖石縄文考古館） 火焔型土器 冒利式深鉢形土器 袈裟襷文銅鐸 壺型土器 埴輪武装男子立像	菩薩半跏像 高松塚古墳壁画（西壁女子群像） 阿修羅像 不動明王坐像 鳥獣人物戯画 甲巻		

「別紙２－２」【（１）内容 イ 調査項目の具体的な内容 c 主な文化遺産 中世】（中学校 社会 歴史的分野）

発行者	主な文化遺産 中世			
東書	上杉本洛中洛外図屏風 円覚寺 粉河寺縁起絵巻 平治物語絵巻 中尊寺金色堂 春日権現験記絵 平清盛 厳島神社 一遍聖絵 男衾三郎絵詞 阿氏河荘の農民たちの訴状	東大寺南大門 金剛力士像 法然上人絵伝 アズハル・モスク ラシード・アッディーン「集史」 アヤ・ソフィア大聖堂 蒙古襲来絵詞 後醍醐天皇 足利義満 中城城跡 首里城正殿	「万国津梁の鐘」 志苔館跡近くから発掘された宋銭 明の皇帝から届けられた勅書 琉球王の王冠 紅型 月次風俗図屏風 洛中洛外図屏風歴博甲本 祇園祭 真如堂縁起絵巻 毛利元就 石見銀山遺跡	鹿苑寺の金閣 慈照寺の銀閣 現代の能 東求堂同仁斎 慕帰絵詞 龍安寺の石庭 秋冬山水図
教出	一遍上人絵伝（清浄光寺） 粉河寺縁起絵巻 伴大納言絵巻 中尊寺金色堂 春日権現験記絵 平清盛 厳島神社 男衾三郎絵詞 農民の訴状 東大寺南大門 金剛力士像 法然上人絵伝 一遍上人絵伝（東京国立博物館）	親鸞 日蓮 熊野本宮大社 蒙古襲来絵詞 後醍醐天皇 洛中洛外図屏風（上杉博物館） 足利義満 首里城の正殿 紅型 万国津梁の鐘 出土した銅銭 祇園祭 石山寺縁起絵巻	職人尽絵 月次風俗図屏風 真如堂縁起絵巻 鹿苑寺の金閣 慈照寺の銀閣 洛中洛外図屏風（国立歴史民俗博物館） 現代の能 東求堂同仁斎 秋冬山水図 慕帰絵詞 枯山水の石庭 鶴岡八幡宮 円覚寺舍利殿	高德院の天仏
帝国	四季花鳥図屏風 粉河寺縁起絵巻 紀伊国杵田荘絵図 中尊寺金色堂 春日権現験記絵 平清盛 厳島神社 一遍上人絵伝（清浄光寺） 農民の訴状 東大寺南大門 金剛力士像 円覚寺舍利殿 一遍上人絵伝（東京国立博物館）	鎌倉大仏 親鸞 男衾三郎絵詞 蒙古襲来絵詞 聖徳太子絵伝 後醍醐天皇 洛中洛外図屏風（上杉博物館） 足利義政 足利義満 世界文化遺産首里城跡に復元された正殿 万国津梁の鐘 志苔館付近で出土した大量の宋銭 職人尽絵	法然上人絵伝 真如堂縁起 毛利元就 金閣 銀閣 東求堂同仁斎 慕帰絵詞 月次風俗図屏風 壬生の花田植 現在の能 現在の狂言 瑠璃光寺の五重塔 秋冬山水図	龍安寺の石庭 イタリア・フィレンツェ 今帰仁城跡
山川	アンコール=ワット アルハンブラ宮殿 熊野古道 平清盛 中尊寺金色堂 紺紙金銀字交書一切経 一遍上人絵伝（清浄光寺） 東大寺南大門 東大寺南大門金剛力士像 慕帰絵詞 親鸞 日蓮 一遍上人絵伝（東京国立博物館）	伴大納言絵巻 鳥獣人物戯画 石山寺縁起絵巻 シャルトル大聖堂 ケルンの大聖堂 蒙古襲来絵詞 後醍醐天皇 足利義満 北京故宮（紫禁城） 今帰仁城跡 首里城の正殿 「万国津梁の鐘」 国王の冠	組踊 銅銭 洛中洛外図屏風（上杉博物館） 毛利元就 織田信長 真如堂縁起 洛中洛外図屏風（国立歴史民俗博物館） 金閣 瓢鮎図 銀閣 東求堂同仁斎 慧可断臂図	

「別紙２－２」【（１）内容 イ 調査項目の具体的な内容 c 主な文化遺産 中世】（中学校 社会 歴史的分野）

発行者	主な文化遺産 中世		
日文	男衾三郎絵詞 マヤの遺跡 ベネチア イスファハーンにあるモスク ヒンドゥー教の寺院 粉河寺縁起絵巻 伴大納言絵巻 中尊寺金色堂の内部 厳島神社 一遍上人絵伝（清浄光寺） 阿氏河荘の農民の訴え状 東大寺南大門 東大寺南大門の金剛力士像	重源 東大寺 一遍上人絵伝（東京国立博物館） 円覚寺舍利殿 親鸞 鎌倉大仏 熊野本宮大社 蒙古襲来絵詞 中世の荘園（梶田荘）の図 後醍醐天皇 上杉本洛中洛外図屏風 足利義満 ハングル	首里城正殿 今帰仁城跡 志苔館跡付近から出土した大量の古銭 真如堂縁起絵巻 毛利元就 雪舟の四季山水図 足利義政 金閣 銀閣 東求堂同仁斎 石庭 復興した大船鉾 能
自由社	石見銀山遺跡とその文化的景観 蒙古襲来絵詞 春日権現験記絵 厳島神社 平清盛 壇ノ浦の戦い 一遍上人絵伝（清浄光寺） 親鸞 法然上人行状絵図 金剛力士像 重源上人坐像 慕婦絵 後醍醐天皇	洛中洛外図屏風（上杉博物館） 足利義満 真如堂縁起絵巻 紅型 発掘された銭 月次風俗図屏風 職人尽絵 石山寺縁起絵巻 真如堂縁起絵巻 金閣 銀閣 能（能楽） 石庭	書院造 東求堂同仁斎 秋冬山水図
育鵬社	平治物語絵巻 赤糸威大鎧 無著像 天橋立図 一遍上人絵伝（清浄光寺） 粉河寺縁起絵巻 中尊寺金色堂 春日権現験記絵 男衾三郎絵詞 阿氏河荘の農民の訴状 東大寺南大門 金剛力士像 重源	慕婦絵詞 親鸞 一遍上人絵伝（東京国立博物館） 蒙古襲来絵詞 後醍醐天皇 洛中洛外図屏風（上杉博物館） 足利義満 ハングル（訓民正音） 在りし日の首里城 万国津梁の鐘 志苔館跡付近で出土した宋銭 真如堂縁起絵巻 毛利元就	石見銀山 月次風俗図屏風 職人尽絵 石山寺縁起絵巻 金閣 銀閣 現代の能のようす 石庭 秋冬山水図 冬景 東求堂同仁斎
学び舎	春日権現験記絵 粉河寺縁起絵巻 紀伊国杵田荘の絵図 中尊寺金色堂 島津家文書 一遍聖絵（東京国立博物館） 餓鬼草紙	建長寺 東大寺南大門・金剛力士像（吽形） 阿テ河荘の訴え状 一遍聖絵（清浄光寺） 後醍醐天皇 訓民正音 洛中洛外図屏風（舟木本）	真如堂縁起 洛中洛外図屏風（上杉博物館） 雪舟『天橋立図』 能「敦盛」 東求堂の同仁斎 首里城 石見銀山
令 書	源頼朝と伝えられる肖像画 男衾三郎絵巻 春日権現験記絵巻 蒙古襲来絵詞 一遍聖絵（東京国立博物館） 東大寺南大門 北野天神縁起絵巻（承久本） 後醍醐天皇 上杉本洛中洛外図屏風（上杉本） 足利義満 復元された首里城 真如堂縁起絵巻 金剛力士立像	砧蒔絵硯箱 慧可断臂図	東大寺南大門 運慶『無着像』 金閣 銀閣

「別紙2-2」【(1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 c 主な文化遺産 近世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	主な文化遺産 近世		
東書	三世大谷鬼次の奴江戸兵衛 松江城 マチュピチュ遺跡 鉄砲(火縄銃) 南蛮人渡来図屏風 フランシスコ・ザビエル 織田信長(肖像画) 京ます 検地尺 姫路城 唐獅子図屏風 千利休 妙喜庵待庵	歌舞伎図巻 日光東照宮 原城跡 踏絵 朝鮮通信使款待図屏風 七難七福図巻 現在の歌舞伎 風神雷神図屏風 八橋蒔絵螺鈿硯箱 現在の人形浄瑠璃 燕子花図屏風 本居宣長 大日本沿海輿地全図 副本	一掃百態図
教出	サン・ピエトロ大聖堂 エルサレム アヤソフィア大聖堂 インカ帝国の遺跡「マチュピチュ」 南蛮屏風 マカオにあるサン・パウロ天主堂跡 フランシスコ＝ザビエル 石見銀山の坑道跡 織田信長 豊臣(羽柴)秀吉 検地に使われた「ものさし(検地尺)」 米を量る「ます(一升枡)」 姫路城	『唐獅子図屏風』 二条城二の丸御殿 歌舞伎図巻 妙喜庵待庵 朱印状 原城跡 踏絵 朝鮮通信使款待図屏風 現代の人形浄瑠璃 風神雷神図屏風 燕子花図屏風 八橋蒔絵螺鈿硯箱 伊能忠敬	忠敬の地図 測量機器 一掃百態 世界図屏風
帝国	マチュピチュ 南蛮屏風 石見銀山 フランシスコ＝ザビエル 豊臣秀吉 検地尺 二条城二の丸御殿 唐獅子図屏風 姫路城 高く積み上げられた石垣 千利休 妙喜庵待庵 歌舞伎図巻	有田焼の茶碗 彦根屏風 原城跡 マリア観音像 「朝鮮通信使に関する記録」 組踊 七難七福図巻 日光東照宮の陽明門 風神雷神図屏風 紅白梅図屏風 八橋蒔絵螺鈿硯箱 現在も残る富士山の宝永火口 東洲斎写楽が描いた歌舞伎の役者絵	伊能忠敬 大日本沿海輿地全図 閑谷学校 トルコ・ブルーモスク インド・タージマハル フランス・ベルサイユ宮殿 久能山東照宮
山川	白川郷・五箇山の合掌造り集落 日光の社寺 石見銀山遺跡とその文化的景観 富士山ー信仰の対象と芸術の源泉 サン＝ピエトロ大聖堂 ヴェルサイユ宮殿 インカ帝国の遺跡 イスタンブルの街 タージ＝マハル 南蛮屏風 フランシスコ＝ザビエル 織田信長 豊臣秀吉	検地尺 姫路城 唐獅子図屏風 松林図屏風 千利休 妙喜庵待庵 歌舞伎図巻 原城跡 踏絵 朝鮮通信使関係の資料 燕子花図屏風	

「別紙2-2」【(1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 c 主な文化遺産 近世】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	主な文化遺産 近世		
日 文	白川郷合掌造り集落 イスタンブール スレイマン＝モスク サン＝ピエトロ大聖堂 インカ帝国の都市マチュピチュ フランシスコ＝ザビエル 織田信長 豊臣秀吉 収穫量をはかるときに使われます 検地に使われた「ものさし」 南蛮屏風 石見銀山 唐獅子図屏風	歌舞伎図巻 西本願寺書院 彦根屏風 姫路城 妙喜庵待庵 千利休 有田焼 徳川家康がまつられる日光東照宮 七難七副図巻 原城跡 踏絵 朝鮮通信使関係の資料 紅型	組踊 「アイヌ古式舞踊」 人形浄瑠璃 燕子花図屏風 大日本沿海輿地全図 杖先方位盤 伊能忠敬 本居宣長 閑谷学校 崎津教会堂 熊本城天守閣
自由社	白川郷・五箇山の合掌造り集落 姫路城 サン＝ピエトロ大聖堂 エルサレムの旧市街地と城壁群 フランシスコ・ザビエル 南蛮屏風 織田信長 豊臣秀吉 大坂夏の陣図屏風 唐獅子図屏風 茶室「待庵」 洛中洛外図屏風 踏み絵	燕子花図屏風 一掃百態 本居宣長 伊能忠敬 大日本沿海輿地全図 高野長英	
育鵬社	松林図屏風 風神雷神図屏風 八橋蒔絵螺鈿硯箱 エルサレムにある聖墳墓協会 アヤソフィア大聖堂 インカ帝国の遺跡マチュピチュ 南蛮屏風 フランシスコ・ザビエル 織田信長 豊臣秀吉 検地尺 姫路城 唐獅子図屏風	西本願寺唐門 彦根屏風 洛中洛外図屏風(上杉博物館) 彦根屏風 歌舞伎図巻 支倉常長 踏絵 紅白梅図屏風 高野長英 蕨山の反射炉 人形浄瑠璃 奴江戸兵衛を演じる大谷鬼次 本居宣長	伊能忠敬 大日本沿海輿地全図 弘道館 松本城
学び舎	南蛮屏風 サン＝ピエトロ大聖堂 ジェンネにあるイスラム教のモスク ザビエル 洛中洛外図屏風(上杉博物館) 唐獅子図屏風 ベルサイユ宮殿 古都スクレ アボメイの王宮の壁(アボメイ王宮群) スルタンアフメト・モスク 姫路城 昌徳宮 北京の故宮	タージ・マハル 人形浄瑠璃文楽 朝鮮通信使歓待図 『大日本沿海輿地全図』の一部 本居宣長 高野長英	
令 書	南蛮人渡来図(右隻) 織田信長 豊臣秀吉 御陽成天皇 洛中洛外図屏風(東京国立博物館) 千利休 姫路城天守 松本城天守 人形浄瑠璃『曽根崎心中』上演の様子 本居宣長『古事記伝』再稿本 大日本沿海輿地全図	四季花鳥図襖 唐獅子図屏風 燕子花図屏風 風神雷神図屏風	

「別紙2-2」【(1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 c 主な文化遺産 近代】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	主な文化遺産 近代		
東書	北海道庁旧本庁舎 マグナ・カルタ ベルサイユ宮殿 人権宣言 小学校の授業風景	旧開智学校 富岡製糸場 新橋・横浜間を走った1号機関車 三池炭鉱 長崎造船所	八幡製鉄所 老猿 アンネの日記 アウシュビッツ強制収容所 廃墟になった広島(原爆ドーム)
教出	ベルサイユ宮殿 人権宣言 明治時代の小学校の授業 富岡製糸場 三角西港	首里城の正殿 沖縄の衣服「紅型」 沖縄の伝統芸能「組踊」 イオマンテ(熊送り)の儀式 八幡製鉄所	湖畔 老猿 アウシュビッツ強制収容所 アンネの日記
帝国	ベルサイユ宮殿の鏡の間 人権宣言 富岡製糸場 官営八幡製鉄所 湖畔	老猿	
山川	明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業 ル＝コルビュジエの建築作品ー近代建築運動への顕著な貢献ー 富岡製糸場 大浦天主堂 八幡製鉄所	旧横浜正金銀行 北海道庁旧本庁舎(赤れんが庁舎) 山本作兵衛の炭坑記録画 悲母観音 湖畔	老猿 アウシュビッツ強制収容所の門 原爆ドーム 厳島神社 平家納経
日文	ベルサイユ宮殿の「鏡の間」 人権宣言 富岡製糸場 旧開智学校 法隆寺夢殿の救世観音像	八幡製鉄所 山本作兵衛の炭坑記録画 湖畔 アウシュビッツ第二強制収容所 広島県産業奨励館(原爆ドーム)	端島炭坑(軍艦島) 富士山
自由社	原爆ドーム 端島(明治日本の産業革命遺産) 人権宣言 ハングル 八幡製鉄所	悲母観音 ポーランドのアウシュビッツに設けられたナチスの強制収容所	
育鵬社	老猿 舞妓 神奈川県立歴史博物館 人権宣言 ベルサイユ宮殿	松下村塾 富岡製糸場 八幡製鉄所 湖畔 悲母観音	アウシュビッツ強制収容所 原爆ドーム
学び舎	人権宣言 旧開智学校 官営富岡製糸場 舞妓 アンネが残した日記	アウシュビッツ強制収容所 原爆ドーム(産業奨励館) 曇ぬり教科書 老猿 八幡製鉄所	旧岩崎邸
令書	ウェストミンスター宮殿 マグナ・カルタ 人権宣言 官営八幡製鉄所 長崎造船所のハンマーヘッドクレーン	端島炭鉱	

「別紙２－２」【（１）内容 イ 調査項目の具体的な内容 c 主な文化遺産 現代】（中学校 社会 歴史的分野）

発行者	主な文化遺産 現代
東書	軍艦島
教出	戦時中の教科書 戦後の墨ぬり教科書 原爆ドーム
帝国	記載なし
山川	今帰仁城跡 斎場御嶽
日文	すみぬり教科書
自由社	和食
育鵬社	記載なし
学び舎	なげきの壁 アルアクサー・モスク 岩のドーム
令 書	記載なし

「別紙2-3」【(1) 内容 イ 調査項目の具体的な内容 e 身近な地域の歴史(東京に関する歴史的事象)を取り上げている内容】(中学校 社会 歴史的分野)

発行者	古代まで	中世	近世	近代	現代	
東書	大森貝塚 弥生二丁目遺跡 旧石器時代の人々の移動 弥生土器の発見	記載なし	花火の見物客でにぎわう両国橋 江戸時代（1850年ごろ）の高輪の様子 旧江戸城 小仏閣跡 湯島聖堂 小石川後楽園 江戸城 江戸幕府の開府 参勤交代 朝鮮通信使の航路 オランダ商館長による将軍挨拶 江戸に滞在するオランダ人 江戸を訪れる朝鮮通信使 琉球使節 江戸の町の様子 金座・銀座 近世の特産物 三都の繁栄 近世の江戸 街道の整備 海運の発達	東京開化名勝京橋石道銀座通り両側煉瓦石商家盛栄之図 京橋方面をのぞんだ銀座通りの風景（1936年写真） 鉄道の開通（新橋・横浜間） 明治時代（1870年ごろ）の高輪の様子 迎賓館赤坂離宮 文明開化（東京品川海辺蒸気車鉄道之真景） 明治時代初めの日本橋付近の様子 公使を江戸に置く ペリーの来航と台場 桜田門外の変 江戸城の明けわたし 幕末の事件と戊辰戦争 江戸の東京改称 3府の府知事設置 新橋・横浜間鉄道開通 小笠原諸島の領有確定 明治会堂 五日市憲法 1891年の国会と現在の国会 日比谷焼き打ち事件 孫文と日本	交通と産業の発達 東京・横浜間の電信開始 東京放送局による放送開始 普通選挙の実現を求めるデモ行進（1920年 東京） 浅草のにぎわい 浅草六区 帝国議会の議事堂を取り巻く民衆 第1回メーデー ラジオ放送の開始 関東大震災 関東大震災後の浅草 初の男子普通選挙の投票所 浜口雄幸首相狙撃 五・一五事件 二・二六事件 節約を訴える標語 学徒出陣壮行会 集団で疎開 供出された寺の鐘 空襲などによる死傷者数 東京大空襲	1964年の東京オリンピックの開会式 京橋方面をのぞんだ銀座通りの風景（2023年写真） 現代の高輪の様子（2020年） 満州から引きあげてきた子どもたち 闇市の様子 青空教室 ダグラス・マッカーサーと昭和天皇 極東国際軍事裁判（東京裁判） 憲法公布の祝賀会 初の男女普通選挙 復活したメーデー アメリカ統治下の小笠原諸島 安保闘争 友好の記念として中国からおくられたパンダを見物する人々 小笠原諸島返還 東海道新幹線の開通 東京オリンピック・パラリンピック（夏季）（2021年） 全国の公害 トイレットペーパー売り場に殺到する人々 ゴジラのポスター
	石材の産地と交易の広がり 弥生土器の出土	記載なし	江戸のまち 江戸幕府の開府 江戸の支配 五街道の整備 3代将軍徳川家光のころの江戸城 参勤交代 オランダ商館長の江戸訪問 江戸城に向かう朝鮮通信使 江戸に向かう琉球使節の一行 江戸の町のにぎわい 金座・銀座 流通の発達 江戸の発達 越後屋呉服店 湯島聖堂 目安箱の設置 昌平坂学問所 化政文化 江戸の食 江戸の水 江戸城 リサイクルの知恵	江戸湾に現れた軍艦 明治時代の街の様子 品川の台場跡 桜田門外の変 幕末に江戸で起こった打ちこわし 戊辰戦争 江戸開城の会談 江戸の東京改称 江戸城に入る天皇の一行 新橋・横浜間鉄道開通 小笠原諸島の領有宣言 五日市憲法 日比谷焼き打ち事件 明治時代の主な工場や鉱山と、鉄道の広がり 東京の生活環境の悪化 開通した直後の地下鉄 東京を走るバス 劇場や映画館が並ぶ大正時代の浅草 帝国議会の議事堂を取り囲む民衆 投票所に並ぶ人々 都市の発達	大正・昭和初期の東京駅前の様子 地下鉄の開通 関東大震災 関東大震災直後の東京・日比谷 銀行に押しかけた人々 狙撃された直後の浜口首相 五・一五事件 二・二六事件 二・二六事件で、東京の赤坂にある料亭に立てこもる反乱軍 奉安殿への「捧げ銃」 関東大震災と後藤新平 後藤新平が考えた復興のための4原則 復興事業で建設された常盤小学校 学徒出陣壮行会 東京大空襲 空襲を受けた主な地域	銀座の街の変化 極東国際軍事裁判（東京裁判） 昭和天皇とダグラス＝マッカーサーの会見 国会議事堂の周辺に建てられたアメリカ軍の兵舎 戦後の闇市 皇居前広場で行われた憲法発布記念祝賀大会 中学校の学級活動 新安保条約に反対して、国会を取り巻く人々 小笠原諸島本土復帰 東京オリンピックの開会式（1964年） トイレットペーパーの売り場に殺到する人々 建設中の東京タワー 『東京2020パラリンピック』の開会式で入場行進する日本選手団 第五福竜丸展示館
教出						
帝国	日本各地に広がる縄文・弥生時代の交易	文化が栄えた主な都市	江戸城 江戸幕府の開府 参勤交代 鳥取藩の参勤交代の道のり 朝鮮通信使 朝鮮通信使のたどった道 琉球からの謝恩使 湯島聖堂 利根川のつけ替え工事 五街道の整備 東廻り航路の開設 江戸時代の交通 江戸の発展 越後屋の店内 解体新書の出版 歌川（安藤）広重が描いた浮世絵 人口増加に対応した人々の暮らし 日常生活を支えた江戸の上水道 多様な職業を支えたりサイクル都市 江戸のごみを利用した農業	桜田門外の変 江戸城無血開城 幕末の攘夷運動と倒幕運動 江戸の東京改称 江戸城に入る天皇の一行 東京・横浜間の電信開通 新橋・横浜間の鉄道開通 小笠原諸島の領有 多摩地方の自由民権運動 五日市憲法 日比谷焼き打ち事件 明治時代の産業と鉄道 生糸の生産・取り引きで栄えた桑都 外国人が見た幕末の八王子 東京の銀座を描いた錦絵 米騒動の広がり 第1回普通選挙の投票所の様子 1914年に完成した東京駅 東京を歩くモガ 映画館が立ち並ぶ浅草 政治・経済の中心東京	浅草・銀座間の地下鉄開通 大都市を襲った関東大震災 狙撃された浜口雄幸首相 五・一五事件 二・二六事件 ぜいたくを戒める看板 東京大空襲 全国の空襲の被害	極東国際軍事裁判（東京裁判） 昭和天皇と連合国軍最高司令官マッカーサー 満州から引きあげてきた子どもたち 男女共学の学級会の時間 学校給食の始まり 平和条約の調印に反対する大学生 安保闘争で国会議事堂に集まる人々 小笠原諸島の返還 東京オリンピックの開会式（1964年） 東海道新幹線の開通 建設中の東京タワー 開業したころのコンビニエンスストア 外出自粛要請下の渋谷

「別紙2－3」【（1）内容 イ 調査項目の具体的な内容 e 身近な地域の歴史（東京に関する歴史的事象）を取り上げている内容】（中学校 社会 歴史的分野）

発行者	古代まで	中世	近世	近代	現代	
山川	黒曜石とひすいの交易（神津島）	記載なし	江戸幕府の開府 参勤交代 朝鮮通信使 慶賀使・謝恩使 五街道の整備 海上交通の発達 三都の発展 越後屋呉服店 江戸時代の交通 明暦の大火 湯島聖堂 江戸城と大名屋敷 江戸の町 江戸の十組問屋 江戸の十組問屋と主な取り扱い品目 江戸の都市政策 小石川療養所の設置 江戸を中心とした経済圏の形成 聖堂学問所での講義 旧里帰農令 オランダ正月（江戸の芝蘭堂）	銀座れんが街 大日本帝国憲法発布の式典 台場 五品江戸廻送令 桜田門外の変 新選組 江戸城明けわたし 戊辰戦争 江戸の東京改称 京都から東京へ事実上の遷都 新橋・横浜間の鉄道開通 東京・横浜間の電信開通 新橋駅 内国勸業博覧会 小笠原諸島の領有 五日市憲法 山県有朋（樺山荘） 日比谷焼き打ち事件 孫文 東海道線開通 鉄道網と産業の発達	上野・青森間鉄道敷設 社会・労働問題の発生 樋口一葉 国会議事堂を取り囲む民衆 原敬暗殺 第1回メーデー 関東大震災 ラジオ放送の開始 東京・浅草六区の映画街 五・一五事件 二・二六事件 学徒出陣 東京大空襲	マッカーサーと昭和天皇 極東国際軍事裁判（東京裁判） 日米安全保障条約の改定に反対し国会を取り巻く人々 アメリカの統治下に置かれた小笠原諸島 小笠原諸島返還 東海道新幹線の開業 東名高速道路の開通 東京オリンピック・パラリンピック開催（1964年） 多摩ニュータウン 大橋鎮子 東京オリンピック・パラリンピック開催（2021年）
		化政文化 隅田川の火花の様子 江戸の名所 浅草寺仁王門 『四季遊覧江戸名所図会』に見る四季 丸亀藩上屋敷の金毘羅社 江戸の代表的な祭礼、山王祭の作り物 人返しの法 上知令				
日文	ひすいと黒曜石の交易（神津島） 調・庸の都への運搬日数	記載なし	江戸幕府の将軍が政治を行った建物のような 徳川家康による江戸の町づくり 江戸幕府の開府 参勤交代 江戸の商人 江戸の職人 江戸城に向かう朝鮮通信使 朝鮮通信使と琉球使節の行路 琉球使節 江戸に向かう琉球使節の一行 江戸時代の交通網 五街道の整備 大阪・江戸間の航路 江戸の発達 江戸の日本橋 江戸の飲料水を支えた玉川上水 湯島聖堂 都市に住む人々のリサイクル 江戸の打ちこわし 国学と蘭学 化政文化	江戸時代の江戸のようす 明治時代の東京のようす 桜田門外の変 江戸城無血開城 幕末の世直しと倒幕の動き 江戸の東京改称 首都東京 新橋・横浜間の鉄道開通 1874年ごろの東京銀座のれんが街 小笠原諸島の領有宣言 日比谷焼き打ち事件 国会議事堂前に集まる群衆 大都市 東京 関東大震災 100年ほど前の田園調布 東京の浅草の映画街 よみがえった東京駅 狙撃された浜口雄幸首相 五・一五事件 二・二六事件 焼け野原になった東京・日本橋でカボチャの種をまく学生	東京大空襲 空襲を受けた主な都市と死者数 空襲で焼け野原になった東京 山中坂の石碑 多摩地域にあった主な航空関連施設 『立川小唄』の記念碑 旧日立航空機株式会社変電所 佐藤多持『戦時下の絵日誌』	学徒出陣 新国立競技場 青空教室 一人一台端末を使用した授業風景 オリンピック東京大会の開会式のようす 極東国際軍事裁判（東京裁判） 満州からの引きあげ者 マッカーサーと昭和天皇 日本国憲法公布の祝賀会 開市のようす バラックの前で食事の準備をするようす 靴みがきをする戦災孤児 食料メーデー 日本の独立を祝って掲げられた「祝 講和成立」の文字と国旗 国会議事堂をとりまく改定安保反対デモ 上野動物園 記念に中国からおくられたパンダ 小笠原諸島返還 オリンピック・パラリンピック東京大会（1964年） 東京タワーと東京スカイツリー 東京で行われたプライドパレード 町火消
		昌平坂学問所				
自由社	黒曜石分布図（神津島） 弥生土器	室町時代の各地の特産品 日本人の名字の由来を訪ねてみた	出雲阿国と歌舞伎 江戸の町 江戸幕府の開府 参勤交代の制度 江戸城 江戸初期の主な大名の配置 湯島聖堂 城下町の建設 日本橋を起点とする五街道 江戸の繁栄 菱垣廻船・樽廻船による輸送 江戸時代の交通路と都市および各地の特産品	台場の建設 桜田門外の変 江戸城無血開城 彰義隊 首都・東京の誕生 東京に入る天皇 廃藩置県の布告 廃藩置県による新しい府県 天皇直属の御親兵の配置 鎮台の設置 地券 小笠原諸島の領有 新橋―横浜間の鉄道開通 文明開化 新橋汐留ステーション 市街にあふれる文明開化「東京繁栄車往來の図」 鹿鳴館 日本帝国憲法＜五日市憲法＞ 大日本帝国憲法の発布 日比谷焼き打ち事件 中国同盟会	東海道線全線開通 民間に払い下げられた代表的な官営模範工場 鉄道網の発達 ガラスの普及 東京大学の創立 東京美術学校（現在の東京芸術大学） 東京養育院 幕末に起きた主な出来事 護憲運動 関東大震災 都心の被災状況 後藤新平の東京復興 都市の生活 三越開店のポスター 地下鉄開通のポスター バスガール 五・一五事件 二・二六事件 学徒出陣 東京大空襲	1945（昭和20）年の廃墟の東京 2012（平成24）年の東京 東京裁判（極東国際軍事裁判） 東京裁判で判決を聞く東条英機元首相 占領下の検閲と東京裁判 サンフランシスコ講和条約 講和条約成立を祝う アメリカ軍による直接統治（小笠原諸島） 日米安保条約改定に反対して国会を取りまくデモ隊 上野駅に着いた集団就職の生徒たち 東京オリンピック（1964年） 多摩川の公害対策 水泳ニッポンと1964年の東京五輪 昭和天皇崩御 2度目の東京オリンピック 東京駅で行われた東海道新幹線の開通式 新幹線の歴史をつくった人々 疎開児童と東京大空襲 玉音放送 大東亜戦争の主な戦闘を時間順に示した地図
		亀戸梅屋敷 歩いてみよう！ 江戸の町 江戸八景日本橋の晴嵐 深川江戸資料館（江東区白河）に行ってきたこと 江戸東京博物館（墨田区横綱）に行ってきたこと 東都名所 高輪廿六夜待遊興之図 古地図を見ながら町を歩いてわかったこと 五街道図 四つの窓口	江戸の識字率 江戸や大阪の大きな寺子屋 おもな藩校と私塾一覧 目安箱の設置 町火消し 町人たちの狂歌・落首 化政文化 欧米諸国の船が目撃された件数 エコロジー都市 江戸			

「別紙２－３」【（１）内容 イ 調査項目の具体的な内容 e 身近な地域の歴史（東京に関する歴史的事象）を取り上げている内容】（中学校 社会 歴史的分野）

	古代まで	中世	近世	近代	現代	
育鵬社	大森貝塚 黒曜石の原産地 弥生土器の出土	室町時代のおもな交通路と各地の特産品 上知令 化政文化 鳶屋の店先 亀戸梅屋敷（歌川広重） 江戸時代をゆさぶった大地震	新興都市・江戸の町づくり 江戸幕府の開府 江戸城 参勤交代 朝鮮通信使 朝鮮通信使がたどった道 朝鮮通信使を江戸町民が歓迎している様子 湯島聖堂 江戸の発展 越後屋の店内 五街道の整備 海の交通の整備 三都の発展 江戸時代の交通 玉川上水 赤穂事件 江戸のエコロジー 上米の制 小石川療養所 昌平坂学問所 人返しの法	東京・銀座のにぎわい 桜田門外の変 江戸城無血開城 江戸の東京改称 江戸城に入る天皇の行列 廃藩置県の布告 東京開成学校の開校 小笠原諸島の日本領通告 大久保利通の暗殺 文明開化の錦絵 新橋・横浜間の鉄道開通 全国に広がった鉄道路線 五日市憲法 日比谷焼き打ち事件 東京駅 新橋・横浜間の鉄道開通 衆議院の門前におし寄せた民衆 東京・浅草六区のような街を歩く若い女性 関東大震災 銃撃された浜口首相	五・一五事件 二・二六事件 学徒出陣の壮行大会 東京大空襲 ラジオで玉音放送を聞く人々 マッカーサーと昭和天皇 青空教室 闇市の様子 極東国際軍事裁判（東京裁判） 憲法発布の祝賀大会 アメリカによる統治が続く小笠原諸島 安保闘争 ゴジラ 上野動物園でパンダを見物する人々 小笠原諸島の本土復帰 東京オリンピック・パラリンピック（1964年） ひばりが丘団地 東京タワー 東海道新幹線開業の日の東京駅での出発式のような東京駅にある新幹線開業の記念碑 東京・大阪（京都）間の移動時間の推移 東京オリンピック・パラリンピック（2021年）	
学び舎	伊豆諸島の黒曜石 木簡に書かれた品物（武蔵）	記載なし 日本橋と水路 裏長屋の暮らし 棒手振が住む裏長屋 土塚原の刑場 大槻玄沢らが、江戸の蘭学塾でオランダ正月を祝う 江戸・浅草の天文台 化政文化 江戸などへの出稼ぎ（寛政の改革） 江戸への人口流入を防ぐ（天保の改革） 地域の博物館で調べる（羽村市郷土博物館） 地域の歴史を歩く（東京都小平市）	家康の江戸入り 江戸幕府の開府 町づくりと土木工事 1590年ごろの江戸 江戸の古地図 江戸城 加賀藩の大名行列 参勤交代 海上交通路の整備 五街道の整備 町人と武士の上野での花見 江戸を行く朝鮮通信使 朝鮮通信使の漢城から江戸までのルート 江戸の山王祭に取り入れられた通信使の行列 琉球王国の使節 サトウキビの江戸城での試作 町人地の造成 神田上水 玉川上水 室町一丁目あたり 江戸の町方の人口	桜田門外の変 江戸の打ちこわし 武州世直し一揆 江戸城明けわたし 江戸の東京改称 戊辰戦争での新政府軍の進路 江戸城に入る天皇の行列 廃藩置県 郷小学校から公立小学校へ 東京名所之内銀座通煉瓦造鉄道馬車往復図 新橋・横浜間の鉄道開通 演説会 五日市憲法 山に囲まれた深沢家土蔵 五日市と東京・横浜 協立衛生義会の設立（五日市） 大日本帝国憲法の発布の式典 学校の儀式 東京で学ぶアイヌの女性たち 東京での祝勝会 「鉄道唱歌」の1番・新橋	田無尋常小学校 足尾銅山の鉱毒被害（東京への陳述） 米騒動の広がり 関東大震災 普通選挙権を求める集会とデモ行進 女性参政権を求める5万枚の請願書 ハンセン病患者収容施設の授業風景 東京市への人口集中 東京行進曲（小説・映画） 東京の都市生活を支える電気 チャップリン来日 銀座資生堂の宣伝うちわ 浅草の映画街 東洋モスリン工場のストライキ 五・一五事件 二・二六事件 二・二六事件の反乱軍の兵士たち 二・二六事件の反乱軍に対するアドバルーン 消えた東京オリンピック 疎開班と残留組のお別れ会 東京大空襲	街頭演説をする山口シジエ 食糧メーデー 極東国際軍事裁判（東京裁判） マッカーサーと昭和天皇 1945年の銀座 小笠原諸島のアメリカ軍直接支配 憲法発布記念式典 台東区子供議会 青空教室 インディラがやってきた 1950年メーデー 砂川闘争 サンフランシスコ平和条約締結後の小笠原諸島 原水爆禁止署名運動 安保反対のデモ 「夢の島」と名づけられたゴミ埋立地 集団就職 東京オリンピック（1964年） 日本公演のために羽田空港に着いたザ・ビートルズ 東京の女学生 中国北東部（満州）から帰国した子どもたち
令 書	御殿山遺跡の土器 大森貝塚 剣璽等継承の儀 本郷弥生町遺跡 昭和天皇陵	記載なし 東海道五十三次 品川	江戸幕府の開府 参勤交代の制度 江戸図屏風 琉球人行列図錦絵 朝鮮通信使来朝図 江戸の寛永寺 明暦の大火 江戸歌舞伎 湯島聖堂 安全な都市江戸 上げ米の制度 江戸の町火消 昌平坂学問所 江戸時代の交通網 金座と銀座の施設 五街道の完成 金貨の使用 江戸の三井（豪商の出現） 化政文化の発展 桜田門外の変 日米修好通商条約（江戸の開市）	江戸の人口 江戸湾の砲台場（台場） 江戸城無血開城 府知事の派遣 東京大学の創設 第1回内国勸業博覧会 福沢諭吉（江戸で学ぶ） 中国同盟会の組織 日比谷焼討事件 鉄道網の全通（新橋―神戸間、上野―青森間） 丸の内の赤煉瓦街 関東大震災 東京駅丸の内駅舎全景（大正3年の完成直後） 現在の東京駅 ラジオ放送の開始 五・一五事件 浜口雄幸首相の銃撃 二・二六事件 幻となった1940年東京オリンピック 東京大空襲 小笠原丸	上野戦争 極東国際軍事裁判（東京裁判） 昭和天皇とマッカーサー元帥の会見 安保闘争 東京オリンピックの開催 東海道新幹線開通 首都高速道路開通 ラジオ東京放送開始 令和2年（二〇二〇）の東京オリンピック東京オリンピック 小笠原諸島の返還 明日の神話	

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他(領土の範囲等)
東 書	【本文】 ・幕末にロシアと結んだ日露和親条約では、択捉島以南（北方領土）を日本領、得撫島以北の千島列島をロシア領とする（P174） ・北海道の北方領土は、…ロシアが不当に占拠しており、日本は抗議を続けています。（P176） ・北方領土は、ソ連によって不法に占拠されました。（P246） 【コラム】 ・日本人の生活の舞台・北方領土 17世紀前半には、蝦夷地の南部を支配していた松前藩が、北方領土や樺太（サハリン）についても調査を行っており、このころ江戸幕府が作成した地図には「くなしり」（国後島）や「えとほろ」（択捉島）、「うるふ」（得撫島）などの島名が書かれています。こうした島々には、18世紀半ばからロシア人が進出して、日本人の住民との間でたびたび対立が起きました。そこで幕府は、この地域を直接支配することを決め、1798年からは、幕府の役人の近藤重蔵と最上徳内が国後島・択捉島を調査し、択捉島には「大日本恵登呂府」の標柱を立てています。1854年、幕府はロシアとの間で日露和親条約（日魯通好条約）を結び、択捉島と得撫島との間に国境を定めました。明治時代に入り、1875年（明治8）年には、政府がロシアとの間で樺太・千島交換条約を結んで、樺太全島をロシアにゆずるかわりに、得撫島から北の、千島列島の18の島々も日本の領土になりました。日本人が開拓を進めた北方領土では、海産物の加工や畜産などが行われ、1945（昭和20）年の太平洋戦争の終結後には、約1万7000人の日本人が暮らしていました。（P177） 【注】 このときソ連が全ての北方領土の返還に応じなかったため、平和条約を結ぶことができませんでした。（P255） 【写真】 ・国後島での海産物の加工 1854年に日露和親条約を結んで以降、歯舞群島・国後島・色丹島・択捉島の北方四島（北方領土）は一貫して日本の領土です。（P174） ・北海道の根室半島上空から見た歯舞群島（P177） ・戦前の北方領土 小学校の運動会で、大玉転がしをしている様子です。（P177）	【本文】 ・竹島は1905年に、…内閣の決定により日本領に編入しました。（P174） ・島根県の竹島・・・は、・・・大韓民国（韓国）…が不法に占拠しており、日本は抗議を続けています。（P176） 【コラム】 ・あしか狐の舞台・竹島 竹島は、日本では古くから「松島」と呼ばれており、その西にあるウルルン島（鬱陵島）が「竹島」や「磯竹島」と呼ばれていましたが、江戸時代には、現在の鬱陵島と竹島の位置が的確に認識されていました。これは、この時代に作成された地図から読み取れます。江戸時代の1618年には、鳥取藩の町人が、藩を通して幕府から鬱陵島にわたる許可を得て、あわび漁やあしか狐などを行うようになりました。途中にある竹島は、航海の目印や停泊地になる一方で、鬱陵島と同様にあしか狐などが行われるようになりました。こうした中で、日本はおそらくとも17世紀半ばには、竹島の領有権を確立していました。竹島であしか狐は、明治時代の終わりごろから本格化し、多くの漁民が狐を行うようになりました。こうした中、隠岐島民の一人が、安定した狐のために、竹島の領土編入と10年間の賃し下げを政府に願ひ出しました。これを受けた政府は、1905（明治38）年1月に、竹島の島根県への編入を閣議決定して、正式に「竹島」と命名し、2月に島根県知事が告示しました。こうして政府は竹島の領有権を再確認し、あしか狐は、太平洋戦争で1941（昭和16）年に中止されるまで続けられました。（P176） 【写真】 ・竹島（P176） ・改正日本輿地路程全図（P176） ・明治時代の竹島 1907年ごろに、島根県の写真師が撮影した写真と、その説明文です。（P176） ・あしか狐の様子（P176） 【注】 ・サンフランシスコ平和条約が発効する直前に、韓国は公海上に一時的に境界線を引き、その韓国側に日本固有の領土である竹島を取りこみ、不法に占拠しました。これに対して、日本政府は抗議を続けています。（P253）	【本文】 ・尖閣諸島は1895年、…内閣の決定により日本領に編入しました。（P174） ・沖縄県の尖閣諸島は日本が実効支配しており、領土問題は存在しませんが、中華人民共和国（中国）や台湾が領有権を主張しています。（P176） 【コラム】 かつお節製造の舞台・尖閣諸島 尖閣諸島については、1885（明治18）年から、政府が沖縄県を通じた調査などを続けており、無人島であることや、当時の清をはじめとして、どの国も支配していないことを、慎重に確認してきました。このような状況をふまえて、政府は日清戦争中の1895年1月に、沖縄県に編入し、領土であることを示す標柱を建設することを閣議決定しました。こうして、正式に日本の領土になった尖閣諸島では、19世紀末から、日本人による開拓が本格化しました。多くの民間人が移住し、多いときには200人以上の住民が暮らしていました。中心となった魚釣島には、政府の許可を得て開拓を始めた実業家の名前を取って「古賀村」と呼ばれる集落もできていました。尖閣諸島では、漁業を中心にして、かつお節の製造や、羽毛の採取などが行われており、政府も、土地調査や事業の許可など、尖閣諸島に対するさまざまな措置を行っていました。こうした、日本の尖閣諸島に対する実効的な支配は、現在まで続いており、領有権をめぐる問題は存在しません。（P177） 【写真】 ・尖閣諸島の南小島と北小島と魚釣島（P177） ・魚釣島の土地台帳（P177） ・かつお節の製造 尖閣諸島の魚釣島では、近海のかつおを使ったかつお節が製造されていました。（P177）	【本文】 ・東アジアの伝統的な国際関係では、国境はあいまいでした。日本は、欧米の近代的な国際関係にならって、国境を明確に定めようとした。（P174） ・小笠原諸島は、いくつかの国が領有権を主張していましたが、1876年に日本の領有が確定しました。（P174） 【地図】 国境の確定 小笠原諸島は、16世紀末に日本人が発見したといわれ、江戸幕府が日本領であると宣言しましたが、実際には欧米の捕鯨船の乗組員の一部が島に住みついていた。1875年に日本政府が改めて領有を宣言し、翌年欧米に通告しました。（P174） ・現在の日本には、歴史的に見て固有の領土でありながら、周辺諸国との間で、領土をめぐる問題をかかえる地域があります。（P176） ・日本の固有の領土であっても、沖縄と奄美群島、小笠原諸島は、本土から切りはなされ、アメリカ軍の直接統治の下に置かれました。（P246） ・沖縄や小笠原諸島は、その後もアメリカの統治下に置かれました。（P253） ・近隣諸国との間には、領土をめぐる問題が続いています。（P262） 【注】 ・奄美群島は、1953年に返還されました。（P253） ・小笠原諸島は、1968年に返還されました。（P255） 【年表】 明治時代の国境と領土の確定（P174） 【地図】 現在の日本の領土（P176）

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他(領土の範囲等)
教 出	【本文】 ・ソ連とは、1956年に日ソ共同宣言に調印し、北方領土問題が未解決のまま、国交を回復しました。(P261) 【コラム】 ・北方領土(北海道) 日本とロシアは、1855年に日魯通好条約を結んで国交を開くとともに、両国の国境を確認し、択捉島以南を日本領、ウルップ島以北をロシア領と定めました。その後、歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島の北方領土は、日本固有の領土として統治されました。しかし、第二次世界大戦中の1945年8月9日、当時まだ有効だった日ソ中立条約を破って日本に対して参戦したソ連は、日本がポツダム宣言を受諾した後に、北方領土に軍隊を送ってこれらの島々を占領し、その後も不法な占拠を続けました。終戦時、北方領土にはおよそ17000人の日本人が漁業などを営んで生活していましたが、これらの人々は強制的に退去させられました。1956年に日ソ共同宣言が調印されましたが、北方領土をめぐる意見が一致せず、平和条約を結ぶことはできませんでした。日本政府は、ソ連(現在はロシア連邦)に対して領土の返還を求めて交渉を重ねていますが、返還はいまだに実現していません。日本は、この問題を解決して平和条約を締結することが必要との考えに立ち、これまでに到達した合意や、法と正義の原則に基づいて、粘り強く交渉を続けています。(P266) 【注】 ・ロシアとの条約では、千島列島の択捉島以南を日本領、ウルップ島以北をロシア領としましたが、樺太については国境を決めませんでした。(P158) ・ソ連がサンフランシスコ平和条約の調印を拒否したことから、千島列島の帰属については決められませんでした。歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島の北方領土は、日本固有の領土であり、日本はこれまでソ連に対して返還を要求してきました。ソ連の解体後は、ロシア連邦と交渉を続けており、これを北方領土問題といえます。(P260) 【地図】 ・日本の領土・領海 (P267) ・日本がロシア連邦に返還を求めている北方領土 (P267) 【写真】 ・北海道の東端から見た北方領土 手前は、根室市の納沙布岬です。ここから見える歯舞群島の最も近い島までは、4 kmほどです。(P261) ・色丹島での海苔づくり (P266)	【本文】 ・1905年には竹島を島根県に、…閣議決定により編入しました。(P174) 【コラム】 ・竹島(島根県) 竹島は、日本海に位置する女島(東島)や男島(西島)からなる群島で、日本固有の領土です。竹島では、江戸時代の初めから、鳥取藩の町人があしかやあわびの漁獲を行っていました。1900年代にあしかが本格化すると、1905年、日本政府は竹島を島根県に編入することを閣議決定しました。第二次世界大戦後、サンフランシスコ平和条約の作成段階には、韓国は「日本が放棄する地域として、竹島も加えてほしい」とアメリカ国務長官に求めましたが、「この島は、かつて朝鮮によって領有権の主張がされたとは見られない」として、韓国の主張は否定されました。しかし、韓国の李承晩大統領は、1952年に「海洋主権宣言」を行い、いわゆる「李承晩ライン」を一方向的に設定して、竹島を韓国に取り込みました。さらに韓国は、1954年から島に警備隊を常駐させて、不法な占拠を続けています。日本政府は、これに厳重な抗議を行うとともに、国際司法裁判所での話し合いによる解決を提案しましたが、韓国はこれに応じず、実現していません。(P266) 【年表】 ・日本の外交と領土の歩み (P175) 【地図】 ・日本の外交と領土の歩み (P175) ・日本の領土・領海 (P267)	【本文】 ・1895年には尖閣諸島を沖縄県に、…閣議決定により編入しました。(P174) 【コラム】尖閣諸島(沖縄県) 尖閣諸島は、南西諸島西端に位置する魚釣島・北小島・南小島などからなる島々の総称です。日本は、1885年から現地調査を行い、これらの島々が無人島であり、どの国の領土でもないことを確認したうえで、1895年の閣議決定により沖縄県に編入しました。その後、開拓が本格化し、尖閣諸島に移住した日本人は、漁業やかつお節の製造、羽毛の採集などに従事して暮らしました。第二次世界大戦後、尖閣諸島はアメリカ軍の占領下におかれましたが、1972年の沖縄県の返還にもなつて日本に復帰しました。しかし、尖閣諸島の周辺に石油や天然ガスの埋蔵の可能性があることが指摘されると、1970年代から、中国や台湾が自国の領土であると主張し始めました。その後、中国船が領海に侵入するなどの事件が起こっていることから、日本はこれに抗議し、警戒や取り締まりを強めています。尖閣諸島が日本固有の領土であることは、国際的に認められており、日本は尖閣諸島をめぐる、解決すべき領有権の問題は存在しないとの立場をとっています。(P267) 【年表】 ・日本の外交と領土の歩み (P175) 【地図】 ・日本の外交と領土の歩み (P175) ・日本の領土・領海 (P267) 【写真】 ・尖閣諸島でのかつお節づくり (P267)	【本文】 ・西洋の近代的な国際関係を受け入れ、それに基づいて近隣諸国との関係を結ぼうとした明治政府にとって、重要な課題となったのは、それまで東アジアではあいまいだった国境を明確にすることでした。…政府は、1876年に、小笠原諸島が日本の領土であることを宣言し、国際社会にも認められました。(P174) ・沖縄は日本領に編入されました (P175) ・沖縄や奄美群島、小笠原諸島は、引き続きアメリカの統治下におかれました。(P261) ・日本と近隣諸国との間には、領土をめぐる課題もあり、解決にむけて努力が続けられています。(P277) 【コラム】 ・課題の解決に向けて 領土をめぐる課題は、それぞれの国の主権に関わるもので、対立につながることもあります。また、政治・経済・歴史などとも関わり、解決は容易ではありません。武力に頼ることなく、対話と法に基づいて、平和的に解決することを目指していくことが重要です。一方で、東アジアの国や地域の発展にともない、相互の交流はますます活発になっています。環境問題などの解決のためには、各国が国境を越えて協力し合うことが求められています。(P267) 【年表】 ・日本の外交と領土の歩み (P175) 【地図】 ・日本の外交と領土の歩み (P175) 【注】 ・奄美群島は1953年、小笠原諸島は1968年に本土復帰を果たしました。(P265)

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他(領土の範囲等)
帝 国	【本文】 ・北方の国境については、ロシアと開国の際に、択捉島と得撫島の間に国境を確認していました (P195) ・1956年には、鳩山一郎内閣がソ連と日ソ共同宣言を調印し、北方領土は未解決のまま、戦争状態の終了を宣言し、国交を回復しました。 (P284) 【コラム】 ・日ソ共同宣言 ・ソ連は、日本国の要請にこたえ、かつ日本国の利益を考慮して、歯舞群島及び色丹島を日本国に引き渡すことに同意する。 (P286) ・江戸幕府は、1855年の日露通好条約で、択捉島と得撫島の間に国境を定めました。その後1875年の樺太・千島交換条約でロシアから得た千島列島を、日本はサンフランシスコ平和条約で放棄しましたが、北方領土の4島はその放棄地に含まれていないという立場をとっています。しかしソ連は、ヤルタ協定に基づいて、北方領土の4島を含めた千島列島の領有権を主張し、サンフランシスコ平和条約に署名しませんでした。1956年の日ソ共同宣言で、歯舞群島と色丹島の日本への返還が合意されましたが、択捉島と国後島については意見が食い違い、その後状況は進展していません。 (P286) 【注】 ・8月28日から9月5日までの間に、樺太を占領していたソ連軍が北方領土を占領しました。 (P270) ・日本が降伏した後に北方領土へ侵攻したソ連は、占領した四島をソ連に「編入」し、住んでいた日本人全員を強制退去させました。これに対して日本は、ソ連が北方領土を不法占拠しているとの立場をとっています。 (P279) 【地図】 ・明治初期の日本の国境と外交 (P195) ・日本の戦後の国境 (P285) ・北方領土周辺の国境変遷 (P286) 【写真】 ・国後島の中心であった泊村。泊村には警察署や郵便局などが置かれていました。漁業が産業の中心で、そのほかには馬の飼育も行われていました。 (P286)	【本文】 ・1905年には、竹島も現在の島根県に編入されました。 (P195) 【コラム】 ・竹島では、江戸時代初期には鳥取藩の米子の人々が、1900年代からは隠岐（島根県）の人々が、あしか猿やあわび漁を行っていました。隠岐の島民の願い出を受けた明治政府は、1905年に竹島の島根県編入を閣議決定し、自国の領土とする意思を公式に示しました。しかし、サンフランシスコ平和条約の草案作成過程で竹島への領有権の主張を退けられた大韓民国（韓国）は、平和条約の発行直前の1952年1月に、当時の李承晩大統領が、海洋に関する権利を宣言して一方的に公海上に境界線を設定し、54年からは竹島に海洋警察隊を駐留させました。 (P287) 【写真】 ・隠岐の人たちによる竹島でのあしか猿の様子 (P287) 【地図】 ・明治初期の日本の国境と外交 (P195) ・日本の戦後の国境 (P285) ・『小谷伊兵衛より差出候竹嶋之絵図』 1696年、江戸幕府の求めに応じて鳥取藩から提出された絵図の控えです。当時、竹島は松嶋とよばれ、現在の鬱陵島を竹嶋（磯竹嶋）とよんでいました。 (P287) ・竹島と尖閣諸島の位置 (P287)	【本文】 ・1895年には尖閣諸島も沖縄県に編入しました。 (P196) 【コラム】 ・離島の領土画定と国際法 尖閣諸島では事前の現地調査もたびたび行い、清などの支配が及んでいないことを慎重に確認しました。 (P196) ・魚釣島などからなる尖閣諸島は、明治政府が、1885年からたびたび現地調査を行って清などの支配が及んでいないことを慎重に確認したうえで、1895年に沖縄県編入を閣議決定しました。サンフランシスコ平和条約では、南西諸島の一部として日本の領土と扱われました。その際にアメリカに託された施政権も、1972年には沖縄返還協定の対象に含められて日本に返されています。しかし、1960年代末に周辺海底に石油が埋蔵されている可能性が指摘されると、1970年代から中国や台湾が領有権を主張し始めました。 (P287) 【写真】 ・かつお節工場 戦前までかつお節工場がありました。多い時は200人以上の住人が尖閣諸島で暮らしていました。 (P287) 【地図】 ・明治初期の日本の国境と外交 (P195) ・日本の戦後の国境 (P285) ・竹島と尖閣諸島の位置 (P287)	【本文】 ・近代の国家は、国境と領土を定め、そこに住む人々を「国民」としました。このため新政府は、それまであいまいだった国境を定めることに努めました。 (P195) ・小笠原諸島については、翌76年に国際法に基づいて日本領であると宣言し、国際的に認められました。 (P195) ・この条約で、日本の領土の範囲が決められ、日本は独立を回復しました。 (P284) ・日本と東アジアの国々の間には、歴史認識や領土をめぐる問題があり、関係改善に向けた努力が続けられています。 (P301) 【コラム】 ・日本の政府は開国以降、国際法にのっとりて領土を画定してきました。現在の日本の領土は、第二次世界大戦後の1951年に49か国の署名の下で結ばれた、サンフランシスコ平和条約によって法的に定められ、その範囲は本州・北海道・九州・四国とその周辺の島々に限られることが確認されました。日本の領土として扱われたうえでアメリカに施政権が託された島々も、奄美群島は1953年に、小笠原諸島は1968年に、沖縄は1972年に、日本へ返還されています。しかし、近隣諸国との間で課題がある地域も存在しています。 (P286) ・小笠原諸島の返還 戦後の小笠原諸島はアメリカの占領下に置かれ、基地がつくられました。島民は、欧米系の島民を除き、島へ帰ることを許されませんでした。終戦から23年後に小笠原復帰協定が結ばれ、日本へ返還されましたが、すでに本州で結婚をしている人などもいたため、実際に島へ帰れた人は多くありません。 (P287) 【注】 ・ポツダム宣言 日本の主権が及ぶのは、本州・北海道・九州・四国と連合国が決める島に限る。 (P270) 【地図】 ・明治初期の日本の国境と外交 (P195) ・日本の戦後の国境 (P285)

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他(領土の範囲等)
山 川	【本文】 ・交渉は難航したが、北方四島をめぐる領土問題は未解決のまま、1956(昭和31)年に日ソ共同宣言が調印され、両国の国交が回復した。(P266) 【コラム】 ・日ソ共同宣言 ソヴィエト社会主義共和国連邦は、日本国の要望にこたえ、かつ日本国の利益を考慮して、歯舞群島及び色丹島を日本国に引き渡すことに同意する。(P266) ・北方領土 蝦夷ヶ島(北海道)や千島・樺太(サハリン)方面には、江戸時代に最上徳内や近藤重蔵らが探検を行い、1798(寛政10)年には択捉島に「大日本意登呂府」の碑が建てられるなど、江戸幕府による支配が続いていた。1854(安政元)年、幕府は日露和親条約で初めてロシアと国交を結び、択捉島以南を日本領、得撫島以北の千島列島をロシア領と双方で定めた。明治政府は1875(明治8)年、樺太・千島交換条約を結び、占守島までの千島列島全てを日本領とした。したがって、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島は一貫して日本の領土であり、多くの日本人が居住して世代を継承した営みが続いていた。1945(昭和20)年8月8日、ソ連が宣戦を布告した。日本がポツダム宣言を受諾した8月14日以降、ソ連は北方四島に軍隊を上陸させて不法に占領し、間もなく日本人は全島から退去させられた。1951(昭和26)年のサンフランシスコ平和条約で、日本は千島列島を放棄したが、(1)ソ連は平和条約に調印していないため、条約上の権利を主張できないこと、(2)日本は千島列島を放棄したものの、北方四島は過去一度も他国の領土になったことのない日本固有の領土であり、日本が放棄した千島列島にはふくまれないこと、(3)戦争による侵略地ではないため、サンフランシスコ平和条約が求める植民地などの放棄にも当たらないことなどから、政府は択捉島以南の四島の一括返還を求めている。1956(昭和31)年、日本政府は日ソ共同宣言を結び、ソ連と国交を回復した。宣言では、両国で平和条約が結ばれた後にソ連が歯舞群島と色丹島を引きわたすとある。(P268～P269) 【注】 ・ロシアと結んだ日露和親条約では、国境について択捉島以南を日本領、得撫島以北をロシア領とし(P167) ・条約の締結にともない、樺太南部に住む樺太アイヌの一部は札幌付近の対雁(現在の江別市)、北千島に住む千島アイヌは色丹島へ、強制的に移住させられた。(P183) 【資料】 ・サンフランシスコ平和条約(P268) 【地図】 ・明治時代初期の日本の領土(P183) ・北方領土の変遷(P268) ・ソ連の樺太・千島への進攻(P268) ・日本の領土の変遷(P269) 【写真】 ・日ソ共同宣言調印式(P268)	【コラム】 ・竹島 江戸幕府は1635(寛永12)年、日本人の海外渡航を禁止したが、日本海の竹島への渡航は日本国内との認識から禁止しなかった。明治政府は1905(明治38)年、この無人島を正式に竹島と名付けて島根県に編入することを閣議決定した。第二次世界大戦後、1948年に建国された大韓民国(韓国)は、1952年に新たな「境界線」を日本海上に設けて竹島を韓国領に取りこんだ。日本政府は抗議したが、日本は当時、占領下にあり外交権を行使できなかった。日本政府は独立後の1965(昭和40)年に日韓基本条約を結んだが、竹島の領有問題は解決しなかった。韓国による竹島の支配は今も続いている。(P269) 【地図】 ・竹島周辺(P269)	【本文】 ・政府は1895(明治28)年に尖閣諸島も沖縄県に編入した。(P184) 【コラム】 ・日本固有の領土である尖閣諸島については、中国と台湾が1970年代以降に領有権を主張している。(P268) ・尖閣諸島 日本政府は現在、尖閣諸島をめぐる解決すべき領有権の問題は存在しないとしている。明治政府は尖閣諸島が清など他国の支配がおよばない無人島であることを確認したうえで、1895(明治28)年、閣議決定により日本の領土(沖縄県)に編入した。一時は魚釣島に民間のかつお節工場もつくられていた。中国が尖閣諸島の領有権を唱えたことはなかったが、1970年代以降、東シナ海に石油や天然ガスなど埋蔵資源の可能性が指摘されるようになると、領有権を主張するようになった。近年では日本の領海への侵犯行為が続いている。また、台湾も領有権を唱えている。第二次世界大戦後、サンフランシスコ平和条約でも尖閣諸島は日本の領土とされ、1952(昭和27)年以降もアメリカの管理下に置かれた。同条約で領有権を放棄した台湾や澎湖諸島に尖閣諸島はふくまれず、1972(昭和47)年に沖縄が日本に返還された際、尖閣諸島は沖縄県石垣市となった。現在、尖閣諸島は国有地として管理され、海上保安庁などによる厳重な警備が続いている。(P269) 【地図】 ・尖閣諸島周辺(P269) 【写真】 ・尖閣諸島(P269) ・魚釣島にあった日本のかつお節工場(P269)	【本文】 ・小笠原諸島の領有 開国後に幕府は各国に領有を通告し、明治維新後の1876(明治9)年に政府は内務省の出張所を置いた。(P184) ・沖縄返還 サンフランシスコ平和条約の調印後も、奄美群島・沖縄などの南西諸島や小笠原諸島はアメリカの統治下に置かれたままだった。このうち、奄美群島は1953(昭和28)年に、小笠原諸島などは1968(昭和43)年に日本に返還された。(P267) 【コラム】 ・日本固有の領土に関して、日本政府は現在、ロシアと北方領土、韓国と竹島について、領有権問題の存在を認めている。(P268) ・「蛍の光」 下に挙げているのは4番の歌詞の冒頭の変遷である。日本の領土拡大とともに歌詞が変更されている。①千島の奥も 沖縄も 八洲の内の 守りなり(『小学唱歌集初編』に所収された歌詞) ②千島の奥も 台湾も 八洲の内の 守りなり(日清戦争後) ③台湾の果ても 樺太も 八洲の内の 守りなり(日露戦争後)(P197) 【地図】 ・明治時代初期の日本の領土(P183) ・日本の領土の変遷(P269)

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他(領土の範囲等)
日 文	【コラム】 ・北方領土問題 北方領土とは、北海道の東に位置する歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島のことをさします。ここは北海道と同様にアイヌ民族が先住する地域でしたが、19世紀までに江戸幕府の支配がおよんでおり、1855年に結ばれた日露和親(通好)条約で、日本の領土と確認されました。しかし、1945(昭和20)年にソ連軍が北方領土を占領して以来、ソ連・ロシアによる不法な占拠が続き、ロシアの国民がくらしています。日本政府は、北方領土はサンフランシスコ平和条約で放棄した「千島列島」に含まれない日本固有の領土であると主張し、その帰属の問題を解決して、ロシアとの平和条約を締結するという方針に基づいて、ロシア政府との交渉を続けています。(P286) 【注】 ・歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島からなる北方領土問題については解決できず、日ソ間の平和条約締結後に歯舞群島、色丹島を引きわたすことが合意されました。(P271) 【資料】 ・日露和親(通好)条約(P286) ・日ソ共同宣言(P286) 【地図】 ・明治時代初期の外交と国境の画定(P186) ・日本の領土(P286) ・北方領土付近の国境の変化(P287) 【写真】 ・戦前の色丹小学校の運動会の様子 1945年8月、北方4島には、漁業を中心に1万7000人をこえる日本人が生活していました。島を追われた元島民の高齢化が進み、すでに亡くなった元島民は1万人をこえています。(P287)	【本文】 ・政府は、…1905年には竹島を島根県に編入することを閣議決定し、日本領としました。(P187) 【コラム】 ・竹島問題 竹島は、日本海の島根県隠岐島の北西に位置し、東島・西島などからなる総面積0.2km²ほどの群島です。1905(明治38)年に日本政府は、漁師が「りゃんこ島」とよぶ島について、他国が支配した形跡がないため、竹島と命名して島根県に編入するという閣議決定を行い、竹島を日本の領土としました。1951年のサンフランシスコ平和条約で日本が放棄した地域に竹島は含まれていません。しかしながら、韓国は竹島に韓国の主権がおよびと宣言し、1954年以来沿岸警備隊を竹島に駐留させ、施設を構築してここを不法に占拠し続けています。日本政府は、竹島が一度も他国の領土にはなったことがない日本固有の領土であると主張し、この問題を、国際法にのっとり、平和的に解決する努力を続けています。(P286) 【年表】 ・日本の領土の画定に関する動き(P186) 【地図】 ・明治時代初期の外交と国境の画定(P186) ・日本の領土(P286) 【写真】 ・竹島でアシカ漁をする漁師(P287)	【本文】 ・政府は、1895年に尖閣諸島を沖縄県に…編入することを閣議決定し、日本領としました。(P187) 【コラム】 ・尖閣諸島をめぐる 尖閣諸島は、沖縄県石垣島の北に位置し、魚釣島、久場島、大正島などの無人島や岩礁からなる島々で、総面積は5.53km²です。1895年、日本政府は、清国を含むどの国の支配もおよんでいないことを確認したうえで、尖閣諸島を沖縄県に編入し、日本の領土としました。1951年のサンフランシスコ平和条約によって、尖閣諸島は沖縄の一部としてアメリカの施政下におかれることになりましたが、1972年の沖縄返還にともない日本領にもどりました。ところが、付近の海域に石油資源埋蔵の可能性が指摘されて以来、台湾当局や中国政府が尖閣諸島の領有権を主張するようになりました。これに対し日本政府は、尖閣諸島が日本の領土であることは明らかで、解決しなければならない領有権の問題はそもそも存在しないという立場をとっています。(P287) 【年表】 ・日本の領土の画定に関する動き(P186) 【地図】 ・明治時代初期の外交と国境の画定(P186) ・日本の領土(P286) 【写真】 ・魚釣島のカツオ節工場(P287)	【本文】 ・欧米諸国のような近代国家をつくることをめざしていた政府は、国の範囲を決めるために、国境を定める作業に乗り出しました。…1876年、政府は国際的なきまりにしたがって、小笠原諸島を日本の領土とすることを各国に通告しました。(P186) ・日本と近隣諸国とのあいだでは、領土問題・・・での対立が存在していますが、それを解きほぐすためには、確かな歴史的事実を学んだうえで、対話を重ね、共有できる認識を広げていくことが重要です。(P284) 【注】 ・奄美群島は1953年に、小笠原諸島は1968年に、アメリカから日本に返還されました。(P275) 【資料】 ・ポツダム宣言 八 日本の主権がおよぶのは、本州・北海道・九州・四国と連合国が決める島に限る。(P251) 【年表】 ・日本の領土の画定に関する動き(P186) 【地図】 ・明治時代初期の外交と国境の画定(P186)

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他(領土の範囲等)
自由社	【本文】 ・1855年、幕府はロシアと日露親交約を結び、択捉島と得撫島の間を国境と定めました。(P172) ・終戦直後、ソ連は北方領土の国後・択捉島などを不法占拠したため、日ソ間では平和条約を締結できませんでした。(P262) ・ソ連は北方4島のうち、歯舞、色丹の2島だけ返還するとの姿勢を示しました。しかし日本は国後、択捉両島の日本固有の領土だとして、2島だけの返還を拒否しました。日ソ両国は翌1956(昭和31)年10月、領土問題を棚上げにした形で日ソ共同宣言を発表、国交を正常化させました。国交正常化により、日本はソ連が反対していた国連への加盟を果たし、長期抑留者も帰国できました。しかし領土問題はその後、ソ連が2島返還も取り下げないという異常な状態が続いています。(P263) 【コラム】 ・北方領土 日本はサンフランシスコ講和条約で千島列島の領有を放棄しました。しかし国後島、択捉島、色丹島、歯舞群島の北方4島は、その千島列島には含まれず、日本が一度も領有を放棄したことのない固有の領土であるというのが日本政府の立場です。従って、現在の北方領土は戦後、ソ連によって不法占拠されているとし、返還を求めています。北方領土は第二次世界大戦後日本で使われるようになった言葉で、択捉、国後、歯舞群島、色丹島の北方4島の範囲をさします。(P263) 【地図】 ・樺太・千島交換条約 歯舞、色丹、国後、択捉の北方4島は、この交換条約以前から日本領として確定していたことがわかります。(P172)	【本文】 ・ラインの内側には、日本の固有の領土である島根県の竹島も含まれており、韓国は一方的に自国領だと主張し、警備隊を置きました。1965(昭和40)年、日韓基本条約が結ばれた後も韓国による不法占拠は続いています。(P263) ・韓国は…竹島の不法占拠を続ける…(P279) 【コラム】 ・尖閣諸島と竹島の領土編入 竹島は日本海に浮かぶ2つの小さな島で、江戸時代からの漁場でした。江戸幕府は17世紀の半ばに領有権を確立しました。1905年、日本政府は竹島を日本の領土として島根県に編入しました。(P173) 【地図】 ・近隣諸国との国境画定 近代の日本の領土の範囲は、明治時代までに決まりました。(P172) ・李承晩ラインと竹島の位置 (P263) ・竹島 二つの小島からなる。(P263)	【本文】 ・沖縄県の尖閣諸島の領有権を不当に主張し、頻繁に公船や漁船、航空機を日本の領海、領空に侵入させています。これに対し、日本は「尖閣は日本固有の領土であり、領土問題は存在しない」との立場をとっています。(P278) 【コラム】 ・尖閣諸島と竹島の領土編入 尖閣諸島は沖縄県の石垣島から約170km離れた8つの小さな島からなります。日本政府は10年あまりの調査によってこの地がどの国にも属さないことを確認したうえで、1895年、日本の領土として沖縄県に編入しました。(P173) 【注】 ・尖閣諸島は、1885(明治18)年からの調査に基づき、1895(明治28)年、どの国にも属していないことを確認し、日本政府が閣議決定により日本の領土に編入しました。最盛期には200人以上の日本人が、カツオ節製造などのため居住していました。戦後アメリカの施政下にありましたが、1972(昭和47)年、沖縄返還にともない日本に戻りました。(P278) 【地図】 ・近隣諸国との国境画定 近代の日本の領土の範囲は、明治時代までに決まりました。(P172)	【本文】 ・1876(明治9)年、日本は小笠原諸島を日本領とし、各国の承認を得ました。小笠原諸島にはイギリス船が自国の国旗を立てていましたが、アメリカが反対しました。(P172) ・1879(明治12)年、琉球を正式に日本の領土とし、沖縄県を設置しました(琉球処分)。日本はこうして、1870年代に、近隣諸国との間の国境をほぼ画定することに成功したのです。(P173) ・講和条約により、…小笠原諸島はアメリカの統治下におかれました。(P262) 【コラム】 ・「螢の光」と国境 「千島のおくも沖縄も やしまのうちの護りなり…」これは、国境が画定したのを受けて、千島から沖縄までが日本(やしま)だということを歌ったもの(P172) 【地図】 ・近隣諸国との国境画定 近代の日本の領土の範囲は、明治時代までに決まりました。(P172)

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他(領土の範囲等)
育 鵬 社	【本文】 ・1854(安政元)年の日露親条約(日露通好条約)で、択捉島から南は日本領、得撫島から北の千島列島は、ロシア領と決めていました。(P176) ・終戦後に千島列島に侵攻したソ連軍は、さらに北方領土を不法占拠しました。(P249) ・ソ連とは、北方領土問題が未解決のため平和条約を結ばず、1956(昭和31)年、鳩山一郎内閣が日ソ共同宣言を結んで国交を回復しました。(P255) ・ロシアは、北方領土(北海道)を不法占拠しており、日本政府は、領土問題を解決したうえで平和条約締結を目指しています。(P269) 【コラム】 ・北方領土 北海道の北東にある歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島は、北方領土といい、一度も外国の領土になったことがない日本固有の領土です。そのさらに北の得撫島から先が千島列島です。幕末の1854(安政元)年、日本は、ロシアと日露親条約(日露通好条約)を結び、択捉島から南を日本の領土、得撫島から北をロシアの領土と確認しました。第二次世界大戦末期の1945(昭和20)年、日ソ中立条約を破って日本に宣戦布告したソ連は、南樺太に侵攻し、戦争が終わった後に千島列島の北の端から上陸を始め、北方領土も占領しました。北方領土には、当時、約1万7000人の日本人が住んでいましたが、自ら脱出したり、追い出されたりしました。1951(昭和26)年のサンフランシスコ平和条約で、日本は、千島列島と南樺太を放棄しましたが、放棄した千島列島に北方領土がふくまれないことは歴史的にも国際的な取り決めからも明らかです。1956(昭和31)年の日ソ共同宣言で、両国が平和条約を結んだ後に、ソ連が歯舞群島と色丹島を日本に引きわたすとされましたが、ソ連がロシアになった今も北方領土の不法占拠が続いているため、平和条約は結ばれていません。日本は、北方領土のすべての島を返すよう求めています。(P256) 【注】 ・ソ連軍は終戦後に択捉島以南に侵攻し、ソ連がロシアになった今日にいたるまで不法占拠している(北方領土問題)。(P238) 【資料】 ・元島民の声：山本昭平さん(P256) 【年表】 ・北方領土に関する年表(P256) 【地図】 ・近隣諸国との国境画定と外交(P176) 【写真】 ・択捉島で開かれた交流会でロシア人住民に折り鶴の工作を指導するビザなし交流団員(P256)	【本文】 ・1905(明治38)年に日本海の竹島を島根県に…組み入れました。(P177) ・竹島(島根県)を不法占拠している問題も解決していません。(P269) 【コラム】 ・竹島 島根県の竹島は、隠岐諸島の北西およそ158kmにある2つの小さな島と数十の岩からなる、日本固有の領土です。江戸時代の初めの1618(元和4)年、鳥取藩(鳥取県)の商人が幕府の許可を得て鬱陵島(今は韓国の領土)でアワビを採ったり、アシカを捕まえたりし始め、その行き返りに竹島に立ち寄っていました。1661(寛文元)年には、竹島でも幕府の許可を得て、漁業や狩猟が始まりました。1905(明治38)年、日本は、これまでどこかの国の領土にもなっていない竹島を正式に領土にし、島根県に組み入れました。戦後のサンフランシスコ平和条約で日本は、鬱陵島を放棄しましたが、竹島は放棄していません。ところが、韓国は、この条約が発行する直前の1952(昭和27)年1月に、日本海に「李承晩ライン」を一方的に設けて竹島をその内側に取りこみ、その後、警備隊を駐留させました。1965(昭和40)年の日韓国交正常化の際に、李承晩ラインはなくなりましたが、韓国による竹島の不法占拠は続いています。日本は竹島を返すよう韓国に求めています。(P257) 【地図】 ・近隣諸国との国境画定と外交(P176) ・竹島周辺地図(P257) ・江戸時代の竹島の地図 1696(元禄9)年、江戸幕府の求めに応じて鳥取藩から提出された絵図。当時は竹島を松嶋、鬱陵島を竹嶋(磯竹嶋)と呼んでいた。(P257)	【本文】 ・1895(明治28)年に東シナ海の尖閣諸島を沖縄県に…組み入れました。(P177) ・尖閣諸島(沖縄県)周辺に監視船を侵入させるなどの対立があります。(P269) 【コラム】 ・尖閣諸島 沖縄県の尖閣諸島は、石垣島から約170kmはなれた東シナ海の5つの島と3つの岩からなる日本固有の領土です。福岡県出身の実業家が1884(明治17)年に人を派遣して探検を始め、日本政府も清の支配がおよんでいないことを慎重に確認したうえで、1895(明治28)年に正式に領土にし沖縄県に組み入れました。それ以降、カツオ節の生産やアホウドリの羽毛の採取が盛んに行われ、最も多いときで240人以上が住んでいました。尖閣諸島は、サンフランシスコ平和条約で日本が放棄した「台湾及び澎湖諸島」には当然ふくまれず、沖縄の一部としてアメリカの統治の下に置かれ、1972(昭和47)年の沖縄返還にともなって日本に復帰しました。北方領土や竹島とちがって、日本が実効支配(実際に統治)していて、政府は解決すべき領有権の問題は存在しないとの立場です。しかし、1970年代に東シナ海に石油などの資源がある可能性が分かれると、中国や台湾が突然、領有権を主張し始め、最近も中国の監視船が日本の領海に侵入をくり返しています。(P257) 【地図】 ・近隣諸国との国境画定と外交(P176) ・尖閣諸島周辺地図(P257) ・1958年に中国の地図出版社が出版した『世界地図集』 尖閣諸島を尖閣群島と表記し、沖縄の一部として取りあつたっている。(P257)	【本文】 ・日本が近代国家として外交を行うためには、近隣の国々との国境を決めて、領土を定める必要がありました。(P176) ・政府は、1876(明治9)年に、小笠原諸島が日本領であることを各国に通告し、国際的に承認されました。(P177) 【注】 ・小笠原諸島は1968年に本土復帰した。(P259) 【資料】 ・ポツダム宣言 日本国の主権は本州、北海道、九州、四国さらにわれらが指定する島々に限定される。(P239) 【地図】 ・近隣諸国との国境画定と外交(P176)
学 び 舎	【本文】 ・1956年には日ソ共同宣言によって、北方領土問題は未解決のままソ連と国交を回復し、国連への加盟が認められました。(P257) 【注】 ・北方領土問題 日本政府は、北方四島は日本固有の領土であり、その帰属の問題を解決してロシアとの平和条約を結ぶとの基本方針のもとについて、交渉を行っている。(P257)	【注】 ・竹島の領有 日本政府は、1905年1月、竹島を日本の領土(島根県)として編入することを、閣議で決定した。(P189)	【注】 ・尖閣諸島の領有 日本政府は、1895年1月、尖閣諸島を日本の領土(沖縄県)として編入することを、閣議で決定した。(P185)	【地図】 ・日本の領土画定と外交(P177)

発行者	北方領土に関する記述の概要	竹島に関する記述の概要	尖閣諸島に関する記述の概要	その他(領土の範囲等)
令書	【本文】 ・幕末の安政元年（一八五四）に締結された日露和親条約で、択捉島と得撫島の間に国境線が引かれ（P299） ・北方領土（歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島）は、一貫して我が国固有の領土です。寛政十年（一七九八）、幕臣の近藤重蔵が国後島から択捉島にかけて調査した際に、択捉島に「大日本恵登呂府」と書いた標柱を建てました。そして翌寛政十一年（一七九九）、幕府は近藤を派遣して、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の直接統治を始めました。また享和元年（一八〇一）には南部藩と津軽藩の兵隊約一〇〇人を常駐させて守備にあたらせました。そして明治時代には、日本列島の各地から北方領土へ漁業や出稼ぎで移住する人が増えました。このように北方領土は、一度もロシアが主権を行使したことはありません。（P300） ・ソ連との領土問題は未解決で、現在に至っても、日本とロシアの間には平和条約が締結されていません。（P422） ・北方領土は有史以来、我が国が一貫して領有していた我が国固有の領土です。北方領土は終戦の混乱に紛れて、ソ連に不法に占領されました。…北方領土も不法に占拠されたまま、いまだに返還されていません。…その後も北方領土問題の進展はありません。（P423） ・北方領土問題は、平和条約締結を含めて交渉が進められていますが、まだ返還の具体的な話し合いに入れないのが現状です。近年ロシアは北方領土で軍事施設の建設を進めていて、周辺で大規模な演習を行うなどして、不法占拠をより強固なものにしています。（P443） 【注】安政2年（1855）にロシアと締結した日露和親条約では、択捉島と得撫島の間に国境線が引かれ、択捉島以南を日本領、得撫島以北をロシア領とした。（P251） 【地図】北方領土、千島列島、樺太の領有（P301）	【本文】 ・島根県隠岐島の北西にある竹島は、江戸幕府が十七世紀初めごろから利用を認め、鎖国政策のなかで竹島への渡海を認めていました。我が国は遅くとも十七世紀半ばには、竹島に対する領有権を確立しました。二十世紀に入ると、民間の竹島利用が活発になり、日本政府は明治三十八年（一九〇五）、閣議決定により竹島を島根県に編入し、領有意思を再確認しました。…竹島は我が国固有の領土なのです。（P303） ・日本の占領が解除されると、韓国は李承晩ラインを一方的に宣言し、韓国は竹島を占拠しました。歴史上、朝鮮王朝が竹島を領有した事実はありません。竹島は江戸時代にはすでに日本の漁船などの停泊地として利用されていて、アワビなどの採取も行われていました。明治時代に無主地であった竹島を、明治三十八年（一九〇五）の閣議決定で島根県に編入しました。竹島は我が国固有の領土です。終戦後の占領下では、竹島は米軍が演習で使用していましたが、米軍が不在となり、自衛隊が発足するまでの期間は、日本には韓国の不法な武力占拠に対抗する手段がありませんでした。韓国はその隙を突いて竹島を奪い、現在も不法占拠を継続し、竹島問題は未解決のままです。（P423） ・韓国は日本固有の領土である竹島を不法占拠しています（P433） ・竹島問題も返還に向けた進展はありません。（P443）	【本文】 ・琉球周辺にある尖閣諸島は、十九世紀後半まで、どの国にも属さない無人島でしたが、東シナ海を行き来する船に航路標識として利用され、その存在は古くから知られていました。江戸時代の文政二年（一八一九）ごろに琉球王族が上陸した記録もあります。その尖閣諸島は、明治十八年（一八八五）に日本政府が沖縄県を通じて現地調査を実施し、無人島であることと、清国の支配が及んでいる痕跡がないことを確認して、明治二十八年（一八九五）に閣議決定により日本の領土に編入されました。（P303） ・中国が我が国固有の領土である尖閣諸島の領有権を主張し、中国公船が頻繁に日本の領海を侵犯し、日本の主権が脅かされています。平成二十二年（二〇一〇）に尖閣諸島付近で違法に操業していた中国漁船を、日本の海上保安庁が取り締まったとき、中国漁船が海上保安庁の船に意図的に体当たりする事件が発生しました。尖閣諸島漁船衝突事件といえます。これがきっかけとなり、日本政府は平成二十四年（二〇一三）、尖閣諸島を国有化しました。以降、中国は尖閣諸島周辺に公船をかつてない頻度で派遣するようになりました。日本の実効支配を崩す目的だと思われます。尖閣諸島は、明治十八年（一八八五）に日本政府が沖縄県を通じて現地調査を実施し、無人島であることと、清国の支配が及んでいる痕跡がないことを確認して、明治二十八年（一八九五）に閣議決定により日本の領土に編入されました。その後、日本人が尖閣諸島で燈節工場を営み、明治四十二年（一九〇九）には二四八人の日本人が暮らしていたことが記録されています。その後、経営難により昭和十五年（一九四〇）に無人島になりました。そして昭和二十年（一九四五）に第二次世界大戦が終結すると、尖閣諸島を含む南西諸島は米軍の管轄下に置かれ、昭和四十七年（一九七二）に沖縄の一部として米国から返還され、現在に至ります。ところが、昭和四十三年（一九六八）の海底調査の結果、東シナ海の大陸棚に石油資源が埋蔵されている可能性があることが判明すると、昭和四十五年（一九七〇）に台湾が尖閣諸島の領有権を主張しはじめ、中国も同様の主張をするようになりました。これに対して日本政府は、一貫して尖閣諸島に領土問題はないという立場をとっています。尖閣諸島は有史以来、我が国固有の領土であり、他国が支配したことは一度もありません。尖閣諸島周辺では多くの中国漁船が操業し、中国海軍艦艇を含む中国公船が頻繁に接続水域や領海に侵入しています。日本は海上保安庁と海上自衛隊が現地で粘り強く対応しています。（P441） 【地図】 ・領土編入前の東シナ海周辺と尖閣諸島（P304）	【本文】 ・政府は明治八年（一八七五）に小笠原諸島の領有を宣言し、翌年に各国に通知し、日本が領有することが確定しました。（P303・P305） ・沖縄、奄美群島、小笠原諸島は引き続きアメリカの統治下に置かれました。（P422） ・日本はサンフランシスコ講和条約で南樺太と千島列島の領有権を放棄しました（P422） ・佐藤栄作首相は昭和四十三年（一九六八）に小笠原諸島の返還を、また昭和四十七年（一九七二）に沖縄本土復帰を実現させました。（P433） 【注】 ・内地 憲法下で通常の法律が行われる区域のこと。法律（「共通法」第1条）により日本列島の北海道から沖縄までが内地とされた。また、樺太は内地に含まれるとされた。「本土」という場合もある。（P365） ・外地 日本の統治が及ぶ領域のうち、内地を除いた地域を外地という。朝鮮、台湾、関東州、南洋諸島などがこれに含まれる。特に朝鮮と台湾では、内地と外地の差異を埋める政策が採られた。（P365） ・小笠原諸島と沖縄の返還 沖縄でも祖国復帰運動が盛んになり、全国規模の運動に発展すると、米国は日本の世論を考慮せざるをえなくなった。佐藤内閣は、東アジアの平和に日本が積極的に寄与することを約束して返還を強く求め、小笠原諸島と沖縄の祖国復帰が実現した。日本はその後米国に沖縄の基地使用を認めている。沖縄返還に際して佐藤内閣は、核兵器を「持たず、作らず、持ち込ませず」を内容とする非核三原則を示した。（P435） 【資料】 ・ポツダム宣言 一、日本国の主権は本州、北海道、九州および四国、ならびに連合国の決定する諸島に限られる。（P391）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
東 書	【注】星条旗 最初のアメリカの国旗は、星も紅白のしまも、独立直後の13の州を表していました。(P147)
教 出	「国旗や国歌の由来」 【コラム】国旗や国歌は、国家の理念や歴史などを表すシンボルとして、国民に共有されるようになりました。例えば、フランスの国旗には、次のような由来があります。もとはパリ市の色である青と赤に、王家の旗色である白を加えたものでした。そこに共和国の標語である自由・平等・友愛の意味が込められました。(P156) 【図】 ・フランスの国旗 (P156) ・イギリスの国旗「ユニオンジャック」 (P156) 「日本の国民意識の変化」 【コラム】日本の日章旗（日の丸）は、幕府が、外国船との区別をはっきりさせるために、日本船の船印として決めたもので、やがて国旗として扱われるようになりました。(P157)
帝 国	「アメリカの独立戦争」 【図】星条旗 独立当時の国旗の星の数は、州数の13でした。州の増加に伴い、星の数も増えました。(P163) 「『国民』の形成と学校教育」 【コラム】国旗と国歌 「日の丸」は、日本の船と外国船を区別するために幕末から頻繁に用いられるようになりました。一方、「君が代」は、明治時代の初め、イギリス軍楽隊長に儀礼用の国歌があるか質問されたことをきっかけに、『古今和歌集』にある歌をもとにした歌詞と、軍楽隊長がつけた曲（後に変更）でつくられました。「日の丸」と「君が代」は、外国との国際関係において求められたものでした。(P223) 「シベリア出兵とソ連の成立」 【図】ソ連の国旗 (P231)
山 川	「アメリカ独立」 【図】星条旗 独立当初、アメリカが13州だったときのもので、星の数と横じまの数はどちらも13である。州の数が増えるにともない国旗の星の数も増え、現在は50である。(P157) 「国家とは何か」 【コラム】国家としてのイギリス 国旗の変遷の図 (P175) 【写真】フランス国歌「ラ＝マルセイエーズ」 フランスの国歌である「ラ＝マルセイエーズ」は、フランス革命のさなかにつくられた。右手を挙げて歌っているのは、歌の作者である。フランスの国旗（三色旗）も同じように、革命のさなかにつくり出された。(P175)
日 文	記載なし
自由社	「明治国家を背負った伊藤博文」 【コラム】感銘を与えた「日の丸演説」 国旗日の丸を指し「あの赤い丸は今まさに昇ろうとする太陽を象徴し、日本が欧米文明のただ中に向かって躍進する印であります」と述べ、大きな拍手をあげました。「日の丸演説」と言われています。(P197)
育鵬社	「アメリカ合衆国の独立」 【図】最初のアメリカ合衆国国旗（星条旗） 独立時の13州が星と紅白のしまの数で表されていた。(P155) 「フランス革命」 【資料】フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」の大意 1792年のオーストリアとの戦争の際、マルセイユ義勇軍がパリで歌い、のちに国家となった。(P157)
学び舎	「下関条約と台湾の征服」 【図】台湾民主国の国旗 (P185)
令 書	記載なし

「別紙２－６」 【 神話や伝承を知り、日本文化や伝統に関心をもたせる資料 】（中学校 社会 歴史的分野）

発行者	「教材名」	【掲載方法】	記述の概要（掲載ページ）
東 書	『歴史書と万葉集』	【本文】 神話や伝承、記録などを基に歴史書の「古事記」と「日本書紀」が作られました。また、全国に命じて、自然・産物・伝承などを記した「風土記」が国ごとに作られました。（P51）	【現代に生きる神話】 【コラム】 現代に生きる神話として、古事記や日本書紀の神話や、それを取り入れた神楽について紹介している。具体的に、「『記紀神話』の成立」、「『記紀神話』の展開」、「日本の神話と世界の神話」について触れるとともに、「島根県と神話」において「出雲神話」を、「宮崎県と神話」において「岩戸がくれ」の神話を取り上げている。（P58～P59） 【写真】 出雲大社本殿、出雲大社の境内から発掘された心御柱、伊勢神宮の内宮（皇大神宮）、「大蛇（おろち）退治」を題材にした「佐陀神能」、「岩戸がくれ」を題材にした神楽（P58～59） 【地図】 「失われたつり針」型の物語の分布（P59）
教 出	『歴史書と万葉集』	【本文】 国際的な交流が盛んになると、天皇が日本を治める由来を説明する歴史書として、神話や国の成り立ちを記した『古事記』・『日本書紀』がまとめられました。また、地方の国ごとに、地理や産物、伝承などを記した『風土記』もまとめられました。（P47）	【神話にみる古代の人々の信仰】 【コラム】 「日本の神話」において、神話の概念、当時の人々の信仰やものの見方について、「古事記に記された黄泉の国の物語」、「神話にみる古代の人々の信仰とものの見方」において、具体的な神話の内容と、神話から読み取れることを説明している。（P52～P53） 【写真】 古事記、出雲大社、玉塚古墳の壁画、鳥居（P52～P53）
帝 国	「文字の普及と歴史書」	【本文】 天皇が日本を治めることの正統性を明らかにしようとする動きも起こり、天皇家の由来を説明するための歴史書として『古事記』や『日本書紀』がつくられ、数々の神話がそこへ記されました。また、天皇が支配するすべての土地の地理的な情報を集めるため、産物や地名の由来、伝承などを国ごとにまとめた『風土記』もつくられました。（P49）	【資料】 国生みの神話（P49） 「自然災害と神話」 【コラム】 出雲西部を舞台とするヤマタノオロチ伝説は、頻発した土石流などの洪水や水害が背景にあると考えられており、このような神話は、現在でも神事や神楽などに受け継がれていることを説明している。（P49） 【資料】 ヤマタノオロチの神話（P49） 【写真】 石見神楽、『日本書紀』（P49）
山 川	『歴史書の編さん』	【本文】 律令国家が確立すると、天皇の由来や、天皇が国家をおさめる正当性を示すために、歴史書の編さんが行われた。天武天皇が命じた歴史書の編さん事業を引きつぎ、奈良時代には『古事記』と『日本書紀』が完成した。『古事記』は、神話の時代から推古天皇の時代までの、天皇の起源を説明する物語をまとめたものである。『日本書紀』は、中国の歴史書にならって漢文で書かれた日本で最初の歴史書で、神話の時代から持統天皇の時代までの歴史がまとめられた。このほか、諸国には、国内の産物や地名の由来、古くからの伝承などを報告することが命じられ、国ごとに『風土記』がつくられた。（P42～P43）	【コラム】 日本の神話 『古事記』、『日本書紀』（記紀）、『風土記』に記載されている神話の特徴や、海外の神話との関係性について説明している。（P42）
日 文	『万葉集と歴史書』	【本文】 律令国家のしくみが整ってくると、国家のおこりや天皇・貴族の由来などを説明するために、『古事記』や『日本書紀』などの歴史書がつくられました。このほか、全国の国ごとに、自然・地理・産物や伝説などについてまとめた『風土記』がつくられました。（P50）	【資料】 『古事記』の序文（P50） 「日本の神話」 【コラム】 「神話とは何か」において、古代の人々の行動のよりどころであったことを説明するとともに、「『古事記』『日本書紀』の神話」、「さまざまな神話」において、神話の具体的な内容を紹介している。（P51） 【写真】 佐太神社の佐陀神能、高千穂神社の夜神楽（P51）

「別紙２－６」 【 神話や伝承を知り、日本文化や伝統に関心をもたせる資料 】（中学校 社会 歴史的分野）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
自由社	「皇紀」 【本文】以上のほか、日本には皇紀があります。日本書紀に書かれた初代・神武天皇が即位したとされる伝説上の年を元年とする年の数え方で、皇紀元年は西暦紀元前660年にあたります。（P10） 「神話が語る国の始まり」 【本文】『『古事記』『日本書紀』に書かれた神話・伝承」、「イザナキ・イザナミとアマテラスの誕生」、「オオクニヌシの神と出雲神話」、「天孫降臨と神武天皇」と題して、神話・伝承による日本の国の成り立ちを紹介している。（P38～39） 【コラム】「神道とは何か」と題して、外来の思想が伝来する以前から、日本にあった信仰を紹介している。（P38） 【写真】天照大神を祀る伊勢神宮の内宮正宮（P38） 【資料】天の岩戸神話、日本サッカー協会のシンボルマーク、神話による神々の系図、神武東征伝承（P38～P39） 「国譲り神話と古代人」 【コラム】「大国主神の『国譲り』」について神話の内容を紹介するとともに、「古代日本人のものの考え方」、「姿をあらわす巨大空中神殿」では出雲大社について説明している。（P40～41） 【写真】出雲大社の伝承に基づく復元模型、出雲の国から出土した銅鐸、出雲大社（P40～41） 【資料】オオクニヌシの神（P40） 「日本の天皇と中国の皇帝」 【コラム】「日本の天皇と天の思想」と題して、日本における「天」の思想は『古事記』に由来することを説明している。（P53） 「記紀の完成」 【本文】712年に『古事記』が完成し、全3巻の中に、民族の神話と歴史がすじみち立った物語としてまとめられました。次いで、720年には『日本書紀』全30巻が完成し、日本国家の正史として、歴代の天皇の系譜とその事績が年代順に詳細に記述されました。（P54）
育鵬社	「日本人の宗教観」 【コラム】「日本固有の宗教・神道の特色」について説明し、その中で日本人の宗教観として『古事記』では「八百万の神」という言葉で表されていること、日本人は祖先崇拝を大切にしてきたこと、また、「外来文化を取り入れてゆく寛容さ」において、日本人の宗教観について説明している。（P44） 「神話と歴史書の完成」 【本文】律令国家としての基礎ができあがるにつれ、日本の歴史が書物としてまとめられるようになりました。神々の物語や代々の天皇の業績を記した『古事記』や、国の正史（公式な歴史書）として代々の天皇やその業績を記した『日本書紀』がそれにあたります。また、朝廷の命令によって、各地の地理や産物、伝説などを記した『風土記』もつくられました。（P52） 「神話に見る日本誕生の物語」 【コラム】「日本の神々の物語」、「三種の神器と神武天皇」、「伝説の英雄が活躍する神話」と題して記紀の内容などを紹介している。（P54～P55） 【資料】天岩屋戸、日本サッカー協会のシンボルマーク（P54～P55） 【地図】ヤマトタケルノミコトが東征したと伝えられるルート（P55） 【写真】スサノオノミコトのオロチ退治、伊勢神宮、出雲大社（P54～P55）
学び社	「歴史と神話の本をまとめる」 【本文】朝廷は8世紀の前半に、中国の正史にならった歴史書の『日本書紀』を、神話の記録として『古事記』を完成させました。これらは、古くからの伝承もふくんでいます。天武天皇が、国の統一をすすめる目的で編さんを命じていたものです。ここには、太陽の女神とされる天照大神が、天から地上に神々をつかわし、その子孫が国を制圧して、最初の天皇になったという神話が書かれています。東アジアの国々に対しても、天皇がこの国を治める正当性をしめそうとしたものです。また、国ごとに言い伝えられたことをしるした『風土記』もまとめられ、出雲国（島根県）や常陸国（茨城県）などのものが残っています。（P45） 「『常陸国風土記』に書かれた富士山と筑波山」 ・【コラム】母神が富士山と筑波山を訪れた際の話を紹介している。（P45） ・【写真】筑波山（P45）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
令 書	『日本列島の誕生』 【本文】今から約一三〇〇年前の奈良時代、第四十代天武天皇の命令によって編纂された二つの書物が完成しました。『古事記』と『日本書紀』です。両方を合わせて記紀といいます。『古事記』は日本の神話などの伝承と歴代天皇の事績を伝えるため、また『日本書紀』は日本の歴史を伝えるために編纂されたと考えられています。『古事記』は今に伝わる書物のなかでは日本最古で、そこには、日本列島誕生の神話や日本建国の物語が書かれています。『古事記』は、宇宙空間に最初に出現した神々の末っ子の伊邪那岐神と伊邪那美神が、日本列島の島々を生んだ国生み神話を伝えています。（P19） 【文献史料】『古事記』国生み神話（P20～P21） 「天孫降臨」 【本文】『古事記』は人や日本人の起源については何も記していませんが、天皇の祖先について次のように記しています。国生み物語で日本列島を生んだ伊邪那岐神は、最後に身を清めてから左目を洗うと天照大御神、右目を洗うと月読命、そして鼻を洗うと須佐之男命が現れました。いずれも尊い神なので、三貴子といいます。天照大御神は、父から高天原（天上世界）を「知らず」（治める）ように命ぜられました。一方、葦原中国（地上世界）では、須佐之男命の子孫にあたる大国主神が立派な国を作りましたが、話し合いの結果、葦原中国は天照大御神に譲られることになりました。話し合いで国が譲られたので、これを国譲り神話といいます。そこで、天照大御神は、自らの孫を葦原中国にお遣いになり、国を知らずように命ぜられました。この命により地上に降臨したのが、初代天皇とされる神倭伊波礼毘古命の祖先にあたる邇邇芸命です。天つ神（高天原の尊い神。ここでは天照大御神のこと）の孫が降臨したので天孫降臨といえます。このとき、天照大御神は邇邇芸命に八咫勾瓊、御鏡、草薙剣を賜いました。これが「天皇が天皇であることの証」といわれる三種の神器です。これらが後に歴代天皇により継承され、現在の天皇陛下に受け継がれていると伝えられています。令和元年五月一日には、平成の天皇陛下から現在の天皇陛下に剣（草薙剣）と璽（八咫勾瓊）を受け継ぐ剣璽等承継の儀が皇居宮殿で執り行われました。ところで、『日本書紀』もこれに近い神話を伝えています。天照大御神は「私が高天原に所有する斎庭之穂（高天原の清らかな田で育てた稲穂）を持たせなさい」と仰おせになり、瓊瓊杵尊（邇邇芸命のこと。『古事記』と『日本書紀』では異なった字を用いている）に神聖な稲穂を持たせて降臨させたと書かれています。天孫降臨神話は、天皇の祖先にあたる、天つ神の子孫が高天原から葦原中国に降臨したことだけでなく、まもなく社会の基盤となる稲作の起源は、天皇の先祖からもたらされたことを伝えようとしています。天皇の祖先について記紀がこのようなように記述していることから、当時の日本人の考え方がこのようなものであったと知ることができます。（P37～P38） 【文献史料】 ・『古事記』天孫降臨の神勅（P38） ・『日本書紀』天壤無窮の神勅（P38） 「『古事記』の国譲り神話」 【コラム】「古事記」に書かれた国譲り神話について紹介している。（P38～P39） 「日向三代と神武天皇の東征伝説」 【本文】邇邇芸命は山の神の娘と結婚して火遠理命をもうけ、火遠理命は海の神の娘と結婚して鵜葺草葺不合命をもうけました。これにより、鵜葺草葺不合命は、天つ神だけでなく、山の神と海の神の系統を受け継ぐことになりました。このようにして、地上世界を統治する者としての正統な系統が整えられていきます。邇邇芸命から鵜葺草葺不合命までを日向三代といいます。邇邇芸命は、山の神の娘二人を娶りましたが、妹の木花之佐久夜毘売を側において、姉の石長比売を実家に帰してしまったことで、日の御子は、永遠の命を意味する岩の霊力に守られず、花のように栄えるも、その命は花のように儚いものになってしまったのです。これは、神である邇邇芸命に寿命が与えられたことを意味します。それ以降、邇邇芸命の子孫はみな限りある命となりました。これが、天皇の先祖が神から人になった瞬間です。しかし、神から人になったとはいえ、神としての性格は保持したままと考えられてきました。そして、鵜葺草葺不合命がもうけた子が神倭伊波礼毘古命、まもなく初代の神武天皇に即位なさる方です。続けて『古事記』は神武天皇の東征について記しています。『日本書紀』によると、神武天皇は橿原に都を定めるにあたり詔勅を発せられました。ここには「八紘為宇」という我が国の建国の理念が示されています。日本列島の人々が、あたかも一軒の家に住むように仲良く暮らすことを国の理想とする考えです。この建国の理念が、歴代天皇によって継承され、現在に至るのです。このような記紀の記述から、この時代の人々の、天皇とその先祖に関するものの見方がこのようなものであったことが分かります。ところで、『日本書紀』は神武天皇の御即位を、紀元前六六〇年元旦と伝えていますが、これを根拠に、我が国は、太陰暦を太陽暦に換算した二月十一日を建国記念の日として、毎年建国を祝っています。（P49～52） 【文献史料】『日本書紀』神武天皇の建国の詔（抄録）（P52）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
東 書	「冷戦後の日本外交」 【本文】人権や主権を無視して多数の日本人を拉致したことが明らかになった北朝鮮との関係は、難しい問題です。(P262) 【写真】拉致問題被害者日本帰国 北朝鮮に不当に連れていかれた被害者のうち５人が2002年に、その家族が2004年に帰国しましたが、問題は解決されておらず、国交正常化の動きも進んでいません。(P263)
教 出	「アジアの成長と課題」 【本文】北朝鮮による…多数の日本人を拉致した問題も解決されていません。(P277) 【写真】北朝鮮から帰国した拉致被害者 2002年の日朝首脳会談で、北朝鮮は日本人拉致の事実を認めて謝罪し、まもなく被害者のうち５名の帰国が実現しました。しかし、いまだに行方のわからない被害者もいるなど、問題は解決されておらず、日本と北朝鮮の国交正常化の動きも進んでいません。(P277)
帝 国	「東アジア諸国と日本」 【本文】韓国との分断が依然在り続く北朝鮮とは、日本人の拉致問題が未解決のままで、…(P301) 【写真】拉致被害者の帰国 北朝鮮によって日本から拉致された被害者のうち５名が、2002年、24年ぶりに帰国しました。そのほかの被害者のさらなる情報開示・帰国が求められています。(P301)
山 川	「現在の日本の課題」 【本文】北朝鮮の…日本人拉致問題をはじめ、…解決すべき問題は多く残っている。(P281) 【用語解説】日本人拉致問題 1970年代から80年代にかけて、北朝鮮の工作員によって日本人が連れ去られた問題。2002（平成14）年に北朝鮮は拉致を認め、五人の被害者が帰国した。しかし、多くの被害者の行方ははっきりしていない。(P281)
日 文	「韓国・中国との国交正常化」 【注】2002年に初の日朝首脳会談が行われ、国交正常化交渉の再開を含む日朝平壤宣言が発表されました。この会談のなかで、北朝鮮側が日本人を拉致していたことを認めました。(P275) 【写真】北朝鮮から帰国した拉致被害者 消息が明らかでない拉致被害者が多いほか、帰国を待ち望む家族の高齢化が進むなど、一刻も早い解決が求められています。(P275) 「グローバルな課題と日本の役割」 【本文】北朝鮮による拉致問題の解決…に向けて、関係各国と協調しながら外交努力を続けています。(P284)
自由社	「朝鮮半島と日本」 【本文】北朝鮮はまた1970年代から日本人を自国に拉致し、体制強化に利用しました（日本人拉致）。(P279) 【コラム】北朝鮮による日本人拉致 1970年代から80年代にかけて、日本人が忽然と姿を消して行方不明になる事件が相次ぎました。新潟県では1977（昭和52）年、中学生の横田めぐみさんが帰宅途中に誘拐されました。1987（昭和62）年に大韓航空機爆破事件で逮捕された北朝鮮の工作員（スパイ）の女性は「拉致された（めぐみさんとは別の）女性に日本語を教わった」と証言し、真実が明るみに出ました。北朝鮮は拉致を否定してきましたが、2002年9月17日の日朝首脳会談で、北の指導者・金正日はついに拉致を認め、５人の被害者が日本に帰国しました。しかし、いまだに、北朝鮮に拉致された可能性のある人が800人以上おり、拉致問題は解決していません。(P279) 【写真】北朝鮮に拉致された人たちの帰国（P279）
育鵬社	「近隣諸国との関係」 【本文】北朝鮮は、多くの日本人を連れ去る事件を起こしています（北朝鮮による日本人拉致問題）。2002（平成14）年の日朝首脳会談で初めて北朝鮮が事実を認め、被害者のうち５人の帰国が実現しましたが、ほかの被害者の救出は、進んでいません。(P269) 【写真】北朝鮮に拉致されて帰国した人々 2002（平成14）年9月、訪朝した小泉純一郎首相に対し、北朝鮮は、日本人を拉致した事実を認めた。その後、拉致被害者の一部は帰国したものの、今なお拉致された多数の日本人の消息が不明であり、問題は解決していない。(P269)
学び舎	記載なし
令 書	「緊張する東アジア情勢」 【本文】我が国は北朝鮮との間に拉致問題を抱えています。昭和四十年代から五十年代にかけて、多くの日本人が北朝鮮に拉致され、行方不明になりました。政府は現在一七名を拉致被害者と認定していますが、その可能性がある人は多数にのぼります。小泉純一郎首相は平成十四年（二〇〇二）、北朝鮮の指導者である金正日と平壤で会談し、北朝鮮は日本人拉致を認めて、五人の被害者の帰国が実現しました。この際に日朝平壤宣言が調印され、拉致問題の再発防止が明記されましたが、他の被害者については納得のいく説明がないまま現在に至り、六人目以降はまだ帰国できていません。現在、両国間に国交はありませんが、拉致問題の解決なく日朝国交正常化はありえないというのが日本政府の見解です。(P443～P444)

発行者	防災や自然災害時における関係機関 （国・地方公共団体・自衛隊）の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
東 書	記載なし	【本文】 ・2011年の東日本大震災は、福島第一原子力発電所の事故を引き起こしました。（P265） 【コラム】 ・2011（平成23）年、東日本大震災が発生し、福島第一原子力発電所で事故が起こりました。（P267） ・2011年3月11日の東日本大震災では、岩手県・宮城県・福島県・茨城県などの広い範囲で大きな被害が出ました。（P268） 【写真】 ・東日本大震災 宮城県沖でマグニチュード9.0の大震災が発生し、津波などで死者・行方不明者は1万8000人以上に上りました。（P265）	【本文】 ・18世紀後半に起こった天明のききんは、浅間山の大噴火が発生したことも影響し、全国に広がりました。（P132） ・1995年に阪神・淡路大震災が発生し、深刻な被害をもたらしました。（P264） 【コラム】 ・関東大震災 1923年9月1日、東京・横浜（神奈川県）を中心にマグニチュード7.9の大地震がおそい、これらの地域は壊滅状態になりました。被害は、全壊約11万戸、全焼約21万戸、死者・行方不明者約10万5000人に達しました。混乱の中で、「朝鮮人や社会主義者が井戸に毒を入れた。暴動を起こす。」といった流言が広がり、多くの朝鮮人、中国人や社会主義者などが殺されました。一方で、復興の中では不燃耐震化で鉄筋コンクリートの建物が多く造られ、東京や横浜は近代的な都市に変わりました。（P217） ・「稲むらの火」 1854（安政元）年11月4日（新暦では12月23日）に起こった安政東海地震は、駿河湾から遠州灘沖を震源とする海底地震で、マグニチュードは8.4、東海地方を中心に甚大な津波被害をあたえました。安政東海地震から32時間後には、紀伊半島から四国沖を震源とする安政南海地震も発生しました。（P268） ・「此処より下に家を建てるな」 岩手県の三陸地方は、1896（明治29）年と1933（昭和8）年の三陸沖地震による大津波、…など、津波の被害を何度も体験した地域です。（P268） 【年表】 ・日本の震災の歴史（P268） 【資料】 ・浅間山の大噴火 浅間山は、1783年に大爆発を起こしました。火山灰が太陽光をさえぎったため冷害となり、天明のききんの一因になったといわれています。（P133） 【写真】 ・関東大震災後の浅草（P217） ・阪神・淡路大震災 マグニチュード7.3の大地震が兵庫県南部で発生し、6400人以上が亡くなりました。（P264）
教 出	【コラム】 ・関東大震災と後藤新平 人々が途方に暮れるなか、復興計画にいち早く取り組んだのが後藤新平でした。後藤は、東京を元に戻す「復旧」ではなく、新たにによりよい都市づくりをする、東京の「復興」をしようと考えます。内閣内務大臣と帝都復興院総裁を兼任し、復興の基本計画を早期に発表することで人々に希望を与えるとともに、焼けた土地を買い上げて広く大きな道路や公園をつくるなど、防災・防火に優れた都市づくりを目指しました。その後、歳入が減少するなかで復興院の予算は大幅に削減され、後藤は復興計画の途中で内閣を去ることとなりました。しかし、学校や公園などそれぞれの場所の復興を担った技術者たちによって、後藤の立てた計画に基づく復興事業は実行されました。関東大震災後の復興事業は、その後、阪神・淡路大震災後の復興事業でも参考にされるなど、災害復興の都市計画のモデルとなりました。（P236） 【資料】 ・後藤新平が考えた復興のための4原則（P236） 【写真】 ・復興事業で建設された常盤小学校（P236） ・被災地で救援活動を行う自衛隊員や他県から駆けつけた警察職員（P278）	【本文】 ・2011年3月の東日本大震災は、地震と津波により、死者・行方不明者が2万2000人以上という戦後最大の被害をもたらしました。（P278～P279） 【コラム】 ・先人が伝える地震の記録 岩手県三陸地方では、1896年（明治29）年と1933年（昭和8）年に、三陸沖地震とそれによる津波の被害を受けました。宮古市の重茂半島の姉吉では、1933年の地震の後、海拔50mの地点に石碑が建てられました。2011年の東日本大震災の際、津波は石碑より奥には到達しませんでした。（P236） 【写真】 ・東日本大震災の被災地につくられた復興祈念公園 津波によるがれきが撤去され、防潮堤の建設や、土地のかさ上げ造成工事が進められました。（P278）	【本文】 ・浅間山の噴火や天明の飢饉が起こって、百姓一揆や打ちこわしが急増（P132） ・1995年1月、阪神・淡路大震災が発生し、死者6400人をこえる大きな被害をもたらしました。（P278） ・熊本・大分や北海道など各地で大きな地震が起こり、西日本を中心とした集中豪雨も発生するなど、自然災害が繰り返され、地域の復興と今後の災害対策が急がれています。（P279） 【コラム】 ・関東大震災 1923年9月1日、関東地方を大地震が襲い、東京・横浜をはじめ、関東一円は地震と火災による大きな被害を受けました。被災した家屋は約37万戸、死者・行方不明者は10万人以上に達しました。（P223） ・先人が伝える地震の記憶 安政南海地震は、1854（安政元）年12月24日、中部から九州地方に及ぶ地域に、大きな被害をもたらしました。…岩手県三陸地方では、1896（明治29）年と1933（昭和8）年に、三陸沖地震とそれによる津波の被害を受けました。（P236） ・関東大震災と後藤新平 1923（大正12）年9月1日午前11時58分、マグニチュード7.9の大地震が関東地方を襲いました。地震と火災により東京・神奈川をはじめ関東一円は大きな被害を受けました。被災した家屋は約37万戸、焼け出された市民は約340万人とされ、死者・行方不明者は10万人以上に達しました。（P236） 【年表】 ・鎌倉時代の新しい仏教と社会の様子（P71） 【資料】 ・浅間山の噴火 1783年の噴火では、多くの犠牲者を出しました。（P132） 【写真】 ・地震を報じる江戸時代の瓦版（巻頭2） ・関東大震災直後の東京・日比谷（P223） ・安政南海地震を伝える石碑に墨を入れる人たち（P236） ・三陸沖地震を伝える石碑（P236）

発行者	防災や自然災害時における関係機関 （国・地方公共団体・自衛隊）の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
帝 国	【コラム】 ・大都市を襲った関東大震災 大震災後に後藤新平らを中心に復興計画が立てられ、道路を広くし、避難用の公園を設けるなど、計画的なまちづくりが進められました。（P245） ・1938（昭和13）年7月上旬に、3日間に及ぶ集中豪雨があり、六甲山から神戸市街地に注ぐ複数の河川が氾濫しました。土砂災害も多発し、道路や橋、線路なども破壊され、多くの犠牲者と被災家屋が出ました。この経験を踏まえ、治山と治水を一体化した復興計画がつけられ、山への植林に加えて、土石流を食い止める砂防堰堤（砂防ダム）の建設、河川改修などの総合的な防災対策が行われることになりました。その後も大きな水害がありました（巻末2） 【写真】 ・震災後に隅田川に架けられた橋 震災後の復興事業として、墨田川には耐震性の高い鉄橋が建設されました。鉄橋はそれぞれが特徴的なデザインとなっています。（P245） ・後藤新平 岩手県出身の官僚で、南満州鉄道会社総裁を務めました。満州経営の経験を生かし、震災後の復興事業に取り組みました。（P245） ・六甲道南公園 公園内に貯水槽や仮設トイレなどを配備している防災公園として整備されました。また区役所が隣接しているため、災害時の活動拠点となる役割も担っています。（巻末2） ・住民と神戸市消防局による消火活動訓練 「神戸市防災福祉コミュニティ」は、地域の自治会や事業所などで組織されています。地域の防災活動や福祉活動の連携を通じて、近所での助け合いの精神や顔の見える関係を築き、いざという時にも活動できる組織作りを目指しています。（巻末2）	【コラム】 ・現代社会の見直しを迫った東日本大震災 2011年3月11日、東北地方の太平洋沖を震源とする、日本の観測史上最大の地震が起きました。地震のあと、東北地方を中心に津波が襲い、死者・行方不明者は合わせて1万8千人以上という大きな被害が出ました。多くの人が家を失い、街全体に大きな被害を受けた地域もありました。（P303） 【写真】 ・東日本大震災の記憶を伝えるための石碑 震災の時に小学6年生だった子どもたちが中心となり、震災の記憶を千年後に伝えるために「女川いのちの石碑」を町の各所に建てました。（P303）	【本文】 ・幕府の財政は、…富士山の噴火などにより、元禄期を境に悪化していきました。（P146） ・1995年に起こった阪神・淡路大震災では、たくさんのボランティアが活動し、その活動の重要性を認識する契機となりました。（P303） 【コラム】 ・エジプトはナイルの賜物 古代エジプトの人々は、ナイル川の観察から、1年を、氾濫が起きやすい洪水期（6月～9月）、土地が現れ種をまく流出期（10月～2月）、作物を収穫する乾燥期（3月～5月）の三つの季節に分けて生活を営んでいました。人々は、氾濫に備え堤防を築き、また、ため池をつくり運河を通じて水を引き、耕地を潤しました。（P19） ・自然災害と神話 『古事記』や『日本書紀』に書かれた出雲西部を舞台とするヤマタノオロチ伝説は、頻発した土石流などの洪水や水害が背景にあると考えられます。保水力が著しく低下した山地に豪雨が降れば、土壌は大量の水を含み巨大な岩石をも巻き込んで、周囲を削りとりながら流れ落ちていきます。出雲の斐伊川はたびたび洪水を起こして、民を苦しめていました。いくつもの筋に分かれて下る土石流は、人々に八つの頭と八つの尾をもった巨大な大蛇にたとえられたと考えられます。また、物語のなかで生贄にされそうになったクシナダヒメ（奇稻田姫）は、洪水により被害にあった「稲田」を象徴するとも考えられます。このような神話は、現在でも神事や神楽などに受け継がれています。（P49） ・鴨長明がみた自然災害 12世紀末の京都では大火や竜巻、飢きん、地震が相次ぎ、餓死者は2か月間に4万2千人余りにものぼりました。（P73） ・自然を生かした信玄堤 甲斐（山梨県）の武田信玄は川の氾濫を防ぐため、堤防で直接せき止めるのではなく、流路を変え岩にぶつけて勢いを弱め、切れ目のある堤防で少しずつ水を逃がしました。このしくみで甲府盆地での洪水の被害は大きく減り、新田開発が盛んに行われました。（P97） ・利根川のつけ替え工事 江戸時代初期、利根川は荒川と合流して江戸湾に注ぎ、江戸やその周辺でたびたび洪水を起こしました。（P138） ・森林伐採と植林 森林の急激な伐採が行われた地域では、頻繁に土砂災害が起こるようになりました。（P139） ・稲むらの火 幕末には、日本各地で大地震が起きました。1854年の安政南海大地震のとき、紀州広村（現在の和歌山県広川町）の商人濱口梧陵は、知識や経験から、地震による津波に襲われながらも、稲の束（稲むら）に火をつけて村人を避難させ、被害を最小限に抑えました。その後も彼は、堤防の建設など地域の防災に取り組みしました。（P179） ・阪神・淡路大震災（1995年）～「ボランティア元年」 1995年1月に発生した阪神・淡路大震災は、マグニチュード7.3の巨大地震によって多くの死者・行方不明者を出しました。（巻末2） 【地図】 ・利根川の流路の変遷（P138） 【資料】 ・『方丈記』（P73） 【図】 ・信玄堤 堤防は江戸時代にかけてしだいにつくられました。（P97） 【写真】 ・満濃池 空海は洪水で決壊した満濃池を修築するなど、社会事業にも尽力しました。（P58） ・現在も残る富士山の宝永火口 1707（宝永4）年、大地震から間もなくして富士山は大噴火し、火山灰は江戸まで届きました。厳しい財政状況であった幕府は、全国の村から均等に復興資金を調達しました。（P146） ・地震で倒壊した銀座の市街地（P245） ・震災後につくられた銀座の大通り（P245）
山 川	【写真】 ・関東大震災の被害の様子 震災後の復興事業を通じて東京や横浜は近代的な都市へと生まれ変わっていった。（P227）	【本文】 ・2011（平成23）年の東日本大震災など、全国各地で起こった大地震により多くの人々の命が失われた。災害の多い日本では、災害への対策が強く求められている。一方、東日本大震災に際して起こった原子力発電所事故以降、電力のエネルギー源のあり方が課題となっている。（P281） 【写真】 ・東日本大震災での津波の様子 警察庁の統計では東日本大震災による死者は1万5900人による（2023年2月末現在）。津波などによって福島第一原子力発電所では事故が起こり、廃炉に向けて作業が進められている。（P281）	【本文】 ・1782（天明2）年から東日本で数年にわたり続いた冷害や、浅間山（群馬県・長野県）噴火による影響で関東地方は大凶作となり、米価は高騰し、多くの餓死者が出た（天明の飢饉）。（P138） ・1923（大正12）年9月1日、関東地方で大地震が発生し、東京・横浜（神奈川県）などの大都市が被害を受けて壊滅的な状況におちいった（関東大震災）。死者・行方不明者は10万人以上を数えた。（P227） ・1995（平成7）年の阪神・淡路大震災、…全国各地で起こった大地震により多くの人々の命が失われた。災害の多い日本では、災害への対策が強く求められている。（P281） 【写真】 ・阪神・淡路大震災 阪神・淡路大震災の死者は6400人をこえたが、その中には圧死者が多かった。（P280）

発行者	防災や自然災害時における関係機関 （国・地方公共団体・自衛隊）の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
日 文	【コラム】 ・関東大震災 震災復興事業により、東京や横浜は都市計画に基づいて整備され、町の景観も大きく変わりました。(P231)	【本文】 ・2011年に起きた東日本大震災の際には、地震と津波による巨大な被害が生じたほか、福島第一原子力発電所でメルトダウン（炉心溶融）するという重大事故も起こりました。(P283) 【コラム】 ・ 私たちにできること－震災の教訓を未来に伝える－ 宮城県女川町は東日本大震災によって、死者・行方不明者が800人をこえるなど、甚大な被害を出しました。その女川町に、「千年後の命を守るために」自分たちに何ができるかを考え、活動した中学生がいます。2011年に入学した生徒が、震災の記録を残す活動の一つとして、町内に21か所ある浜の津波到達地点に石碑を建てる計画を進め、2013年11月に最初の石碑を完成させました。石碑には、これから生まれてくる人たちに、自分たちと同じ苦しみや悲しみを経験してほしい、という思いから、大地震が来たらこの碑より高いところににげることに、にげない人がいたら無理にでも連れ出すことなどの、生徒が考えたメッセージが刻まれています。過去の災害に学ぶとともに、自分たちの経験を教訓として、未来の世代に積極的に伝えようとする若い世代が育っています。(P283) 【写真】 ・東日本大震災の津波 強い地震と巨大な津波による被害は、北海道から関東地方にまでおよびました。(P283) ・震災直後の福島第一原子力発電所 1・3・4号機で水素爆発が起こりました。写真は、3号機が爆発しているようすです。現在、原子炉を廃止する作業が進められています。(P283) ・女川いのちの石碑 宮城県内の石材店の協力や募金によって実現した石碑です。(P283)	【本文】 ・東京の下町は、1923(大正12)年9月の関東大震災によって、大きな被害を受けました。(P231) ・1995年の阪神・淡路大震災では、大地震にもたえるはずの高速道路が崩壊して、「安全神話」がくずれたといわれました(P283) 【コラム】 ・天明のききんと復興 1780年代に冷害にみまわれた東日本をおそったのは、浅間山の噴火でした。周辺地域に大きな被害をあたえただけでなく、広い地域に火山灰が降り、冷害がさらに悪化し、大凶作となりました。これにより、ぼう大な数の餓死者が出ました。(P143) ・洪水対策 自分の力で領国を治めた戦国大名は、領民の生活を守るとともに、安定した年貢の確保をめざして、農業などを盛んにし、治水事業に力を注ぎました。(P294) ・関東大震災 1923年9月1日、関東大震災が起こり、東京や横浜は壊滅状態となりました。被災者は約340万人、死者・行方不明者は10万人をこえました。(P231) ・地震津波対策 江戸時代末の1854年11月5日、大地震が発生し、現在の和歌山県広川町も津波におそわれました。津波を察知した浜口梧陵は、田の稲むらに火を放ちました。広村の人々は、暗闇のなか、この明かりをたよりに高台の神社に避難しました。(P295) 【年表】 ・鎌倉仏教と時代背景 (P81) 【資料】 ・『方丈記』に書かれた大地震 (P78) ・浅間山の大噴火 (P143) 【写真】 ・関東大震災のようす (P231) ・阪神・淡路大震災でたおれた高速道路 (P283) ・信玄堤 甲斐国（山梨県）を治めた戦国大名の武田信玄が、16世紀なかばに築いた堤防で、今に残されています。(P294)

発行者	防災や自然災害時における関係機関 （国・地方公共団体・自衛隊）の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
自由社	【本文】 ・関東大震災の結果、日本の経済は大きな打撃を受けましたが、地震の多い日本で近代都市をつくるために得た教訓は多く、耐震設計や都市防災の研究が始まりました。（P221） ・平成時代30年間の歴代の政権は災害からの復興につめて、全国に高潮を防ぐ防潮堤を整備するなど、災害に強い強靱な国土づくりを進めました。（P277） 【コラム】 ・後藤新平の東京復興 後藤新平（1857～1929）岩手県出身。東京市長を経て1923年に帝都復興総裁となり、関東大震災後の東京復興のため、大胆な都市計画を立案し、その推進につとめました。（P221） 【写真】 ・都心の被災状況 東京都心は壊滅的な打撃を受けましたが、その後、世界最大規模の帝都復興計画が練られました。今日の主要な幹線道路は、このときに設計したものです。（P221）	【本文】 ・2011（平成23）年3月11日には、東北地方でマグニチュード9.0の巨大地震が発生し、想像を絶する大津波が、東北から関東にかけての太平洋岸をのみこみました（東日本大震災）。2万人近くが犠牲となり、原子力発電所の震災に伴う事故で、多くの人が避難生活を強いられました。（P277） 【コラム】 ・世界から絶賛された冷静沈着さ 2011（平成23）年3月11日の東日本大震災は、深刻な被害をもたらしました。そのいっぽう、被災者の冷静沈着な行動は、外国の人々の感嘆と称賛的となりました。アメリカの新聞ニューヨーク・タイムズは「日本人がこうした状況下で、米国のように略奪や暴動を起こさず相互に助け合うことは全世界でも少ない独特の国民性であり、社会の強固さだ」と評しました。韓国のメディアも被災地の住民たちが「お先にどうぞ」「いえ、私は大丈夫です」と声を掛け合っており、譲り合いの精神を忘れずに対応し、怒りが飛び交うこともなかった、と称賛する現地ルポを伝えました。（P282） ・自己犠牲の精神が命を救う 宮城県南三陸町の職員で危機管理課に勤めていた遠藤未希さん（24歳）は、巨大津波が迫る中、防災無線で「6m強の波があります。早く逃げてください」と住民に避難を呼びかけつづけ、みずからは津波にのみ込まれて亡くなりました。遠藤さんの母親をふくむ多くの住民が、彼女のよびかけによって命を救われました。災害出動した自衛隊員や警察官の献身的な活動はたつきも特筆すべきものでした。天皇陛下（現上皇陛下）は、地震発生の日後に国民へのメッセージを出され、次のように述べられました。「自衛隊、警察、消防、海上保安庁をはじめとする国や地方自治体の人々、救援のために諸外国から来日した人々、国内の様々な救援組織に属する人々が、余震のつづく危険な状況の中で、日夜救援活動を進めている努力に感謝し、その労を深くねぎらいたく思います」（P282） ・歴史に育まれた日本文化の特質 「日本社会に根づく義務感、逆境での品位、謙虚さ、寛容、勇気」（スペイン）、「無私の心と不動の献身」（アメリカ）、「武士道精神」（台湾）など、世界の人々は日本人の国民性と資質を高く評価しました。こうした国民性は、日本の歴史の中で育まれた文化です。日本人は縄文時代以来、豊かな自然の恵みのもとで、温和な性格を備え、和を大切にし、助け合いと支え合いの文化をつくりあげてきたといわれています。こうした歴史の蓄積を失わずに受けついでいくことを、私たちは心に誓いたいものです。（P282） 【写真】 ・東日本大震災 日本周辺で観測史上最大の地震。震源域は三陸沖の南北500km、東西200kmに及ぶ巨大なものでした。地震の後に押し寄せた大津波は人と家屋をのみ込み、大きな船をも押し流しました。（P277） ・遠藤未希さんの自己犠牲を報じた新聞記事（「河北新報」2011年4月12日）と、津波被害を受けた直後の南三陸町防災庁舎（P282）	【本文】 ・奈良時代には、…災害がおこりました。（P56） ・平安初期には地震・干ばつ・飢饉が起き、…。 （P60） ・地方では天災がたてつづけにおこりました。（P61） ・1923（大正12）年9月1日、関東地方で大地震がおこりました。東京や横浜など各地で発生した火災で、多数の民家や、重要な建造物、文化施設などが消失し、死者・行方不明者は10万5000人に達しました（関東大震災）。（P221） ・平成になってからの日本列島は2回、歴史的な大地震にみまわれました。1995（平成7）年1月17日早朝、関西地方を襲った阪神・淡路大震災では、各所で火災が発生し、6千人以上の人が亡くなりました。（P277） ・日本は戦後も、台風や大雨、豪雪、火山の爆発などさまざまな自然災害の被害を受けました。1959（昭和34）年9月の伊勢湾台風では、愛知県を中心に高潮などにより死者・行方不明が5098人に上りました。（P277） 【コラム】 ・大名たちの治水 一瞬にして田畑から収穫物をうばってしまう暴れ川を治めること（治水）は、古代から統治者たちにとって欠かせない仕事でした。戦国大名たちにとってもそうであって、信玄堤だけでなく伊達政宗の貞山堀（宮城県）、北条氏房の荒川堰（埼玉県）などが知られ、遺跡が今も残っています。また平成19年には、京都府宇治市の宇治川右岸で、豊臣秀吉が築いたとされる太閤堤の遺跡が発見されました。琵琶湖から流れる宇治川はかつて京都の南部でしばしば洪水を起こしましたが、京都に伏見城を造った秀吉は宇治川を東寄りにつけかえて洪水を防ごうとしました。そのときの遺跡が太閤堤です。（P93） 【資料】 ・信玄堤 釜無川と御勅使川の洪水から甲府盆地の平野部を守る施設の一つが信玄堤です。先人の水との戦いの歴史がわかります。（P93） 【表】 ・戦後日本を襲った主な自然災害（P277）

発行者	防災や自然災害時における関係機関 （国・地方公共団体・自衛隊）の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
育鵬社	【コラム】 ・関東大震災 震災後の東京は、後藤新平らによって新たな都市計画が進められました。（P221）	【本文】 ・2011（平成23）年に東日本大震災が起こり、死者・行方不明者は、2万人近くに達しました。被災地の人たちの公共心ががん強さ、責任感などは、世界から大きくたたえられました。一方、津波などによって起きた福島県の原子力発電所の事故で放射性物質がもれ出したため、これからの日本のエネルギー政策をどうすべきかが議論されています。（P270） 【地図】 福島県の避難指示区域 東日本大震災にともなう東京電力福島第1原発事故で福島県内に設定されました。（P270） 【写真】 ・東日本大震災 震災による津波は、宮城県、岩手県、福島県の沿岸部などに大きな被害をあたえた。上は、宮城県名取市の住宅におし寄せる大津波。右は、避難所生活の中で、協力して食事を作る宮城県石巻市の人々の様子。（P270） ・被災地ご訪問 天皇、皇后時代に東日本大震災の被災地を訪問される上皇、上皇后両陛下。（P272）	【本文】 ・1783（天明3）年、浅間山の噴火や天候不順による冷害で、多数の餓死者を出す天明のききんが起こりました。（P132） 【コラム】 ・関東大震災 1923（大正12）年9月1日、関東地方で発生した大地震は、東京・横浜という人口密集地を直撃しました（関東大震災）。この地震は、死者・行方不明者10万数千人、焼失家屋約45万戸という大被害をもたらしました。（P221） ・古代から書き残されてきた震災 2011（平成23）年3月11日に東日本大震災が起きたとき、「千年に一度の大地震」という表現がよく使われました。しかし、本当にそうなのでしょうか。日本の地震の記録を見ていきましょう。日本の地震の被害についての最も古い文書記録は、『日本書紀』にある、推古天皇の時代の599年に地震があり建物がすべてくずれたという記述です。その後の歴史書でも、869（貞観11）年に東北地方で起きた貞観地震について、人々は立っていられず多くの家屋が倒れ津波で1000人近くが死んだ、と記されています。また、当時の人々が書いた日記などにも地震の記述は登場します。15世紀末に起きた明応地震では、各地で津波が発生して合計で数万人が死んだことが、人々が書き残したもののから読み取れます。（P274） ・江戸時代をゆさぶった大地震 江戸時代末の安政年間（1854～60）、日本では大地震が多発し、中でも1854年に発生した安政東海地震と安政南海地震は、震源の異なる2つの大地震が2日連続で起きる、という異例のものでした。この地震で房総半島から四国・九州までの太平洋側が大津波に襲われ、それぞれ数千の死者を出しました。その翌年にも江戸を中心に大地震が発生し、家屋倒壊や火災により江戸の町民約1万が死んだとされます。安政南海地震の際、大阪では湾内の大船が津波によって水路に流入して川船を多数押しつぶし、川船に避難していた人々が多く亡くなりました。そこで1855年、被害と教訓を伝える石碑が木津川の渡し場に建てられました。また、紀伊藩広村（和歌山県広川町）では、地震直後の夕間に海から寄せる津波から村人が逃げまどうなか、豪商の濱口梧陵が田んぼに積まれた稲わらの山（稲むら）に火をつけ、村人を高台へと誘導しました。地震後も濱口は、復興や防災工事に私財を投じて尽力し、彼の逸話は、のちに「稲むらの火」の名で広く世に知られました。その後、江戸では「ナマズが地震を起こす」という考えのもとに描かれた「鯰絵」が流行しました。鯰絵は、ナマズがこらしめられているものが多く、当時の江戸庶民の地震に対する思いがえがれています。また同時に、社会に対する風刺や不満、願望なども絵にはこめられていました。（P274～P275） ・近代においても発生した大きな被害 明治時代以降も大地震は、たびたび起こりました。1896（明治29）年の明治三陸地震では、東北の三陸沖で発生した地震による大津波が岩手県・宮城県などの沿岸部を襲い、死者は、2万人以上にのぼりました。この地域は、1933（昭和8）年の昭和三陸地震でも大津波に襲われ、3000人以上の死者・行方不明者を出しました。1923（大正12）年9月に発生した関東大震災では、10万人以上もの死者・行方不明者を出し、その約9割が地震後の火災によるものでした。そのため、震災後は、耐震耐火建築が普及するようになり、東京復興計画でも避難場所としての公園建設など、地震対策が意識されました。（P275） ・未来に伝えたい震災の記憶と教訓 1995（平成7）年の阪神・淡路大震災では、早朝の地震だったために就寝中の被災が多く、家屋倒壊などで6000人以上が亡くなりました。また、救助が必要な人も多数発生し、迅速な救助活動の重要性が強く唱えられました。一方、東日本大震災で大きな被害をもたらしたのは、波の高さ十数m以上の大津波でした。死者・行方不明者の9割以上が津波によるものとされています。その中でも過去の教訓や伝承をふまえて難を逃れた人々もいました。岩手県宮古市にある地区には、過去の三陸地震津波を教訓に建てられた「こより下に家を建てるな」と刻まれた石碑があり、この地区の集落は高台にあって津波の被害を受けませんでした。また、三陸地方に伝わる「てんでんこ（津波のときには各自で逃げる）」という言葉を防災標語としていた岩手県釜石市では、避難できた人々が数多くいました。このように日本は、古代から数々の大地震に見舞われてきました。このことから、日本には、地震にまつわる伝承や教訓、逸話が数多く残されています。こうした伝承や教訓を受け継いで生かし、後世に伝えていくことが、私たちの役目でもあります。（P275） 【年表】 ・日本で発生した主な大地震（P274） 【写真】 ・関東大震災 写真は、発生直後の東京・日比谷交差点。発生が正午直前で、多くの家が火を使う時間帯だったため、あちこちで火災が発生して燃え広がった。（P221） ・大地震両川口津浪記石碑 安政南海地震での教訓を伝える石碑。文字の墨入れが毎年行われている。（P274） ・三陸地震の津波被害とその教訓を伝える石碑（P275） 【資料】 ・鯰絵 庶民たちが大ナマズをのしりながらたたいている。一方、左上の大工職人たちは、地震の復興工事で利益を得たことから人々を止めようとしている。こうした地震とナマズを結びつける考えは、江戸時代前からあった。豊臣秀吉が家臣に送った「伏見の普請、鯰大事にて候（伏見城の築城では地震対策が重要だ）」という手紙は、それが文章で表された最も古い例とされている。（P275） ・自然災害伝承碑の地図記号 過去に発生した自然災害の様子や被害の状況などが記載された石碑やモニュメントを自然災害伝承碑と定め、2019年3月15日に国土地理院で制定された。（P275）

発行者	防災や自然災害時における関係機関 （国・地方公共団体・自衛隊）の役割等の扱い	東日本大震災の扱い	その他の自然災害の扱い
学び舎	記載なし	【本文】 ・岩手県大槌町には、「大きな地震が来たら戻らず高台へ」と書きこまれた木碑（木柱）があります。2011年3月11日、午後2時46分。三陸沖でマグニチュード9.0の大地震が起きました。最大震度7の揺れと国内観測史上最大の津波により、東北・関東地方を中心に広い範囲で被害が出ました（東日本大震災）。この町でも震災で1200人余りが犠牲になりました。町には、昭和三陸津波（1933年）の教訓が刻まれた石碑がたくさんありました。しかし、2011年の震災当時中学生だった少年が高校生になったときに、木碑を建てることを思いつきました。少年は住民と話し合い、あえて朽ちる木を使い、建て替えるたびに震災を思い出してもらおうと、4年に1度の建て替えをするにしました。この大地震は、福島県の沿岸部も襲いました。双葉町と大熊町にまたがる東京電力福島第一原子力発電所では、高さ14mの津波が堤防を乗り越え、敷地内に大量の海水が流れ込みました。（P274） 【注】 ・東日本大震災による世界の製造業への影響 ●フォード（米）：塗料の不足で車体が黒、赤の新車の販売を中断 ●ゼネラル・モーターズ（米）：部品不足でトラック生産を一時停止 ●ルノー・サムスン自動車（韓国）：部品不足から減産 ●日系自動車メーカーの中国工場：部品調達に滞り減産（P275） 【写真】 ・東日本大震災 津波が到達した時刻で止まった学校の時計。（P292）	【本文】 ・5世紀から6世紀にかけて、群馬県の榛名山は、噴火をくり返しました。火山灰が、築かれたばかりの古墳の上にも積もりました。ムラや水田は、ふり積もった軽石でうまりました。（P32） ・734年には、大地震が大和や河内（大阪府）をおそいました。（P41） ・天明のききんや浅間山の噴火にもみまわれ、百姓一揆・打ちこわしなどがたびたび起こるようになりました。（P119） 【コラム】 ・関東大震災－いわれなく殺された人びと－ 1923年9月1日、マグニチュード7.9の大地震が関東地方を襲った。建物がぐずれ、強風を巻き起こす火災が発生して、死者・行方不明者は10万5000人にのぼった。東京市や横浜市では、多数の家屋が被災し、多くの避難民が出た。（P207） 【絵】 ・関東大震災（P207） 【写真】 ・阪神淡路大震災（P292） ・熊本地震（P292）
令 書	記載なし	【本文】 ・平成二十三年（二〇一一）には東日本大震災が起きました。東日本大震災では、関東から東北にかけて巨大津波が襲ったため、死者・行方不明者は二万人近くになりました。（P446） 【コラム】 ・最期まで途切れなかった避難の呼びかけ 平成二十三年（二〇一一）三月十一日午後二時四十六分に発生した東日本大震災で、最期まで職務を全うして多くの住民の命を助けた一人の女性がいました。宮城県南三陸町の防災対策庁舎二階にある危機管理課の職員だった遠藤未希さん（当時二十四歳）は、地震が発生すると放送室に駆け込み、防災無線で避難を呼びかけました。「只今、津波が襲来しています。高台へ避難してください！」遠藤さんの声は、約三十分間、大津波が防災対策庁舎にぶつかるその直前まで続きました。後にこの防災無線の全音声が発見されました。津波警報が発令される前から高台への避難を呼びかけ、途中では周囲の「潮が引いている」という言葉に反応して「只今、海面に変化が見られます」と臨機応変に対応しています。そして「予想されます」から「来襲しています」に、また津波の大きさも「六メートル」から「一〇メートル」に変更されています。周囲から伝えられる情報を的確に反映し、迫る危機を先回りするように工夫しながら住民に呼びかけていた様子が分かります。そしてこの音声記録には、放送を続けようとする声を遮えざるように「上へ上へがって、未希ちゃん、上がって」という周囲からの掛け声があり、遠藤さんの「一〇メートル以上の津波が……」という言葉で終わっています。遠藤さんの声は最期まで凜とした響きで、取り乱すところがありませんでした。遠藤さんも庁舎の屋上へ逃げたはずでしたが、津波が去ったあと、屋上に遠藤さんの姿はありませんでした。庁舎は一メートルの高さがありましたが、津波は約一四メートルで、屋上床約二メートルまで達しました。そのため、町職員ら五三名が屋上に避難したものの、屋上のアンテナのポールにしがみついたりした一〇名だけが生還しました。屋上まで津波に呑み込まれた庁舎は、鉄骨しか残りませんでした。遠藤さんの遺体が発見されたのは発災から四十三日目となる四月二十三日でした。南三陸町は町全体が津波で流されましたが、町民約一万七七〇〇人のうち、半数近くが避難して生き残りしました。遠藤さんの緊迫した声を聴いて、迫り来る危機を感じ避難を始めた人も多かったといえます。遠藤さんは、前年の平成二十二年（二〇一〇）に結婚したばかりで、約半年後には結婚式を挙げる予定でした。（P447）	【本文】 ・富士山の噴火などにより幕府の財政は元禄期を境に悪化していきました。（P229） ・大正十二年（一九二三）九月一日、関東大震災が発生しました。人口が密集する東京や横浜を直撃したため、約一九〇万人が被災し、一〇万人以上が死亡・行方不明になりました。戦後になってこの震災のあった九月一日を「防災の日」とすることになります。（P347） ・平成七年（一九九五）には阪神・淡路大震災、…が起きました。（P446）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
東 書	「進展するグローバル化」 【本文】二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を削減するため、国際的な取り決めとして、1997（平成9）年に京都議定書が採択され、2015年にはパリ協定が合意されました。（P264） 【注】京都議定書では先進工業国だけが削減義務を負いましたが、パリ協定によって発展途上国も削減・抑制目標を定めることになりました。いずれも日本は締結しました。（P264） 「持続可能な社会」 【本文】2015年の国連サミットでは、持続可能な開発目標（SDGs）が採択され、2030年までに達成すべきものとして、…クリーンエネルギーの普及…など、17の目標がかかげられました。（P265） 「日本のエネルギーのこれまで」 【コラム】地球温暖化と再生可能エネルギー 1980年代の半ばには、地球温暖化問題が世界的に知られるようになりました。二酸化炭素を多く排出する、石油や石炭を使った火力発電などへの依存を減らすことが重要な課題になり、1997年の京都議定書、2015年のパリ協定と、温室効果ガスの排出削減のための国際的な取り決めが重ねられてきました。（P267）
教 出	「さまざまな危機が続く時代」 【本文】温室効果ガスによる地球温暖化など、さまざまな問題が深刻になっており、国境を越えた対策が急がれています。（P279） 【注】1997年の地球温暖化防止京都会議で採択された「京都議定書」が、日本・EU諸国・ロシアなどを含む141の国と地域で批准され、2005年に発効しました。その後、新たな地球温暖化対策の国際ルールとして、「パリ協定」が2015年に採択され、2016年に発効しました（P279）
帝 国	「イギリスの産業革命」 【コラム】工業の発達と地球温暖化 産業革命以来、石炭などを燃やして生産や生活に必要なエネルギーを得ることが日常的になりました。蒸気機関の誕生は、そのきっかけといえます。その結果、二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスが大気中に増えるようになり、それが現在の地球温暖化の原因となっています。（P166） 「石油危機と日本経済」 【本文】石油以外のエネルギー資源である、太陽、地熱、水素、原子力発電などの開発が進められました。現在の脱炭素社会の実現という観点からも注目されています。（P291） 「グローバル化の進展と私たちへの影響」 【本文】2015（平成27）年に国際社会全体で脱炭素社会を目指すパリ協定が新たに採択され、さらに同年の国連サミットでは持続可能な開発目標（SDGs）が採択されるなど、国際的な取り組みが進められています。地球温暖化対策としては原子力発電が注目されていましたが、日本では2011年の東日本大震災の後は、火力発電の比重が再び増したため、二酸化炭素の排出量が比較的小さい液化天然ガス（LNG）の輸入が増えています。日本政府は2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにすることを目標にしており、私たちも「持続可能な社会」の実現に向けて取り組む必要があります。（P302～P303）
山 川	「現在の日本の課題」 【本文】地球温暖化など環境問題も地域をこえて取り組むべき問題である。（P281）
日 文	「グローバルな課題と日本の役割」 【本文】地球温暖化の防止をはじめとする地球環境問題はもちろんのこと、…「誰一人取り残さない」よりよい世界をめざして、グローバルに取り組むべき課題は山積しています。地球環境問題は、緊急の課題です。これまで公害問題やエネルギー問題に取り組んだ歴史のある日本には、技術や知恵が豊富にあり、それを世界で役立てています。（P284） 「解決をせまられる国内課題」 【本文】クリーンエネルギーの普及…など、国内にも解決すべき課題が数多くあります。（P285） 「公害克服の歴史を調べるー福岡県北九州市ー」 【年表】北九州市の環境問題と対策の歴史（P289）
自由社	記載なし
育鵬社	「グローバル化の進展」 【本文】石炭や石油などの化石エネルギー資源の利用による温室効果ガスの発生は、地球温暖化に影響をあたえています。先進国の温室効果ガス削減率を定めた京都議定書が1997（平成9）年に採択され、2015年のパリ協定で、中国やインド、発展途上国も参加した新しい枠組みが合意されました。（P270）
学び舎	記載なし
令 書	「国際協調と日本の役割」 【本文】平成九年（一九九七）に京都で地球温暖化防止京都会議が開催され、先進国に温室効果ガスの排出削減を定めた京都議定書が採択されました。その後、中国やインドの経済成長で、先進国だけの取り組みでは排出削減が実現困難となり、またパリ協定が採択されるも、アメリカのトランプ大統領が脱退を表明したことで物議を呼びました。他方、温暖化は人間の排出する温室効果ガスが原因ではないという主張もあります。（P445）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
東 書	記載なし
教 出	「平和を築くために」 【本文】障がいのある人々…などを含め、すべての人々の人権を尊重し、生きがいが保障される社会をつくる努力が必要です。（P281） 「ともに生きていくために」 【コラム】点字の始まり 点字が発明されるまでは、文字を触覚で認知する方法として、文字を木や紙に盛り上げた「浮き出し文字」や、紐の結び方で文字を表す「結び文字」などが用いられていました。しかし、これらの文字は、視覚に障がいのある人たちにとって、読み書きするのに苦勞の多いものでした。1784年、フランスのバリーに、世界で初めて、視覚に障がいのある人たちが学ぶ学校（訓盲院）が開設されました。当初は浮き出し文字を用いていましたが、1820年代前半にフランスの軍人シャルル・バルビエが、軍隊の暗号をもとに、文字を縦６点・横２列の点で表す「１２点式点字」を考案してから、点字を用いるようになりました。訓盲院の生徒だった16歳のルイ・ブライユは、複雑だったバルビエの点字を改良して、縦３点・横２列の点で表す「６点式点字」を考案し、1825年に完成させました。読み書きしやすいブライユの点字は、次第に欧米諸国に広まり、日本でも、1880年代の後半に訓盲啞院（東京盲啞学校、現在の筑波大学付属視覚特別支援学校）で初めて用いられました。それを日本語に合うように翻案したのが、同校で教員をしていた石川倉次です。石川は、研究を重ねて日本語の点字を考案し、1890（明治23）年11月１日、校内の点字選定会でその採用が決まりました。これを記念して、11月１日は「日本点字制定の日」とされています。石川の点字は、改良が加えられたのち、1901年に「日本訓盲点字」として官報に公示され、日本語の点字として公認されました。その形や配列は現在も継承されています。点字を打つ点字器やタイプライターを開発して普及に努めた石川は、「日本点字の父」ともいわれています。（P283） 【資料】ブライユのローマ字点字と、石川の日本語点字（P283）
帝 国	「日本の政治・社会の今とこれから」 【本文】日本や世界では、…例えばバリアフリー化のような設備面の改善だけでなく、関連する法律や制度の整備も進められています。（P301） 【写真】国会に車椅子で初登院した議員 2019年の参議院議員選挙では、車椅子を使う議員３名が初当選しました。車椅子用の議席が設置されるなど、国会議事堂の一部でのバリアフリー化が進められました。（P300）
山 川	記載なし
日 文	「解決をせまられる国内課題」 【本文】障がいのある人…など、学校や職場、地域、家庭など社会の各所で弱い立場におかれ、苦しんでいる人を救わなければなりません。（P285）
自由社	記載なし
育鵬社	記載なし
学び舎	「娘のために訴えを起こした飴屋兵助」 女性の視覚障がい者は、三味線の弾き語りをする瞽女となり、その報酬で生活する人たちがいた。瞽女は村々を旅して弾き語りを披露し、人びとの娯楽として歓迎された。（P123）
令 書	記載なし

発行者	「教材名」	【掲載方法】	記述の概要（掲載ページ）
東 書	「戦後日本の歩みを考えよう」 【写真】東京オリンピック・パラリンピック（P244） 「国民生活の変化と公害」 【本文】1964年には東京オリンピック・パラリンピックが開かれました。（P256） 【写真】1964年の東京オリンピックの開会式（P256） 「変化する冷戦後の日本」 【写真】東京オリンピック・パラリンピック（夏季）（P263）		
教 出	「古代ギリシャの文明」 【写真】壺に描かれた短距離走 古代ギリシャでは、4年に一度、各ポリスの代表が陸上競技や格闘技で競い合う祭典（オリンピック）が開かれました。（P28） 「国民国家の成立」 【写真】東京2020オリンピックの開会式（P156） 「日本経済の高度成長」 【本文】1964年に開催された東京オリンピック以後は、輸出の好調に支えられて貿易収支が黒字を続け、1968年の国民総生産（GNP）は、アメリカに次ぎ資本主義世界で第2位になりました。（P268） 【写真】東京オリンピックの開会式（P268） 「ともに生きていくために」 【コラム】オリンピックとパラリンピックの始まり 第1回近代オリンピックは、1896年、ギリシャのアテネで開催されました。フランスのクーベルタンが、古代ギリシャのオリンピア地方で行われていた「オリンピア祭典競技」の復活を提案したのが、その始まりです。その後オリンピックは、人間育成と世界平和を目的として、夏季・冬季大会が4年に一度開催される世界的なスポーツの祭典となりました。パラリンピックは、第二次世界大戦で負傷した兵士のリハビリの一環として、1948年にイギリスの病院で開かれたのが始まりで、1952年に国際大会となりました。その後、障がい者アスリートによる競技スポーツへと発展し、1988年のソウル大会からは、現在のようにオリンピックの直後に同じ場所で開催されるようになりました。（P283） 【写真】オリンピックの開会式で空に描かれた五輪のマーク（P283） 【図】現在のパラリンピックのシンボル（P283）		
帝 国	「高度経済成長と日本経済の国際化」 【本文】1964年に東京オリンピック・パラリンピックが開かれ、それに合わせて各地に高速道路がつくられ、東海道新幹線も開通しました。（P290） 【写真】東京オリンピックの開会式（P290）		
山 川	「ギリシア文明と民主政治の始まり」 【本文】4年に一度開かれるオリンピアの祭典は、ギリシア人最大の祭りで、近代オリンピックの基になった。（P20） 「高度経済成長期の社会と文化」 【本文】1964（昭和39）年には東京オリンピック・パラリンピックが開催された。（P273） 【写真】オリンピック東京大会（東京オリンピック） 東京オリンピックは1940（昭和15）年に予定されていたが、日中戦争で中止になった。1964（昭和39）年10月の東京オリンピックはアジア初のオリンピックで、戦後復興を国内外に示した。（P272） 「昭和と平成の終わり」 【本文】2021（令和3）年には、新型コロナウイルス感染症の影響で1年延期されていた東京オリンピック・パラリンピックが、史上初めて無観客で開催された。（P280） 【写真】東京2020パラリンピック（P280）		
日 文	「都市国家の成立」 【本文】市民たちは、ギリシャ神話とよばれる共通の神々や英雄たちをめぐる物語に基づいてオリュンピア競技会（古代オリンピック）のような祭典を行い、同じギリシャ人としての意識を高めていきました。（P28） 【写真】古代ギリシャの壺にえがかれた徒競走のようす（P28） 「敗戦の前と後の日本を比べよう」 【写真】オリンピック東京大会の開会式のようす 明治神宮外苑競技場を取りこわして、1958年に完成しました。1964（昭和39）年には、93の国と地域の選手を集め、アジアで初めて開いたオリンピックの会場になりました。（P259） 「国民生活の変化」 【本文】1964年のオリンピック・パラリンピック東京大会に合わせて、名神高速道路や東海道新幹線が開通するなど、交通網の整備も進みました。（P277） 【写真】オリンピック東京大会の開会式 この大会は、日本の戦後復興と国際社会への復帰の象徴となりました。（P277）		

発行者	「教材名」	【掲載方法】	記述の概要（掲載ページ）
自由社	『日本の地位向上と外交』 【本文】1964（昭和39）年には東京オリンピックが、…アジアで初めて開かれました。（P266～P267） 「水泳ニッポンと1964年の東京五輪」 【コラム】 ・「フジヤマのトビウオ」と称賛 1948（昭和23）年7月、戦後初のオリンピック大会がイギリスのロンドンで開かれました。しかし敗戦国である日本はこの大会に参加を許されませんでした。日本の競技者や競技団体は落胆しましたが、大会期間に合わせて東京で開かれた全日本水泳選手権で、うつぶんを晴らす記録が生まれました。1500メートル自由形で優勝した古橋広之進と2位の橋爪四郎の両選手がほぼ同時期に行われたロンドン五輪の記録を40秒ほど上回る当時の世界記録を出したのです。（P269） ・日本人に自信与えた金メダル16個 その後日本は、1964（昭和39）年の東京オリンピック招致を目指すことになりました。当時の日本の国際的地位はまだ低く、国際オリンピック委員会（IOC）での票決は不利が予想されました。しかし、全米選手権での日本選手の活躍を見たロサンゼルス在住の日系人、フレッド・ワダ氏が私費で中南米を回り日本への支持を取り付けるなどして、招致を勝ち取りました。日本はこのオリンピックに向け、新幹線を走らせたり、高速道路網を整備したりするなど、経済発展をとげました。こうして、アジア初のオリンピックは大成功に終わりました。世界から訪れた選手や観客は、日本人の大会運営能力や礼儀正しさなどに感銘を受けました。オリンピックには93の国・地域の5588人が参加しました。マラソンでエチオピアのアベベ選手が2連覇をなしとげ、体操の女王チェコスロバキアのチャスラフスカ選手の正確で美しい演技が、人々を魅了しました。その中で日本の選手も大活躍し、女子バレーボールチームが宿敵ソ連を破って優勝しました。また男子体操競技での金メダル5個と団体戦での2連覇をなしとげるなど、合計16個の金メダルを獲得し、日本の競技力の高さを世界に示しました。その後も日本は札幌、長野の冬季五輪を開催し、2021年の東京夏季オリンピック・パラリンピックの招致にも成功しました。（P269） 【写真】古橋選手の水泳写真（P269） 「平成から令和へ」 【表】令和時代（令和4年まで）の主な出来事（P279） 「新幹線の歴史をつくった人々」 【コラム】戦前の計画が生きた 東海道新幹線の工事が始まったのは1959（昭和34）年4月のことです。それから5年半ほどのちの1964年10月1日、東京～新大阪間を走り始めました。前回の東京オリンピック開会式の9日前で、日本中がお祝いムードに包まれました。（P284）		
育鵬社	「ギリシャ文明」 【写真】競走の様子がえがかれた壺 ギリシャ南部のオリンピアでは4年に一度、スポーツ競技を行うオリンピアの祭典が開かれ、ギリシャ各地の人々が参加した。これを起源に19世紀末、近代オリンピックが始まった。（P36） 「高度経済成長」 【本文】1964（昭和39）年には、アジア初となる東京オリンピック・パラリンピックが開かれ、これに合わせて東海道新幹線や高速道路も開通しました。（P260） 【写真】東京オリンピック開会式の日本選手団入場の様子（P260） 「日本文化の国際化と多様性」 【本文】2016年のリオデジャネイロオリンピック閉会式では、安倍晋三首相（当時）がゲームキャラクターの姿で登場しました。（P263） 「日本の役割」 【本文】2度目の東京オリンピック・パラリンピックは1年延期され、2021（令和3）年に行われました。（P271） 【写真】新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、1年延期して無観客で開催された東京2020オリンピックの開会式（P271）		
学び舎	「消えた東京オリンピック」 【コラム】第12回夏季オリンピック（1940年）は、東京（冬季は札幌）で開催されることが、1936年の国際オリンピック委員会で決定された。しかし、1937年に日中戦争が激しくなると、政府は鉄などの重要物資の使用をおさえ、戦争遂行に直接必要でない建設工事の中止を求め、鉄や皮革などの使用を制限した。このため、オリンピックスタジアムの建設は困難となった。陸上競技のスパイク・砲丸・ハンマー・槍・円盤・ハードルなども準備できなくなった。一方、スイスのオリンピック委員会は、「日本が中国に対する軍事行動をやめなければ、東京大会への参加を取りやめるよう各国に呼びかける」と決議した。実際に、アメリカなどの不参加が予想された。このようななかで、日本政府は、1938年、東京大会と冬季の札幌大会の開催を返上することを決めた。（P223） 【写真】東京大会ポスター（公募作品） 武人はわがデザインされている。（P223） 「東京オリンピック」 【本文】1964年、アジアで初めてのオリンピック・パラリンピックが東京で開かれ、テレビ放送は人工衛星で海外にも同時中継されました。新たに独立したアジア・アフリカの国々が加わり、参加国・地域は、それまでで最高の93となりました。マラソンでは、エチオピアのアベベ選手が優勝しました。閉会式では、この日にイギリスから独立したザンビアの選手が、新しい国旗を持って行進しました。アメリカや西ヨーロッパなど西側の資本主義国、ソ連など東側の社会主義国がメダル争いを演じました。しかし、アジアでは、中国・北朝鮮・北ベトナムなどは参加できませんでした。（P264） 【写真】 ・東京オリンピック開会式 日本の選手団355人中、女子は61人。沖縄からの選手の参加はなかった。（P264） ・閉会式で行進するザンビアの選手（P264） 【表】アジアで開かれたオリンピック・パラリンピック（夏季）（P264）		

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
令書	「ギリシャ・ローマの文化」 【注】ギリシャのポリス ポリスはそれぞれが独立した国家で、政治形態も異なった。1,000以上のポリスが存在し、ギリシャ全体は統一されなかったが、ギリシャ人には共通の言語と神話があり、同じ民族としての意識を共有していた。4年に1度行われたオリンピアの祭典には多くのポリスが参加した。これは近代オリンピックの元となった祭典である。(P45) 「戦時体制に入った日本」 【本文】この年は東京でオリンピックが開催される予定だったのです。我が国はオリンピック実施に向けて準備を進めていましたが、日中戦争（日華事変）で国際的な批判を受けたうえに、戦時下にあつて競技場などの建設資材の調達が困難となったため、昭和十三年に開催を辞退することになりました。「幻の東京オリンピック」と呼ばれています。(P366) 【資料】幻となった1940年東京オリンピック 1940年東京オリンピックは、アジアで初めて開催されるオリンピックになる予定だったが中止となり、その代替地として、招致で東京の次点だったヘルシンキが予定されたが、第二次世界大戦の勃発により中止となった。大戦後、1960年（昭和35）の夏季大会に東京が再び立候補したが落選。しかし1964年（昭和39）の夏季大会に当選し、アジアで初のオリンピックが東京で開催された。(P366) 「高度経済成長と石油危機」 【本文】昭和三十九年（一九六四）に、アジアでは初となる東京オリンピックが開催されました。昭和十五年（一九四〇）の東京オリンピックは準備段階で戦争を理由に辞退したので、まさに念願が実現したといえます。東京大空襲により、東京の大部分は焼け落ちましたが、東京オリンピックのころまでには高層ビルが建ち並ぶ新しい東京に生まれ変わっていました。(P426) 「日本が生んだ新幹線」 【コラム】昭和三十九年（一九六四）、終戦後まもない我が国は、東京オリンピックに沸いていました。…無用の長物であると批判されてきた高速旅客鉄道計画ですが、オリンピックとの相乗効果はすさまじく、日本での成功を見た世界各国に新幹線モデルが輸出されるまでになりました。(P427～P428) 「古代オリンピックと近代オリンピック」 【コラム】近代オリンピックが始まったのは明治二十九年（一八九六）で、その前身となった古代オリンピックは古代ギリシャで行われていた「オリンピアの祭典競技」です。古代オリンピックの始まりは次のような言い伝えによります。伝染病の蔓延に困り果てたエーリス王のイーピトスがアポロン神殿に祈りを捧げたところ、スポーツの競技会を行えという神勅が下りました。当時、抗争していたスパルタ王のリュクールゴスと協定を結んで競技会を行ったのが古代オリンピックの始まりです。考古学の研究によると第一回目の競技は紀元前八世紀以前と考えられています。それ以降、四年に一度、競技会が行われることになり、だいに参加国が増え、やがて全ギリシャの諸国が参加するようになりました。仲が悪かった国同士がスポーツを通じて友好関係を築いたことからオリンピックは当初から平和の祭典でした。また神勅によって始まった祭典なので、オリンピック前後は聖なる日とされ、大会の前後は紛争当事国には停戦が勧告されていました。戦っていた国同士が運動会をやると、なぜ殺し合いをしていたのか、馬鹿らしく思えてくるようなことが本当にあったのかもしれませんが。しかし、三九二年にローマ帝国が国教をキリスト教に定めたことにより、オリンピック信仰が持続できず、三九三年、二九三回目に一六九九年にわたる伝統的祭典は幕を下ろします。ところが、一八九二年になると、フランスのピエール・ド・クーベルタン男爵が「ルネッサンス・オリンピック」のなかでオリンピック復興構想を掲げ、多くの賛同を得て、一八九六年に近代オリンピックが聖地アテネで行われることになり、現在に続くオリンピックの原型ができあがりました。日本人が初めて参加したオリンピックは明治四十五年（一九一二）のストックホルム・オリンピックです。また、今まで日本で開催されたのは、夏季オリンピックは一九六四年に東京、冬季オリンピックは札幌、長野となっています。そして、令和二年（二〇二〇）の東京オリンピックは新型コロナウイルスの影響で一年延期して開催されました。(P431) 「震災と世界の中の日本」 【本文】東日本大震災の翌々年、二〇二〇年の東京オリンピックの招致が決定しましたが、新型コロナウイルスの影響で一年延期となりました。(P446・P448)

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
東 書	「国風文化」 【コラム】貴族の娘 紫式部も清少納言も、父親は朝廷の役所に勤める中流貴族で、「式部」「少納言」という呼び名は父親の官職にちなんだものでした。天皇やきさきに仕えた女性の多くは、こうした中流貴族の娘たちでした。豊かな教養を身に付けていた彼女らは、和歌や知的な会話の場で、男性の高級貴族と対等にわたり合いました。（P56） 「武士の生活」 【本文】惣領が亡くなったり引退したりときには、あとつぎ以外の子にも土地の一部をゆずる分割相続が行われました。女子にも分けあたえられたので、女性の地頭も多くいました。（P73） 【コラム】武士の妻 鎌倉時代の女性は、財産や使用人の管理など、家の中を取り仕切る重要な役目を果たしていました。特に御家人の妻は、夫の死後に地頭の職や遺産を受けついたり、あとつぎを決めたりしていました。（P72） 「村と百姓」 【コラム】女性への教え 江戸時代の寺子屋で教科書として広く使われた「女大学」には、女性の務めとして、結婚したら夫やその親に従うことなどが教訓として書かれていました。女性は子を生み、家を守ることだけが期待されていたのです。こうした教えはありましたが、実際には、農村では女性は重要な働き手で、都市でも、武家屋敷や商家に勤め、自立する女性もいました。（P123） 「社会問題の発生」 【本文】紡績業や製糸業の労働者は、大半が女性（工女）で、賃金は低く、長時間にわたる厳しい労働をしていました。一方、男性の労働者は多くが鉱山や運輸業で働いていました。（P193） 「民主主義の拡大と労働者の権利」 【本文】総力戦となった第一次世界大戦では女性も大きな貢献をしたため、戦後の欧米諸国では、女性の社会進出が進んで、高等教育の機会が増え、さまざまな職業に就くようになりました。また女性は多くの国で選挙権を得て、民主主義の新たな担い手になりました。（P209） 【コラム】女性の政治参加を求めて 欧米諸国では、19世紀後半に男性の選挙権が拡大しましたが、女性の選挙権については、国政ではほとんどの国で認められていませんでした。20世紀に入ると、各国で女性の国政での選挙権を求める運動が盛んになりました。イギリスでは、言論だけにたよらず、デモを行ったり暴力的な手段に訴えたりする女性もいました。第一次世界大戦後、女性が総力戦に大きく貢献したことを受けて、イギリスをふくめた多くの国で、女性の国政での選挙権が認められるようになりました。その一方で、各国の国会議員や政府に選ばれる女性の比率は、21世紀に入っても低いままになっています。（P209） 【表】国政で女性の選挙権が認められた時期（P209） 「女性による運動」 【本文】女性差別からの解放を目指す女性運動も盛んになりました。「新しい女」を目指し、青鞥社を結成して女性の解放を唱えてきた平塚らいてうは、1920年に新婦人協会を設立し、女性の政治活動の自由、女子高等教育の拡充、男女共学などを求める運動を広げました。また、女性が政治に参加する権利を求める運動も本格化しました。（P214） 【資料】青鞥社の宣言（P214） 【コラム】女性の権利獲得を目指した運動家 1911年に文芸誌「青鞥」創刊号に寄せた…文章は、女性運動の象徴となりました。新婦人協会では、市川房枝（1893～1981）らとともに活動し、女性の政治団体加入や集会参加の権利を獲得しました。（P214） 「男性普通選挙の実現」 【本文】加藤内閣は1925年、納税額による制限を廃止して、満25歳以上の男性に選挙権をあたえる普通選挙法を成立させました。…しかし、女性には引き続き選挙権はあたえられませんでした。（P215） 「都市の生活」 【本文】都市ではバスガールや電話交換手などの働く女性が増加し、女性の社会進出が進みました。（P217） 「民主化」 【本文】選挙法が改正され、選挙権が満20歳以上の男女にあたえられました。（P248） 【写真】初めての女性国会議員 この年に39人の女性の衆議院議員が誕生しましたが、3年後には12人に減少しました。（P249） 「日本国憲法の制定」 【本文】日本国憲法の制定にともない、民法が改正され、男女平等に基づく新たな家族制度が定められました。（P249） 【表】民法の比較（P249） 【写真】男女共学 教育基本法は、教育の機会均等、男女共学、義務教育などを定めました。（P249） 「バブル経済崩壊後の経済」 【コラム】女性の社会参画 第二次世界大戦後の日本では、憲法などに男女の法的な平等が定められた反面、男性は仕事、女性は家庭という性別役割分業が残り、就職や昇進などの機会を十分に得られませんでした。その改善を求める運動が行われる中、1979年の国連総会で女子差別撤廃条約が採択されたことを受けて、1985年に男女雇用機会均等法が制定されました。さらに、1999年には男女共同参画社会基本法が制定されるなど、女性の社会進出を支援する施策が積極的に推進されています。（P263） 「持続可能な社会」 【本文】2015年の国連サミットでは、持続可能な開発目標（SDGs）が採択され、2030年までに達成すべきものとして、…男女平等…など、17の目標がかかげられました。（P265）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
教 出	「武士の暮らし」 【本文】 武家の女性は、土地を相続することができたため、地頭になり、一族の中心として領地を支配する女性も現れました。（P68） 【注】 やがて、惣領の男性一人に相続させる単独相続が行われるようになり、女性の財産の権利も制限されるようになっていきました。（P69） 「働く女性や子どもたち」 【コラム】 女性や子どもと農業 祭りのために華やかな服を着た女性たちが田植えをしています。…田楽を行ったり、苗を運んだりしている男性が描かれています。行事のときだけでなく日常でも、女性たちは男性と同様に、こうした農作業に参加していました。（P88） 【コラム】 女性や子どもと商工業 商人や職人として活躍の場を広げる女性も増えていきました。特に機織りや帯売りなどの繊維関係の職種や、魚などを売る商人には女性が多かったことが文献資料からも確認できます。当時、女性も男性と同様に、農業や商工業など、暮らしには欠かせないさまざまな仕事に従事していたのです。（P89） 「国民国家の成立」 【コラム】 国民の権利と女性 フランス革命のときには、行進などに多くの女性も参加しました。しかし、選挙権は、一定の経済力のある成年男性にのみ与えられることになりました。また、革命の成果として、国民議会が示した人権宣言によって得られた権利の多くは、女性には認められませんでした。そうした状況に反対した女性活動家のオランブ＝ドゥ＝グージュは、1791年に「女性宣言」を発表し、男女同権を訴えました。しかし、グージュの訴えは、すぐに実現することはありませんでした。フランスで女性の選挙権が認められたのは、1944年のことでした。現代につながる近代的な国家が形づくられた時期であっても、女性の権利などでは、現代の私たちから見れば多くの課題を残していたのです。日本でも、第二次世界大戦後に女性の参政権が認められるようになるなど、人権の拡大には長い時間がかかりました。（P157） 【資料】 女性宣言（P157） 「厳しい労働条件」 【本文】 工場労働者のうち、特に、産業革命の中心となった製糸業や紡績業で働く女性たちは女工とよばれていました。女工たちの多くは農村からの出かせぎで、苦しい家計を助けるために、労働時間が長いわりに賃金が低いなど、厳しい条件のもとで就業しました。（P196） 「教育の普及」 【本文】 日露戦争後になると、義務教育が6年間に延長され、就学率も100%に近づいて、男女の差もほとんどなくなりました。…高等教育では、国立の東京大学や、女性教員を養成するための女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）が設立されました。また、民間でも、…津田梅子が女子英学塾（現在の津田塾大学）を設立するなど、女子教育が盛んになりました。（P198） 【表】 義務教育の就学率の移り変わり（P198） 「新兵器と総力戦」 【本文】 参戦した国々では、軍需産業を優先する政策がとられ、徴兵された男性に代わり、女性や青少年が軍需工場で働かされました。（P209） 「社会運動の高まり」 【本文】 女性を社会的な差別から解放し、その地位を高めようとする運動は、明治時代の末から平塚らいてうらが進めていました。大戦後には、市川房枝らによって、女性の参政権の獲得を目指す運動も起こりました。（P220） 【写真】 平塚らいてう 女性だけで編集した、女性のための雑誌『青鞥』を発刊しました。（P221） 【資料】 『青鞥』の宣言（P221） 「男子普通選挙と治安維持法」 【本文】 1925年には普通選挙法が成立し、満25歳以上のすべての男子に衆議院議員の選挙権が与えられる、男子普通選挙が実現しました。（P221） 【表】 全人口に占める有権者数の割合（P221） 「都市の生活」 【本文】 タイピストやバスの車掌、電話交換手などの職業に就く女性も増え、「職業婦人」とよばれました。…男性に続いて女性にも洋服が普及（P222） 「民主化政策の始まり」 【本文】 女性参政権が認められ、満20歳以上の男女に選挙権が与えられました。（P254） 【写真】 女性の国会議員の誕生 1946年4月、戦後初の衆議院議員選挙が行われ、当選者464名のうち、39名の女性が当選しました。有権者数は、約3688万人に拡大しました。（P254） 「憲法に基づく法律の整備」 【本文】 明治時代につくられた民法は改正され、「家」の制度が改革されて、男女同権の新しい家族制度が定められました。法律上、夫と妻が同等の権利をもつようになり、財産の相続でも、男女平等に相続することが決められました。学校制度は、…男女共学が原則となりました。（P256） 「平和を築くために」 【本文】 社会的な男女の不平等を解消していくことは、国民の課題です。（P281） 【表】 各国の国会議員に占める女性の割合（P281）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
帝 国	「中世の老人と子ども、女性」 【コラム】古代から中世にかけて女性の地位は高く、財産をもつことや相続することも認められていました。また奈良時代までは、生まれた子は母親に属すると考えられていました。そのため、母方の姓を名乗る人も多く、『万葉集』などによれば、娘の結婚には母親の承認が必要でした。鎌倉時代以降に商業が発達し、市などが各地にできると、外で商いをする女性も数多く登場しました。中世までは、このような女性の地位や権利が広く認められていました。（P93） 【絵】大原女 族の産地であった京都北部の大原から、薪や炭などを頭上に載せて都まで売りに来ていた女性たちです。頭に手ぬぐいを巻き、筒袖をつけた独特な姿は、燃料に乏しかった都の人たちの心をとらえました。 「文治政治への転換」 【本文】庶民の家でも、男の家長を主人とする「家制度」ができ上がり、財産や家業などを家長から長男一人が受け継ぐようになりました。また、男尊女卑の風潮が社会に根付き、特に女性は、小さいときには親に従い、結婚して夫に従い、老いて子（長男）に従うことが求められました。（P137） 【コラム】女性と学問 女性は『女大学』などの教科書で儒教思想や読み・書きを修めることで、自分の考えを表現する素養を身につけました。学んだ知識を用いて武士の家へ奉公に出て、経済的に自立する女性もいました。（P137） 「新政府の外交」 【写真】岩倉使節団に同行した女子留学生 政府が派遣した最初的女子留学生です。最年少であった津田梅子は、アメリカで11年間、教育を受けました。帰国後、1900年に女子英学塾（後の津田塾大学）をつくり、女子教育に生涯をささげました。（P194） 「女性と政治」 【本文】憲法によって男性の権利が認められるようになった一方、女性の権利は制限を受けました。自由民権運動には女性の参加者もあり、男女同権を主張していました。しかし、女性には選挙権が与えられませんでした。さらに1890年の法律で、女性は政治活動も禁止され、政治の世界から締め出されました。また、江戸時代から続く、男性を一家の中心とする考え方が民法などの法律に定められ、女性は「家制度」の下に置かれました。（P203） 【絵】岸田俊子 京都出身の女性自由民権運動家で、全国各地で女性の権利拡大、男女平等を訴え、女性の教育や自立を追い求めました。（P203） 【資料】民法に見る「家制度」（P203） 「民主主義の高まり」 【本文】イギリスでは女性に参政権が認められ（P233） 【コラム】社会に羽ばたく女性たち 欧米諸国では、第一次世界大戦で戦場に向かった男性を女性が支え、軍需工場で働くなどして貢献しました。その働きが認められ、女性が参政権を獲得しました。この影響を受け、日本でも女性の社会進出が進み、女性参政権獲得の運動も活発になりました。（P233） 【表】女性の選挙権が認められた年、有権者数のうちわけ（P233） 「女性による社会運動」 【本文】女性差別の解消を求める運動も盛んになりました。1911年に平塚らいてうらが青鞥社をつくり、女性に対する差別や古い慣習を批判しました。1920年代には、市川房枝らも運動に加わり、女性の政治集会への参加が認められましたが、女性の選挙権獲得は1945年まで待たなければなりませんでした。（P241） 【資料】機関誌『青鞥』発刊に際して（P241） 「都市化と大衆の登場」 【本文】欧米諸国の影響を受けて、バスの車掌やタイピスト、電話交換手など、「職業婦人」とよばれる働く女性も増えてきました。（P243） 【写真】乗合自動車（バス）で勤務する女性車掌 女性は家を守ることが仕事とされてきましたが、大正時代から昭和初期にかけて、バスの車掌や飲食店での給仕、電話交換手などの仕事に携わる女性（職業婦人）が増え、女性の社会進出が進みました。（巻頭 2） 「『母性保護論争』を考察する」 【表】3人の女性運動家の意見（P248） 【資料】 ・女性活動家のプロフィール 与謝野晶子、平塚らいてう、山川菊栄（P249） ・当時の女性の労働と家事をめぐる環境 職業婦人の既婚率、主な女性の職業とその平均月収、大正時代の主婦の家事時間（P249） 「民主化政策の進展」 【本文】政党の自由な政治活動と20歳以上の男女の普通選挙が認められました。その結果、女性議員が誕生しました。（P280） 【写真】初めての女性国会議員 1945年に女性の選挙権や参政権が認められ、翌46年の総選挙で39人の女性国会議員が誕生しました。しかしその後、女性の国会議員はなかなか増えていません。（P281） 「憲法に合わせた新しい法律」 【本文】新憲法では男女の同権や結婚の自由が定められ、結婚は本人どうしの合意によるものとなり、これを受けて民法も改正され、夫と妻は法律上、同じ権利をもつとされました。（P281） 「男女共同参画社会へ」 【コラム】高度経済成長の下、「男は仕事に打ち込み、女は専業主婦として家庭を守る」という性別役割の考えが強まり、女性は結婚後も仕事を続けることが難しくなりました。そうしたなか、1979年に国際連合の総会で「女子差別撤廃条約」が採択され、日本でも、1986年に男女雇用機会均等法が施行されました。これにより、女性の社会進出を後押しする風潮がしだいに高まっていきました。男女雇用機会均等法が成立した年に、労働基準法も改正され、女性保護規定は大きく緩和されました。その一方で、男女の賃金格差や管理職割合の差などが課題として残りました。現在でも、各国の男性に対する女性の割合を表すジェンダー・ギャップ指数において、政治と経済の分野における日本の指数の低さが課題となっています。（P293） 【写真】女性のバス運転手 これまで男性が多かった職業にも、女性が就くようになりました。（P293）

発行者	「教材名」	「掲載方法」	記述の概要（掲載ページ）
山 川	「国風文化と平安文学」 【本文】男性の役人が使う政治上の文書では漢文が用いられていたのに対して、かな文字は女性が日常的な表記に用いたため、宮廷社会の女性たちがかな表記を使って文学作品を書き記すようになった。（P55） 「武士の生活」 【本文】土地や財産などの相続は分割相続が原則であり、家長をつぐ者だけでなく、その兄弟や姉妹にも領地がゆずられた。鎌倉時代までは女性の相続権も強かったため、地頭になる女性もいた。（P72） 「町衆の生活」 【本文】阿国のかぶき踊りが流行し、やがてこれを基に女性の演じる歌舞伎が生まれた。（P119） 「身分と社会」 【本文】武家では、女性の地位は低く、子どもを産んで家をとだえさせないことが役割とされた。（P122） 「市民革命の影響」 【本文】フランスでも、人権宣言が想定していたのは男性であり、女性には参政権があたえられなかった。（P159） 【人物】オランブ＝ド＝グージュ フランス革命当時、人権や主権は基本的に男性が持つものと考えられ、人権宣言の文章も「男性」や「男性市民」などの語を用いて書かれていた。女性作家オランブ＝ド＝グージュは、これらの語を「女性」や「女性市民」に置きかえた女権宣言を発表して、男女平等の実現を主張した。（P159） 「教育制度の改革」 【本文】当初は、授業料がそれぞれの家の負担であったことから、子どもを学校に通わせない親も多く、特に女子の就学率は低かった。（P173～P174） 「近代日本と女子留学生」 【コラム】 ・女子留学生の派遣 当時、女性が母親として家庭で行う、男子への教育を重視する考えがあり、岩倉具視も家庭内での教育を充実させるには女子の教育が必要と考えたため、留学期間10年という条件で募集が行われた。（P185） ・帰国後の活動 女子留学生には、アメリカの家庭生活を学ぶことが期待されていたため、10年間という長期の留学期間が設定され、年齢が低い女子が選ばれた。しかし、三人の生涯の活動は家庭にとどまるものではなかった。津田は、女子が男子と同じように学問を学べる場として、1900（明治33）年に女子英学塾（のちの津田塾大学）を創立した。山川も女子英学塾の顧問・理事などを務めて、津田を支えた。永井は音楽の教師として西洋音楽を日本に伝える先駆者の一人となり、退職後は女子英学塾で働いた。三人がともにたずさわった女子英学塾では、英語教師の育成が重要視された。卒業生の多くが教職に就くことで女性の自立をうながし、日本の英語教育にも重要な役割を果たした。例えば、当時の英語教育が読み・書きだけにかたよっていたことを問題視し、自然な英語を聞き、話し、読み、書ける教育を目指して、1930年代前半に『津田リーダー』や『津田英文典』という新しい教科書を作成している。三人の女子留学生は、政府の意図とは異なり、女性が社会進出をしていくうえでの重要な足跡を残したのである。（P185） 【写真】 ・女子英学塾 1934（昭和9）年8月の『会報』第39号によると、卒業生1177人中274人が教職に就いている。（P185） 「大日本帝国憲法の特徴」 【用語解説】民法 1890（明治23）年に公布されたが、日本の慣習に合わないと批判されたため、1896（明治29）年から98（明治31）年にかけて改正して公布された。欧米諸国と同じように一夫一妻制度が確立され、妻の地位は安定したものになった。ただし、戸主（一家の主人）の権限が大きく、男性に比べて女性の地位は低いものとされた。（P189） 「帝国議会の開設」 【本文】選挙権があたえられたのは満25歳以上の男性で、直接国税15円以上をおさめる者に限られており、有権者数は全人口の約1％（約45万人）に過ぎなかった。（P189） 「労働者と社会問題」 【本文】紡績業や製糸業で働く労働者の大半は、農村から出かせぎにやって来た若い女性（工女）で、…鉱山業や運輸業の労働者は男性中心であった（P206～P207） 【表】明治時代後期の工女の一 日 明け方から夜までおよぶ長時間労働で、生糸市場が好況のときには、労働時間が18時間まで延長されることもあった。（P206） 【資料】製糸工女の実態（P206） 「総力戦」 【本文】国家が経済を管理し、男性のいなくなった職場へ女性が進出するなど、総力戦はそれまでの社会のあり方を変化させた。（P215） 【写真】兵器工場で働く女性 多くの男性が兵士として戦場に送られたため、女性がかわりに労働をになった。戦時中の女性の活躍は、女性の地位を高めることにつながった。（P215） 「戦後の社会」 【本文】第一次世界大戦中から戦後には、総力戦により社会進出を果たした人々、とりわけ戦争への協力を求められた女性の地位が高まった。その結果、ロシア・ドイツ・アメリカ・イギリスなどで女性参政権が実現した。（P219） 【資料】女性参政権の実現 イギリスで発行された、女性参政権を求める印刷物。イギリスでは第一次世界大戦中の1918年に女性参政権が認められた。（P219） 「社会運動の高まり」 【本文】社会的に地位の低かった女性の解放を目指す運動は、明治時代末期に平塚らいてう（明）らによって女性文学者団体の青鞥社が結成されてから本格化した。1920（大正9）年には、平塚と市川房枝らを中心に新婦人協会が設立され、参政権を要求するなど女性の地位を高める運動を進めた。（P226） 【資料】青鞥社の宣言（P226） 「普通選挙法の制定」 【本文】満25歳以上の男性全てに衆議院議員の選挙権があたえられ、有権者数はそれまでの約4倍に増えた。しかし、女性には選挙権はあたえられなかった。（P227） 【表】有権者数の増加（P227） 「都市化と生活の洋風化」 【本文】タイピストや電話交換手などの新しい仕事に就く女性も現れ、職業婦人と呼ばれた。…服装は洋服を着る男性が増える一方で、女性はまだまだ和服が中心であったが、職業婦人の増加や女学校での制服に洋服が採用されたことから、女性の間にも次第に洋装が広がっていった。（P230） 「非軍事化と民主化」 【本文】1946（昭和21）年には戦後初の衆議院議員総選挙が行われ、39名の女性議員が誕生した。（P257） 「新憲法による変化」 【本文】改正された民法では、家族に対する戸主の支配権が否定され、男女同権の新しい家族制度が定められた。（P258） 【表】日本国憲法公布にともなう法律の制定・改正 憲法の理念と矛盾しないよう、法律の制定や改正が行われた。例えば、旧民法では結婚には「戸主ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス」とあったが、日本国憲法では「両性の合意のみに基いて成立」とされた。（P258）		

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
日 文	「各時代の女性」 【コラム】 ・古代の女性 政治や文化での活躍 古代の女性は、のちの時代に比べて、政治や文化の面での活躍がめだちます。邪馬台国の卑弥呼や飛鳥時代の推古天皇のように、国王や天皇になる女性もいました。大化の改新から奈良時代までは、14代の天皇のうち6代が女性です。律令国家を建設し、新しい政治を進めていくうえで、女性の天皇は大きな役割を果たしました。 平安時代には女性の天皇はみられなくなりますが、貴族の女性たちは、優美な国風文化の担い手となっていきました。紫式部の『源氏物語』は人間の心理をたくみにえがいた作品ですが、1000年前の女性が長編小説をあらわしたのは、諸外国でもみられないことです。数多くの女性がかな文字を用いて、優れた和歌や随筆・日記を書き記し、日本の古典文学をかたちづくりしました。（P57） ・中世の女性 武家の社会と女性たち 鎌倉時代の女性の地位はどのようなものだったのでしょうか。 武家の「家」の女性の場合、女性も親から所領や財産を譲り受ける権利をもち、譲り受けた財産を、結婚後もそのまま管理することができました。 また、離婚した際には、これらの財産に加え、婿家の家財道具をもち去る権利ももっていました。さらに夫と死別して「後家」となった際は、遺言を受けて家の所領を配分することができました。 特に子どもを生み育てた「後家」の権利は強く、北条政子の活躍もこうした権利の延長線上にあるといえます。（P77） ・中世の女性 商工業を担う女性たち 商工業が発達した14世紀以降、その担い手として、女性の活躍がめだつようになりました。例えば、南北朝時代、京都で綿を売り歩いていた座の構成員のなかには、「阿久利女」や「鶴女」といった女性がいました。また、室町時代に成立した「七十一番職人歌合」には、機織りや帯売・縫物師などの女性がえがかれており、女性が織物生産と深くかかわっていたことがわかります。（P93） ・近代の女性 日本初の女子留學生と女子教育 岩倉使節団に同行し、アメリカへわたった女子留學生のうち、永井繁子（1861～1928）は10年後、津田梅子（1864～1929）と山川捨松（1860～1919）は11年後に留学を終えて帰国しました。津田は、その後2度目のアメリカ留学を行い、生物学などを学んだほか、寄付を集めて日本の女子のための奨学金制度をつくりました。その制度を利用して25人が学んでいます。帰国後は、1900（明治33）年に、女子の高等教育機関である女子英学塾（のちの津田塾大学）をつくりました。山川は女子英学塾の理事となって津田を支えたほか、音楽の教師となっていた永井は、後に女子英学塾で教えています。また、津田の留学先の友人も来日して英語などの教育にあたりました。（P185） ・近代の女性 家制度と社会運動 1898年に制定された民法では、「家」の家長である戸主が「家族を統率する権利」をもち、女性は良き妻・良き母となること（良妻賢母）が幸せであると考えられ、それを目的とした教育も行われました。そうしたなか、「家」を中心とした良妻賢母をめざす女性の生き方に疑問をもつ女性が現れました。平塚らいてうは、雑誌『青鞥』を創刊し、新しい女性の生き方を主張しました。与謝野晶子は『青鞥』に詩を寄せて、女性が一人の人間として生きる自覚をもつよう訴えました。（P207） 【資料】青鞥社の宣言（P207） ・近代の女性 女性の政治参加を求めて 女性の解放は、青鞥社の設立以来、本格的に運動が始まりました。新婦人協会の運動は、市川らによる女性参政権獲得運動に引きつがれ、第二次世界大戦後の女性参政権実現に大きな影響をあたえました。市川は戦後、25年にわたり国会議員として活躍しました。（P228） ・現代の女性 女性の地位向上への改革 女性参政権の実現に続き、女性の地位向上をうながす法律ができました。日本国憲法第24条には、家族関係における男女平等が明記されました。労働基準法は、賃金における女性差別を禁じ、出産休暇の権利を認めるなど、女性の職場進出を支えました。また教育基本法は男女共学をうながし、女性が大学に進学する機会も広がりました。（P264） 「武士と農民」 【本文】領地は一族のあいだで分割相続され、女性も領地をつぐ権利をもち、女性の地頭もみられました。（P76） 【表】分割相続 御家人の大夫能直の死後、…土地を相続していた妻が、1240年に子どもらに相続したときのようすです。（P76） 「産業革命の影響」 【本文】熟練した技術を必要としない賃金の安い職種には、女性や子どもが多くやとわれました。（P159） 「初期議会期の藩閥政府と民党」 【本文】この民法では、「家」を重視する家族制度のもと、家長である戸主に大きな権限が認められました。女性には、財産の相続や結婚などで男性と同等の権利が認められていませんでした。（P195） 【資料】民法（P195） 「労働者と農民」 【本文】日本の主要産業である紡績業・製糸業を支えたのは、出かせぎの若い女子労働者でした。（P205） 「教育の普及」 【本文】女子教育も重視されはじめ、津田梅子の女子英学塾（のちの津田塾大学）などが設立されました。（P208） 【表】小学校の就学率の変化（P208） 「新兵器と総力戦」 【本文】主要な参戦国では多くの男性が徴兵されたため、女性や青少年も軍需工場に動員されて働きました。（P219） 「大戦後の欧米諸国」 【本文】第一次世界大戦後の欧米諸国では、総力戦を支えた労働者や女性の発言力が高まり、民衆の政治参加が進みました。イギリスでは女性の参政権が認められ、1924年には労働組合などによって結成された政党が初めて政権を獲得しました。（P223） 【表】主な国の普通選挙制の成立（P223） 【コラム】変わる社会とファッション 女性の社会進出が進み、働く女性たちが増えるなかで、第一次世界大戦のころから女性の服装に変化が起きます。動きやすくシンプルで機能的なファッションが求められるようになっていったのです。フランスのデザイナーだったココ・シャネルは、これまでの常識にとらわれない新しいスタイルを発表し、当時の多くの人々に受け入れられていきました。（P223） 「差別からの解放を求めて」 【本文】1920年には、平塚らいてうが市川房枝らと新婦人協会を設立し、政治活動の自由などを要求しました。その結果、女性の政治団体への参加や政治集会への出席を禁じた治安警察法の条文が改正されました。市川はその後、女性の選挙権を求める運動を起こしました。（P228～229） 「男子普通選挙の実現」 【本文】加藤内閣は1925年、満25歳以上の男子すべてに衆議院議員の選挙権をあたえる普通選挙法を成立させました。しかし、女性や植民地に住む人々には、選挙権が認められませんでした。（P229） 【表】有権者数の移り変わり（P229） 「都市の生活」 【本文】タイピストや電話交換手などの新しい職業につく女性も登場して職業婦人と呼ばれました。（P230） 「敗戦の前と後の日本を比べよう」 【写真】戦後初の選挙で演説する女性の候補者（P258） 「日本国憲法の成立」 【本文】1946（昭和21）年4月、戦後初の衆議院議員総選挙が行われ、初めて女性議員が誕生しました。（P264） 【写真】投票する女性有権者と初めての女性国会議員 戦後初の衆議院議員総選挙で、約1380万人の女性が投票し、39名の女性国会議員が誕生しました。（P265） 「民主化の進展」 【本文】教育の分野では、新しい教育の理念を示した教育基本法が制定されました。…男女共学を認めることなどが盛りこまれました。…家族制度については、男性優位の「家」を重視したそれまでの民法が改正され、結婚や親権、相続などについて、男女同権と個人の尊重を原則とした内容になりました。（P265） 「解放感と希望」 【本文】手に職をつけようと、洋裁を学ぶ女性も増えました。（P267） 「国民生活の変化」 【表】進学率の移り変わり（P277） 「解決をせまられる国内課題」 【本文】男女格差の状況は先進国のなかでも最低レベルといわれており、男女共同参画社会の実現は急務です。（P285）

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
自由社	「縄文土器の時代」 【本文】男たちは動物の狩りと漁に出かけ、女たちは植物の採集と栽培に精を出し、年寄り火のそばで煮炊きの番をするといった、一家団らの生活の場面が想像されます。（P23） 「縄文時代のイメージの変化」 【本文】子孫を生み育てる女性をかたどった独特な形の土偶（P23） 「寺子屋」 【コラム】寺子屋の教育 女子には裁縫や活け花も教えました。（P132） 「岩倉使節団」 【注】岩倉使節団にはアメリカで勉強するために5人の幼い女子留學生が随行していました。のちに女子教育に貢献した津田梅子はわずか6歳でした。（P176） 【コラム】日本人最初の女子留學生・津田梅子 17歳までアメリカで学んだ後、日本で女性のための学校をつくるという希望を胸に帰国しました。しかしアメリカで受けてきた教育と、日本での教育との違いに梅子は苦しみました。…1900（明治33）年、女子英学塾という私塾を創立しました。個人指導を通して、英語だけでなく、広い視野と自立心を持った女性を育てようという画期的な学校でした。戦後、津田塾大学となります。（P18） 「総力戦」 【写真】工場ではたらく女性 多くの男性が出征したことで、女性の社会進出をうながすことになりました。（イギリス）（P215） 「大正デモクラシーと社会運動」 【本文】女性の地位を高める婦人運動も開始され、平塚らいてうなどの活躍によって、婦人参政権や女子高等教育の拡充がさげられました。（P219） 【資料】各国で普通選挙が始まった年 「…表を見ると女性の選挙権は日本だけでなくどの国も遅れているわ。」（P219） 「都市の生活」 【本文】バスガールや電話交換手など女性の職場が増えて、職場の制服や女学生の制服が普及し、洋服を着る女性が増加していきました。（P223） 「国民の動員」 【本文】多くの青年男子が召集されて戦場におもむいたため…未婚女性は女子挺身隊として工場ではたらくことになりました。（P242） 【写真】勤労動員 軍需工場で働く女学生。生徒・学生は学校単位で引率され、組織に属さない女性は市・町・村が主体となった女子挺身隊に編成されました。（P242） 「GHQと戦後改革」 【本文】日本政府は、婦人参政権の付与…などさまざまな改革を行いました。（P256） 【写真】日本最初の婦人代議士 1946年、婦人参政権が認められました。戦後初の衆議院議員選挙には多くの女性が立候補し、39人の婦人代議士が誕生しました。（P257）
育鵬社	「武士の暮らし」 【本文】この時代は、財産は惣領のあとつぎ以外の子どもにも分割相続されました。女性の土地相続も認められていたため、地頭や御家人になる女性もいました。（P74） 「藩校と寺子屋」 【本文】寺子屋の先生は僧、武士、医師、神官、町人などさまざまで、女性もいました。（P143） 「資本主義と労働・社会問題」 【本文】熟練した技能を必要としない職種では、女性や子どもも雇われました。（P159） 「黒船の来航」 【コラム】日本人についてのペリー艦隊の報告 「日本人女性の多くは、男と同じように進んだ知識を持ち、女性独特の芸事や日本固有の文字によく通じている」（P165） 「岩倉使節団」 【写真】シカゴでの女性留學生たち 2人目は津田梅子（当時満6歳）。計14年にわたって学び、帰国した梅子は、1900（明治33）年に女子英学塾（現在の津田塾大学）を設立し、女子教育と英語教育に力を注いだ。（P178） 「帝国議会の開設」 【本文】選挙権があたえられたのは、直接国税15円以上を納める25歳以上の男子に限られていたため、有権者は、総人口約4000万の1.1%（約45万人）でした。（P185） 「第一次世界大戦の終結」 【写真】兵器工場で働く女性 ヨーロッパでは、男性が戦争に動員されたため労働力不足が発生し、女性労働者が増加した。これが女性の社会進出を進める背景となった。（P211） 「女性解放運動」 【本文】当時、女性は、参政権がないなど社会的活動が制限され、地位が低い状況でした。平塚らいてうは、明治の末に女性だけの文学団体、青鞥社を結成し、古い習慣を打ち破る「新しい女」をかかげて女性の解放を唱えてきました。その後、平塚は市川房枝らとともに1920（大正9）年に新婦人協会を設立し、女性の政治参加などを求める運動を行いました。3年で解散しましたが、女性の政治集会への参加を認めさせました。市川らはその後も、女性参政権獲得を目指す運動を続けました。（P216～P217） 【コラム】女性解放運動の先がけとなった平塚らいてう 「元始、女性は実に太陽であった」。これは、1911（明治44）年に創刊された『青鞥』の冒頭に記された、らいてうの言葉です。ここであらいてうは、古代の日本女性を思い浮かべて、明治のころのさまざまな制約からの女性の解放を求めたのです。自分の生き方に悩んだらいてうは、宗教書や哲学書を読み、禅に没頭しました。そして恋愛問題をきっかけに、日本女性のあるべき姿に強い関心を持つようになりました。そうした中で生まれた『青鞥』は、日本女性解放運動の先がけとなり、らいてうは生涯にわたってこの運動にたずさわりました。（P217） 【資料】『青鞥』創刊号の発刊の言葉（P217） 「男子普通選挙の実現」 【本文】第1回普通選挙は1928（昭和3）年に実施されました。有権者はそれまでの約4倍に増え、国民の意見は政治に反映されやすくなりました。しかし、女性には、選挙権はあたえられませんでした。（P217） 「都市化と文化の大衆化」 【本文】女性の社会進出が進み、都会には洋装の女性も見られるようになりました。（P220） 【写真】街を歩く若い女性 大正期の若者は、最先端のファッションで銀座にくり出した。（P220） 「昭和の恐慌」 【本文】借金返済のための女性の「身売り」が大きな問題となりました。（P225） 「国家総動員体制」 【本文】男子の多くが戦地に向かったため、女性が職場を支えました。（P236） 【写真】勤労動員 工場で働く女学生。25歳未満の未婚女子は、勤労挺身隊として軍需工場に動員された。（P236） 「民主化」 【本文】20歳以上の男女に選挙権があたえられ、女性の参政権が初めて実現し、1946（昭和21）年に行われた戦後初の衆議院総選挙で、39人の女性議員が当選しました。（P250） 【写真】初めての女性国会議員 1946年4月の衆議院議員総選挙で39人の女性国会議員が誕生した。（P250） 「新しい法律」 【本文】民法が改正されて、個人の尊厳と男女平等の考えから、夫と妻が同じ権利を持つことなどが定められました。また、教育の目的を示して、…男女共学…を定めた教育基本法が制定（P251） 【写真】男女共学 1947年から教育基本法が施行され、男女共学も認められるようになった。（P251）

発行者	「教材名」	【掲載方法】	記述の概要（掲載ページ）
学び舎	「『うつくしきもの』」		
	【本文】男性は結婚すると妻の家に入り、その両親と同居しました。子どもが生まれると夫婦が自分の家をもつことが多くなります。妻が夫の両親と同居することはありませんでした。奈良時代ごろの夫婦は、どちらか（多くは夫）が相手の家に通うという形で、結婚生活をつづけました。子どもは、妻の家で育てられました。（P51） 「帯と扇のネットワーク」		
	【コラム】生糸を染め、布に織るのは、女性の仕事でした。織った絹織物を手広く商う女性もいて、帯座の亀屋五位女は、京都の広い範囲で、帯を売る権利をにぎっていました。扇づくりも、女性の仕事でした。布袋屋玄了尼は、3人の女性をやとい、自分も扇をつくっていました。彼女は扇座の長として、京都での販売権の半分をおさえていました。（P74）		
	「寺子屋の風景」		
	【コラム】寺子の数は20人ぐらいい、さまざまな年齢の男女が、いっしょに学びました。男子に比べて、寺子屋に通う女子は少数でした。…町では、女性の師匠もいました。（P126）		
	「国民の権利、女性の権利、黒人の権利」		
	【本文】21歳以上の男性のすべてが、選挙権を得ました。しかし、女性には選挙権は認められず、政治集会への参加も禁じられました。劇作家のオランブ＝ド＝グージュは、「女性の権利宣言」を発表し、「女性は生まれながら自由であり、男性と同等の権利をもつ」と、第1条に掲げました。（P141）		
	「インド大反乱のなかの女性」		
	【コラム】インド大反乱には、多くの女性が参加していた。小国の王妃ラクシュミー＝バーイーは、女性軍を編成して戦い、イギリス軍を驚かせた。（P149）		
	「義務教育が始まる」		
	【本文】女子の通学率はとても少なく、男子の半分ほどでした。（P165）		
	【資料】就学率（入学した子どもの割合）と通学率（通学する子どもの割合）の変化（P165）		
	「6歳の女子留学生」		
	【コラム】女性の教養を高めることも必要だと考え、1871年、6歳の津田梅子をふくむ少女5人を、10年間の予定でアメリカに留学させた。…このころ、日本の女性は10代のうちに、家が決めた相手と結婚することが多かった。梅子は、このような生き方に疑問をもち、再びアメリカの大学に留学した。帰国後の1900年、男性と同等なレベルの教育をめざして、女子英学塾（津田塾大学）を開校し、多くの教師を養成した。（P167）		
	「富岡製糸場から村の工場へ」		
	【コラム】英は退所するときに、工場長から「操縦は兵隊に勝る（糸をとる工女の役割は兵隊よりも大きい）」と励まされました。英は故郷の村に建てられた製糸場で、多くの工女に技術を伝えました。（P168）		
	「女性にも参政権を」		
	【コラム】1878年、地元の議会議員の選挙に参加しようとしたところ、戸主であっても女性には選挙権はない、と拒否されました。男性と同じように税金を納めているのに、女性というだけで投票できないのはおかしいと考え、わざと税金を滞納しました。そして、県に払うように督促された時に、男女同権なら納税するので、男女同権かどうか教えてほしいと願い出しました。1880年、土佐郡上町町会は、女性戸主の参政権を認める町会規則を定めて県庁に提出しました。県側は女性を除くように指示しましたが、町会側がねばりつづく理由の説明を求めて交渉した結果、ついに、女性にも参政権を認める規則が実現しました。（P170）		
	【写真】		
	・女性参政権発祥の地の碑 上町などの女性の参政権は1884年の法改正によって廃止された。（P170）		
「国会開設の署名運動」			
【本文】岸田俊子は、1882年、大阪の演説会ではじめて演説をしました。西日本の各地を演説してまわり、その影響で岡山などに女性の結社が生まれました。1883年、京都で女子大演説会が開かれ、岸田ら4人の女性が演説しました。大津（滋賀県）でも、岸田は「函入娘」と題し、女性をしばる古い道徳を箱にとえ、それを破る必要があると訴えました。岸田は集会条例に違反したとして捕まり、罰金刑を受けました。（P171）			
【絵】女子大演説会で壇上に立つ岸田俊子と太刀ふじ（8歳） 俊子は20歳の時、土佐で自由民権運動と出会った。（P171）			
「帝国議会が開かれる」			
【本文】女性には選挙権は認められませんでした。また、政治集会への参加や政治結社への加入も法律で禁止されました。第1回の帝国議会で、植木枝盛たちは女性の権利を認めるようと、この法律の改正を主張しました。衆議院では、女性の政治集会への参加などを認める議員が多数でした。しかし、「女性の本分は家庭にある」という考え方は根強く、女性の政治活動を禁じる法律は改正されませんでした。（P175）			
「変わる世界の女性たち」			
【説明文】			
・アメリカ合衆国の女性たち アメリカでは、第一次世界大戦を通じて経済が発展し、家電製品が普及し始めました。女性の社会進出がすすみ、さまざまな職業につくようになり、参政権を得て、政治にも参加するようになりました。（P182）			
・フランスの女性たち ココニシャネルは、女性の身体をしめつけていたコルセットを使わずに、伸縮性のあるジャージ生地のドレスをつくりました。また、黒一色のドレスを発表し、黒は喪服の色というイメージを変えました。（P182）			
・トルコの女性たち 第一次世界大戦後、トルコでは革命が起こって、共和国が誕生しました。初代大統領は西欧化政策をすすめ、ムスリム（イスラム教徒）の女性が着るヒジャブ（顔や体をおおう布）は好ましくないとしました。（P182）			
日本の女性たち 1920年代になると、都市では洋服姿の女性が見られるようになりました。医師・電話交換手・デパート店員・バス乗務員など、さまざまな分野で活躍し、職業婦人と呼ばれました。（P183）			
・中華民国の女性たち 辛亥革命ののち、民主的な考え方が広まるにつれて、女性の姿にも変化が見られるようになりました。纏足の風習が少なくなる一方、動きやすい服装や西洋の服装を楽しむ女性が増えました。（P183）			
【写真】			
・参政権を求めるデモ（1913年）（P182）			
・布で顔と体をおおう女性（P182）			
・大統領の娘たち（1930年代）（P182）			
・日本人女性の写真（2点）（P183）			
・中華民国の女子中学生（1910年代）（P183）			
・清（中国）の女性（1870年代）（P183）			
【絵】1880年代のドレス、黒一色のドレス（P182）			
「国民も動員された」			
【本文】男性が戦場に行ったため、女性が食料生産の中心になりました。武器や弾丸をつくる工場でも、多くの女性や少年が働きました。（P197）			
「月のように生きたくはない」			
【本文】当時、女性には選挙権も財産権もなく、自分の意思で結婚する自由もありませんでした。太陽である男性に従い、月のように生きることが、女性のあり方だとされていたのです。『青鞥』は、このような考えや制度を打ち破り、女性の人間としての可能性を開かせようと、よびかけました。新聞や雑誌は『青鞥』を激しく非難しましたが、女性たちからは共感の手紙が多く寄せられました。（P206）			
【注】小学校卒業後の進学先には、高等小学校2年、中学校（男子）5年、女学校4～5年などがあった。女学校への進学率は、1920年に9％、1925年には15％近くになった。（P206）			
【絵】			
・少女運だめし双六 ふりだしは「学校時代」、将来なりたい職業を、それぞれ上りに選んで遊ぶ。（P206）			
・新案少女双六の上り「生け花」「読書」「琴」「掃除」「裁縫」などをへて、「子どもに囲まれた母」が上りとなる。（P206）			
「女性たちが団結すべきとききた」			
【本文】1919年、平塚らいてうと市川房枝は、女性の社会的地位を向上させるために、女性の団結を訴え、新婦人協会をつくりました。当時、女性は政治集会を主催することも、参加することも法律で禁止されていました。そこで、新婦人協会は、この法律の改正を求めて署名を集め、ねばり強く請願を続けました。その結果、1922年に法律が改正されて、女性も政治集会を主催し、参加できるようになりました。以後、女性の選挙権を求める運動がすすみました。（P206～207）			
【写真】平塚らいてうと市川房枝 新婦人協会の活動に協力する男性も多く、集まった署名の4割以上が男性のものだった。（P206）			
「一票を手にできなかった人たち」			
【本文】市川房枝は、女性参政権を実現する運動を広げました。演説会を開き、署名を集めて議会に請願しました。運動は高まり、1931年に衆議院で、条件つきで女性の地方参政権を認める法案が可決されました。しかし、貴族院では反対論が根強く、女性参政権は実現しませんでした。（P209）			
【写真】女性参政権を求める5万枚の請願書（P209）			
【注】条件つき女性参政権法案 市町村の選挙に限り、女性参政権を認めた。議員に当選した女性は、夫の同意を必要とするものだった。（P209）			
「映画と流行歌」			
【本文】女性が、バスの車掌や電話交換手など新しい職業に進出し、職業婦人と呼ばれました。（P214）			
「戦後の女性」			
【本文】働き手のいなくなった家では、女性や老人が、米づくりや馬の世話などの農作業をしました。（P233）			
「弟はアメリカンで死んだ」			
【本文】1945年8月、敗戦から10日後には、戦争中におさえられていた女性参政権を求める運動が、再び始められました。12月、法律が改正されて、20歳以上の男女が、普通選挙権を得ます。…山口シヅエ（28歳）は…「女性が働きやすい社会にしましょう」と訴えて、当選しました。この選挙で、39名の女性議員が誕生しました。衆議院議員に占める女性議員の割合は8.4％で、当時としては世界でも高いものでした。（P248）			
【写真】街頭演説する山口シヅエ（P248）			
「『洗多吉』からの解放」			
【本文】1950年代、「お洗濯の苦労から奥様を解放」などの宣伝とともに、電気洗濯機が売り出されました。（P262）			

発行者	「教材名」 【掲載方法】 記述の概要（掲載ページ）
令 書	「遣唐使の中止と国風文化」 【本文】世界的にもかなり早い時期に女流作家が活躍したのは、上流階級の女性の働き先があったことと関係があります。天皇が居住する後宮は男子禁制とされたため、宮中に多くの教養ある女性が求められました。（P104） 「鎌倉幕府の最盛期」 【本文】鎌倉時代の武家社会では、女性も領地を与えられ、自分の財産を持ち、地頭や御家人になる者も現れました。御成敗式目からは鎌倉時代の女性の地位が高かったことが分かります。（P129） 【文献史料】御成敗式目（P130） 「イギリス産業革命と資本主義」 【本文】改良された機械は難しい技術が必要としなかったため、女性や子供も雇われました。（P279） 「岩倉使節団」 【注】使節団には…当時満6歳だった津田梅子ら5名の女子を含む42名の留学生が随行し、各国に留学した。（P294） 「都市と農村の生活」 【本文】製糸業や紡績業では、多くの女性が工女として働きました。（P334） 「女子教育」 【注】岩倉使節団に同伴して米国留学した津田梅子が、明治33年（1900）に女子英学塾（後の津田塾大学）を設立したほか、日本女子大学校が設立され、女子教育が盛んになった。（P336） 「大正デモクラシー」 【本文】大正十四年（一九二五）、加藤高明内閣が二十五歳以上の男子に選挙権を認める普通選挙法を成立させ、有権者は約四倍に増えました。しかし、女性に参政権は与えられず、男女同権を求める運動はしだいに高まっています。（P346） 「女性運動の展開」 【注】欧米では戦争に協力した女性たちの政治的関心が高まり、米英独露などで女性参政権が認められた。日本では明治44年（1911）に平塚らいてう（ちょう）が女流文学者の団体である青鞥社を立ち上げ、文芸誌「青鞥」を発行し、大正9年（1920）に平塚は市川房枝らとともに新婦人協会を創設し、女性参政権運動を中心に、女性の地位向上の運動を展開した。だが、女性参政権が認められるのは昭和20年（1945）を待たなければならない。（P347） 「都市生活の変化」 【注】大戦景気で商工業が発達すると、農村から都市への移住者が増えて都市化が進み、洋室の応接間を備えた文化住宅が流行した。都市ではタイピスト、バスガール、電話交換手として働く女性が増えた。（P348） 「農村の惨状」 【注】昭和恐慌は農村に深刻な打撃を与えた。娘の身売りや…（P359） 「戦局の暗転と疲弊する日本」 【本文】多くの男子が兵隊になったため、国内の軍需工場などには、二十五歳未満の未婚の女子が勤労挺身隊として動員されました。（勤労動員）（P382） 「真岡郵便電信局事件」 【コラム】当時、電話交換業務を担になっていたのは真岡郵便電信局に勤める若い女性職員たちでした。（P397） 「GHQの占領政策」 【本文】新選挙法により、婦人参政権を認め、二十歳以上の男女が選挙権を持つようになりました。（P413） 【注】昭和21年（1946）4月に新選挙法のもとで戦後初の衆議院議員選挙が行われ、39名の女性が当選した。（P413） 「教育改革」 【注】昭和22年（1947）に教育基本法が制定され、教育改革が実施された。教育の機会均等、男女共学が定められ（P416）

「別紙３」 【 （２）構成上の工夫 】 （中学校 社会 歴史的分野）

発行者	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた工夫	ユニバーサルデザインの視点	デジタルコンテンツの扱い
東 書	・「見方・考え方」を働かせるマークを設け、学習を深められるようにしている。 ・各章の終結部に「ウェビング」「ステップチャート」などの思考ツールを活用して学習内容を考察する「まとめの活動」を設け、思考を整理し、学びを深められるようにしている。 ・「みんなでチャレンジ」コーナーを設け、対話的な活動を効果的に実践できるようにしている。	・見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用している。 ・全ての生徒の色覚特性に適應するようにデザインされている。	・紙面に付された二次元コードを読み取ることで、内容の理解につながる動画やシミュレーション、思考ツールなどのコンテンツを利用することができる。
教 出	・冒頭の「歴史にアプローチ」で、本編各章の学習で「見方・考え方」を働かせながら学習を深めていけるように配慮している。 ・各章の導入の場面では、生徒の興味・関心が高まるような、写真・図版などの資料をわかりやすく提示し、円滑に授業に入っていくことができるように工夫している。 ・資料の読み解きのための「THINK!」などのコーナーや、1時間の学習をまとめる「確認」・「表現」のコーナーを設け、生徒が自ら学び、自ら考える学習が展開できるように配慮している。	・見やすさ・読みやすさに配慮したユニバーサルデザインフォントを使用している。 ・色覚の個人差を問わず、より多くの人に見やすいカラーユニバーサルデザインに配慮している。	・章のとびらのページに二次元コードを読み取ることで、資料の読み解きのポイントを示した動画や、学習に役立つ様々なコンテンツを利用することができる。
帝 国	・「タイムトラベル」、「世界とのつながりを考えよう イラスト編」では、大きなイラストを示し、重要な場面を探し出す課題を設定するなどして、生徒の興味・関心を引き出し、主体的・対話的な学習活動に使えるようにしている。 ・単元を貫く「章の問い」、「節の問い」や章末の「学習を振り返ろう」等、問いが構造化され、単元のまとまりの中で「主体的・対話的で深い学び」が実現できる構成になっている。	・見やすく読み間違えにくいユニバーサルデザインフォントを採用している。 ・特別支援教育→ユニバーサルデザイン（UD）の観点から、色覚特性に配慮した色づかいとなるように工夫している。	・巻頭や裏表紙等に掲載している二次元コードを読み取ることで、「タイムトラベル」や動画、思考ツール等の学びを支援するコンテンツを利用することができる。
山 川	・各パート冒頭の学習課題や、最後の「ステップアップ」だけでなく、パート内の随所に豊富で多様な種類の発問を設け、主体的・対話的で深い学びができるようにしている。	・本文には見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用している。 ・色覚の個人差を問わず、多くの人に見やすいよう、カラーユニバーサルデザインを取り入れている。	・随所にある二次元コードを読み取ることで、資料等の拡大画像や博物館のウェブページなどを見ることができる。

「別紙3」 【 (2) 構成上の工夫 】 (中学校 社会 歴史的分野)

発行者	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた工夫	ユニバーサルデザインの視点	デジタルコンテンツの扱い
日 文	・複数の資料をもとに、歴史について自分で考えたり、対話したりして歴史を学ぶ面白さを体験できる「チャレンジ歴史」を設けている。 ・話し合いなどの対話的な活動を行う箇所「学び合い」のマークを付している。	・見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用している。 ・より多くの人に見やすいカラーユニバーサルデザインに配慮している。	・紙面の二次元コードを読み取ることで、動画や資料、ワークシートなどを利用することができる。 ・二次元コードからアクセスできるコンテンツのある箇所には、マークとともに「画像」「リンク」など、資料の内容を示している。
自由社	・「調べ学習のページ」を設定し、生徒の探究を促している。 ・「時代の特徴を考えるページ」において、「歴史用語ミニ辞典」を生徒がつくるという課題を設定することで、時代比較、人物比較、意見交換会などを通じて、学んだことを自分で構造化できるようにしている。	・重要語句をゴシック体の太字にする、ふりがなを全てゴシック体にするなど、読みやすいよう工夫している。	・「調べ学習のページ」では、図書館調査とインターネット調査の実施についても扱っている。
育鵬社	・「課題をつかむ」→「課題について調べる」→「課題についてまとめる・表現する」という問題解決型の学習を進めるにあたり、学びのテーマ、学び方の方法や手段、まとめ方などを示し、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を促している。	・見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用している。 ・特別支援教育やユニバーサルデザインの観点から、色覚特性に配慮した色づかいとなるよう工夫している。	・目次、各章の冒頭にある二次元コードを読み取ることで、学習内容に関連する動画や博物館のウェブページなどを利用することができる。
学び舎	・生徒の関心を引き出す図版や記述等の教材を用いて、生徒自ら感じ考える主体的な学びにつなげている。 ・章や部のまとめでは、将軍、大小の商人、百姓、アイヌなど様々な人びとへのインタビュー記事をつくる表現活動などを通して「主体的・対話的で深い学び」を図っている。	・より多くの人が見やすいカラーユニバーサルデザインに配慮している。	・章末の「歴史を体験する」では、インターネットを活用した学習活動も扱っている。
令 書	・「グループで歴史を調べよう」のページで、身近なものや興味のあるものの歴史をグループで調べる方法について紹介している。 ・小テーマ毎に最初に「課題」を設定するとともに、最後に「考えよう」の項目を設定している。 ・各章の最後には、表をまとめる作業及び自分の言葉で時代ごとの特色をまとめる課題が設定されている。	・重要語句をゴシック体の太字にする、ふりがなを全てゴシック体にするなど、読みやすいよう工夫している。	・序章の「歴史カードを作ってみよう」では、人物について、図書室の本やインターネットを使って調べることを促している。